



駒

z o n e

2011  
3  
Third

## 目次

---

将棋小説

「四間少女」

**LOVE譜**

「恋の多面指し-1」

「恋の相右玉」

将棋小説

「やっぱりあの銀の戦法」

写真物語

「お城はあきた」

将棋短歌

将棋小説

「七割未満」

「ツクモさん、指しすぎです！」

将棋エッセイ

「駒とおむすびとペンギン」

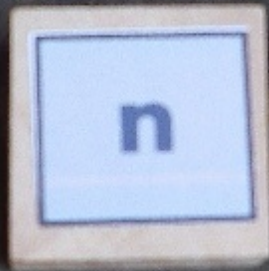
「存在論的、将棋的」

月子のチェス日記

「チェ的」

将棋講座

「桜の激悪逆転講座」



vol.3



清水らくは

朝七時起床。隣の部屋から父さんのいびきが聞こえてくる。洗面所に行き、顔を洗う。鏡の中には、まだ少し眠そうで、釣り目でちょっと意地悪そうな顔。

キッチンに行き、牛乳をレンジにかける。クロワッサンを二つ、お皿に乗せる。母さんがいなくなっただけからは、これが日曜日の定番になった。ただ今日は、いつも一緒に食べていた兄さんがいない。

ラジカセのスイッチを入れる。父さんは昔から「食事中にテレビを見るな」と口酸っぱく言っていた。そんなわけで我が家の食卓では、ラジオの音が流れるのが普通である。

ホットミルクが喉からお腹を温めていく。ラジオからは「午後から雨模様でしょう」と。折り畳み傘を忘れないようにしないと。

「起きてたのか」

びっくりして振り返る。ぼさぼさの髪をかきむしりながら、パジャマ姿の父さんが立っていた。

「今日、大会だから」

「ああ……そうだったか。何のだっけ？」

「植木鉢大会」

「ああ、あれか。頑張れよ」

そう言うと父さんはリビングを出ていった。また寝るのだろう。

食器を洗い、ラジカセのスイッチを切る。忘れ物がないか確認。財布の中に支部会員証が入っているかもチェック。前回忘れて割引が利かなかったのだ。

「行ってきまーす」

誰も聞いていないとわかってても、言わないと出ていけない。

駅までは歩いて十分。日曜の朝は本当に静かだ。途中で、青いジャージのおじさんが、私を追い抜いて行った。それ以外は誰にも会わなかった。

無人駅の古い機械で、切符を買う。裏は白い。私以外には誰も待っていない。数分後やってきた列車にも、数人おばあさんが乗っているだけだった。

鞆の中から、ノートを取り出す。兄さんの四間ノートは、予想以上に深い考察がされていた。単なる定跡の研究だけではなく、相手が間違えやすい手をどう咎めるか、プロは指さないがアマには有力な変化、相手心理を揺さぶる端歩のタイミングなどがびっちり書き込まれていた。

兄さんは小中高と全てで代表になった県内屈指の強豪だ。普段からずっと将棋のことばかりで、昔はそんな姿を馬鹿にしていた。兄さんは全国大会でほとんど勝てないことに悩んでいて、いつかベスト4ぐらいにはなりたい、とよく言っていた。全国の高校生の中でベスト4なんて大言壮語もいいことだと思ったけど、それに見合うだけの努力もしていた、と思う。

兄さんへの見方が変わったのは、自分も全国大会へ行ってからだった。中学の女子大会、県予選で参加が私一人だったので一局も指さずに代表選手になった。最初は旅行できてラッキー、ぐらいに思っていた。けれども大会に行ってみて、一勝もできなくて、負けることの悔しさを知った。私より強い人は、私より努力しているのだとわかった。だから、私も努力した上で勝てないのかどうか知りたいと思ったのだ。

努力は、どんどんと結果に結びついていった。地元の男子にも勝てるようになり、ついには兄さんに勝つことを目標にできるようになった。高校一年目は、まだまだ遠いと感じた。けれども秋にはいいところまで勝ち上がって、もう少しだ、そう思った。けれども、兄さんとの対戦はできなくなってしまった。春の大会にはとても間に合わないし、秋には受験生だ。

だから私の今の唯一の目標は、トップになることだ。高校県代表。女子でそれを成し遂げた人は、あまりいないらしい。だけど、全く届かない目標というわけではない。兄さんが出れない以上、ハードルは低くなったとも言えるのだ。

電車で約40分。そこからバスで10分。ようやく目的地の公民館に着いた。受付の前にはすでに何人か並んでいて、横には賞品の植木鉢が積み上げられていた。この大会はどこかにあるという「植木大会」に対抗して作られたのだが、半分冗談みたいなもので、植木鉢が欲しいという人はあまりいない。みんな将棋を楽しみに来るのだ。

「あ、佳乃子ちゃん久しぶり」

受付のお姉さんが、微笑んでくれた。よく会うのですっかり顔なじみだ。

「お久しぶりです。A級の支部会員で」

「はい、頑張ってるね」

会場に入ると、いつも通りの面々が見える。一番多いのがおじさん。あとは子供たち。若者は少なく、女性は数えるほどだ。

いつもは兄さんと一緒なので、大会に一人で来るのは初めてだったりする。予想よりも心細かった。一人で椅子に腰かけて、詰将棋の本を開く。ノートは、何となく見られなくなかった。

この大会はスイス式トーナメントで行われる。同じ勝数の人同士が当たるようになっていて、できるだけ細かく順位が付くようになっているのだ。負けた同士でも次の対局が付くので、実戦

練習にはもってこいと言える。

開催委員長の挨拶が終わり、対局の組み合わせが発表された。名前を呼ばれ、指定された席に移動する。私の前に座ったのは、初めて見るおじさん。こちらを確認するなり、少し目を丸くした。会場に若い女性は私一人、A級に限って言えば女性自体私だけなのだからまあ当然の反応だろう。

振り駒をして、先手になった。

「お願いします」

礼をして、対局が始まる。私は角道を止め、相手は右銀をどんどん出てきた。棒銀だ。最も定跡の知識が試される戦型と言ってもいいだろう。

思い出しながらだけではなく、局面をしっかりとみて考える。これは、兄さんに教えられたことだ。相手が定跡を外した時も、流れの中で自然に対処できるように。兄さんは研究を重ねるだけでなく、臨機応変な対応でも秀でている。

駒がどんどん交換されていく。これは振り飛車ペース。あとは気を抜かず、仕上げていくばかりだ。時間をきっちりと使い、逆転の目がない順を探す。一気に攻めなくてもいい。相手の一発狙いを慎重につぶしながら、丁寧に、丁寧に……

「いやあ、負けた」

おじさんが頭を下げた。勝った。そのまま相手は立ち去ってしまい、感想戦はなかった。

午前中にもう一局やるようで、勝った者同士で次の対局が組まれた。指示された席に行くと、あまり歳の変わらなさそうな男子が座っていた。なぜか、私の顔をニヤニヤしながら見ている。

「こんにちは」

「……こんにちは」

「飯伏さんって言うんだね。幹太の妹さん？」

「え」

まぎれもなく幹太は兄さんの名だ。私の方は、このにやけ男のことはまったく見覚えがない。

「……そうですけど」

「いやあ、やっぱりそうなんだ。全国大会でよく幹太とは話したんだよ」

「そうなんですか」

「今年からこっちに引っ越してきたんだ。幹太に会うの楽しみにしてたんだけど……」

「兄さん今日は来てませんよ」

「そっかあ。残念だなあ」

ふわふわしてへらへらしているけれど、全国で知り合ったということは彼もまた全国レベルということになる。心の中で、気合のギアを一段階あげた。

「あ、俺は貴島ね。貴島伸広」

「……佳乃子です」

「かのこね。覚えた」

きじまのぶひろ、私もその名前を覚えた。貴島が駒を振り、私の後手に。

「じゃあ、お願いします」

「はい、お願いします」

初手から、飛車先の歩を伸ばされた。居飛車党宣言だ。そうなれば私も、気合で飛車を勢いよくスライドさせる。四間飛車で勝負。

貴島は、するすると穴熊に囲った。四間飛車には一番多い、がちがちに固める戦法だ。当然対策も考えてある。

貴島も慣れた道なのだろう、ほとんど時間を使わずにぼんぼんと指す。駒の持ち方が独特で、中指に乗せて半回転させるようにして駒を落とす。カッコいいとは思わないが、こなれた感じがちょっと憧れる。

勝負所がやってきた。桂馬を跳ねるか、端歩を突くか。この後相手は攻めてくるだろうから、二つとも入れることは難しい。桂馬だと、直接中央から攻める手に厚みが加わる。その代わり終盤、端攻めが遅い。端歩だと端攻めの味はできるけど、すぐ攻めるのは断念しなければならない。

私は、端を突いた。これは兄が得意にしていた手だ。私が居飛車側を持った時は、この手の方が嫌だった。

ノートにも、この変化のことは詳細に書かれていた。勝ちきるのは大変だが、落ち着いて指せば、十分戦えるはず、なのだ。

ただ、貴島は私以上に落ち着いていた。攻め急がない。ノートに書かれていない、穏やかな手を続けてきた。ここから先は完全に自力だ。ゆっくりと。じわじわと。慎重に……

中指から、零れ落ちた歩。

まったく読んでいない手だった。

焦点をそっと閉じる、最も小さな駒。どの駒で取っても、瞬間形が悪くなる。すぐにどうこうなるのか、それはわからない。ただ、嫌な予感がする。どうすべきか……

時計の音に急かされ、私は攻めの一手を放ってしまった。歩を放置したままでは、効果的にはならない、相手の思うつぼだ。貴島の、ふっと息を吐く音が聞こえた。ギアが入れ替わる音ではないかと思った。

苦しくなった。攻め始めたら、休んではいけない。反撃されたら、穴熊の暴力は止まらなくなる。

貴島は、間違えなかった。最善かはわからないが、悪い手は一切指さなかった。ぼろ負けになった。三手詰めになるまで指して、投了した。

「居飛車党でしょ」

開口一番、貴島はそんなことを言ってきた。私はびっくりして何も言えない。

「何か……お兄さんの真似しようとしてる？」

「……ないです」

「ん？」

「そんなこと、ないです」

凶星だと、認めるのは難しい。特に、将棋に負けた後は。

「そっか。ごめん」

「……また機会あれば、お願いします」

駒を直し、立ち上がった。感情が渦巻いて、爆発してしまいそうだった。ただ、はっきりと分かったことがある。貴島より、強くならなければいけない。

白髪の数学教師が、ぼそぼそとつぶやいている。

あの日以来、何かが変わってしまった。強く、もっと強く、兄さんよりも強く。それが私の想いだった。けれども、貴島は圧倒的な印象を私の頭の中に残していった。ただ勝つだけでなく、私の中身まで見抜いてしまった。悔しい。本当に悔しい。

まず私がしたことは、自分のノートを作ることだった。兄さんのノートはそれ自体完成されたものだと思う。だからそこに書き加えるのではなく、自分なりの研究を独立したものとして残すのだ。

ということをして、授業中にしている。先生はまったく生徒を気にしないので、何をしても注意されない。そして何を言っているかほとんど聞き取れないので、授業はまじめに受けるだけ損なのだ。

定規で縦横に線を引く。81マスが出来上がれば、将棋盤の完成だ。たったこれだけの広さの中から、数えきれないぐらいの棋譜が生み出されてきた。将棋は異様に奥が深い。

「起立」

気が付くと、授業が終わっていた。あっという間だった。

「佳乃子さあ」

「ん？」

「ずーとなんか書いてたよね」

「うん。ちょっとね」

「将棋？」

「ま、まあね」

「テストは大丈夫？」

「あー、どうかな」

イヨリは呆れながらも心配のまなざしを私に向けている。一年生の時は大変お世話になってしまった。私は客観的に見て勉強が得意ではない。

「でもまあ、どうせ授業聞いてもわからないし」

「何という開き直り。このままだと再試とか補講で将棋する暇とかなくなるよ」

「うー」

イヨリはいつも現実的だ。そんな彼女に助けられることで私は何とか生きている気がする。

「計画的に、ね」

「はい」

私の頭の中は、将棋の計画でいっぱいだ。そこに勉強をねじ込むのは大変だけれど、確かに今それを疎かにすると後々もっと大変になってしまう。



「ま、佳乃子は結局は何とかしちゃうよね。不思議と」

「底力ってやつね」

チャイムが鳴った。次は古典、厳しい先生なのでちゃんと受けないといけない。

「きじまのぶひろ……ああ、あれか」

いつもの病院にて。兄さんは貴島のことをあれ呼ばわりした。

「どんな人だった？」

「生意気だった。一つ下だけど」

「え……そっか、同学年か……」

「会ったのか」

「引っ越してきたんだって」

「へー。どこの代表だったかな……。対戦した時は負けたんだけど、やたら褒められて。振り飛車っぽい手がいいって」

「ふうん」

はっきりとその光景を想像することができた。態度からすっかり先輩だと思い込んでいたが、きっと誰に対してもあのような感じなのだろう。

「やたらと馴れ馴れしかったけど、将棋はしっかりしてたかな。ベスト8とか行ったんじゃないかな」

「そっか。……勝てるかな」

兄さんは私の顔をしばらく見つめて、首をかしげて、そして頷いた。

「頑張ればね」

「良かった」

「まあ、あいつがどれぐらい強くなったかは知らないけど。勝てない相手なんてそうそういないもんだ」

「ふふ、兄さんの全国での成績では説得力ないけどねえ」

「ははは、そっか」

兄さんはこうしていると、とても元気そう。今すぐにでも退院して、将棋だってできそうな気がする。けれども父さんの様子を見る限り、そんなことはないのだ。日に日に眉間の皺は深くなっていく。私には心配させまいと何も話さないのだろうが、もう十分心配している。

「まあ、秋は出られるだろうし、俺も貴島との対戦楽しみだなあ」

「秋出るの？ 受験は？」

「病院で飽きた。俺、学校行ってない方が成績伸びてるかも」

「そうかなー。私も入院した方がいいかな」

「佳乃子はどっちにしろ勉強しないだろ」

兄さんは私のことをよく知っている。私も兄さんのことをよく知っているつもりだ。けれども今、どんな苦しみを抱き、何を解決すればいいのか、それを知らない。

とりあえずは、できることをするしかない。こうして毎日病院を訪れること、そして、将棋をがんばること。

ついにこの日がやってきた。

春の大会、個人戦。連休の前半、病院に行く以外はひたすら将棋をしていた。女子高生としてはなんとも不健康な過ごし方だったけれど、後悔はない。これが私の青春だ。

この会場に来るのも二回目。去年は兄さんと二人で来たけれど、今年は一人。うちの高校には将棋部がなくて、私たち以外には熱心に取り組んでいる子もいない。完全アウェーだ。

「あ、佳乃子ちゃん」

と思ったら、知り合いがいた。馴れ馴れしく名前を呼ばれて、ちょっとびっくりした。

「あ、貴島」

同学年と知った以上、こちらも下手に出るわけにはいかない。

「いやあ、場所がわかんなくて迷った迷った。駅からこんなに歩くなんて」

「確かにここ、わかりにくいかも」

「思ったより人数多いんだね」

「そう？」

何となく和やかな会話になってしまった。きっとこの人には緊張感を盗む能力がある。

「まあ、何人いても全部勝てばいいんだけどね」

そう言うと貴島は、手を振りながらどこかに行ってしまった。まったくなんという人だろうか。自分が負けることなんて、ちっとも考えていないに違いない。

集まっている人々の様子は様々だ。とりあえず参加してみるかという人もいれば、団体戦でエネルギーを使い果たしてしまったかのような人もいる。ただ、私のように個人戦だけに賭けて、気合十分の人ももちろんいる、はず。

女子は私一人。だけど、もう慣れた。将棋というのはそういう世界だと割り切っている。ただ、相手の方はやはり意識するようで、負けたくない思いが強くなっているように見える。まあ、気持ちはわかる。

挨拶やらなんやらが終わり、いよいよトーナメント開始。午前に二回戦まで行われ、勝ち残った八人で再び抽選というシステムだ。どのパートもだいたい三人で、私はEパート。シードになることはできなかった。

相手は知らない人で、外見はひよろひよろとしていて、やたらときよろきよろしている。一年生で初めての参加に戸惑っているのかもしれない。

「あ、あの」

「はい」

「時計使うの初めてで……」

大会ではデジタルの対局時計を使用する。設定はすでに済まされているが、確かに初めてではどう扱っていいのかわからないだろう。

「えっと、指したらその手で押して、10分まではどんどん時間が減っていくの。で、10分過ぎたら一手30秒で、20秒になったら声が出て1、2、って言いだして、10まで読まれたら時間切れ負け」

「あ、ありがとうございます」

本当に分かったかは疑わしいけど、それはもう私のせいではない。慣れないうちは切れ負けなど結構してしまうのだが、それもまた勝負の要素。

「私が振るよ？」

「え、あ、はい」

と金が五枚。私の後手になった。

相手は飛車を三間に振ってきた。この場合はさすがに四間飛車にはしない。向かい飛車にして、じっくりと駒組みをしよう……と思ったけれど、序盤で隙ができたのでゆさぶりをかける。と、動揺したのか相手は時計を押し忘れた。指摘はしなかった。そして、指し手はもっと乱れた。一気に食い破り、そのまま勝ちきってしまった。

「負けました……」

「ありがとうございました」

茫然、と言った感じだった。昔の自分も、こんな風だったかもしれない。悔しさとかではなく、何が起こったのか、何が違うのかまったくわからないのだ。

何かのきっかけで、強くなろうと思い始める。彼にもそんな時が訪れればいいけれど。

次の一戦は知った顔だった。たまに一般大会でも見かける。それほど活躍しているイメージはないが、油断禁物。気合を入れ直して挑んだ。

またもや後手。相手の戦法は穴熊。組み方がいい加減だったので、あっさりと作戦勝ちになり、端攻めが決まって快勝した。あっという間の出来事だった。

「……何がいけなかったっすかね」

まだほかの対局が終わっておらず、部屋の中にその声は響き渡った。

「駒組みが……」

それ以上は言いようがなかった。まったく序盤の勉強をした形跡はなく、教え始めたら将棋講座になってしまう。

「そうすか」

相手も食い下がるということはない。勝負に執着がないようだ。

まだ周囲はほとんど中盤だった。貴島は前回準優勝の相手との勝負。じっくりした相矢倉になっている。最近まで居飛車党だったし、こういう局面は見ているだけでわくわくする。

当たり前だが、貴島は真剣な顔をして考えている。そして、ほとんど動かない。盤面を見つめて、時折ゆっくりと瞬きをする。そして薄く唇を空けて、息を吐き出す。とても落ち着いている。駒を持つ動作も無駄がなくて、まるで駒自身が意志を持って動いているかのようだった。

兄さんとは違うが、強い人独特の空気感が漂っている。相手だって県内二位の強豪だが、滲み出るものだけを見ればまったく足元にも及ばない感じだ。ちょっと、衝撃を受けている。

相手の仕掛けを、丁寧に受け続ける貴島。決してべたべたといった感じではなく、余裕をもっ

てスマートに受け止めている感じだ。手を抜かない。気を抜かない。リラックスする。なかなかできることではない。そして対局していない時の貴島の態度から考えると、本当に別人に思えてくる。

他の対局も見て回る。今はやりの角交換振り飛車が多い。考え方が楽なので、やってみたい気持ちはわかる。ただ、何となく好きにはなれない。急ぎ過ぎている気がするのだ。まあ、感覚的なものだけれど。

続々と対局が終わり始める。貴島も順当に勝ったようだった。ベスト8全員が出そろったところで、抽選が始まる。私は五番目にくじを引き、「4」を引き当てた。対戦相手の名前は望月。前回三位の選手だ。

望月は私と同学年、居飛車党で力強い指し手が印象的だ。前回の一位が卒業、二位が敗退ということで大きなチャンスだと思っているに違いない。

貴島は6番、反対の山だ。当たるとしたら決勝戦。

「強いんじゃない」

対局の終わった貴島は、ゆるい感じに戻っている。どこかにスイッチがあるのだろう。

「あんたこそ」

「まあ、あれは勝てる。……そういえばさ、お昼ってどうしたらいいの？」

「え、用意してないの」

「食堂とか使えるのかと思ってた」

「休みだよ。ちょっと歩いたらコンビニあるけど」

「見なかったなあ」

「裏の方」

「うーん、案内してよ」

「え、私お弁当持ってきたし、行く理由ないし」

「いいじゃん、わかった、なんかおごるよ」

「……わかった」

なぜだか、ライバルと並んで歩くことになってしまった。そもそも男子と一緒に買い物とか、そんなこと今まで一切したことがないのだ。周囲の目が気になる。

と思ったけれど、誰もこちらに興味はないようだった。皆決勝に向けて将棋のことを考えている、ように見える。

「やっぱ、幹太は来ないんだね」

「……兄さんは、入院してるの」

「え、そうなんだ。病気？」

「そう。見た感じは元気なんだけどね。秋の大会は出たいって言ってた」

「そっか」

コンビニに着く。貴島はかごにお弁当、ペットボトルのお茶、栄養ドリンク、そして缶のブラックコーヒーを入れていた。私はそこに板チョコを加えた。

「普段はどうしてるの」

「何が」

「ご飯」

「学校あるときは学食。俺、今ばあちゃんと二人暮らしでさ。ばあちゃんに迷惑かけられないし。そのうち俺が料理できるようにならないとね」

「そうなんだ」

「卒業までは戻れそうにないしなあ」

貴島にもいろいろ事情があるようだ。深く聞くのはやめようと思った。

会場近くに戻ってきて、中庭にあるベンチに腰かけた。横から見ると、案外貴島の鼻が高いことが分かった。

「さっきのさ……」

「ん？」

「さっきの相手、強かった？」

「何その質問。まあ、ね。結構普段から指してるんだろなあ、と思った。けどやっぱ、幹太に比べたら全然だなあ」

「そっか」

貴島は、頭一つ抜けている。このままいけば順当に優勝だろうけど、それは面白くない。私が、阻止してみせる。

一時になった。午後の対局、決勝トーナメントが始まる。

「じゃあ……次の次で」

手をひらひらと振りながら席に向かう貴島。ちょっと、グツときてしまった。

所定の位置に着席。望月は体格がよく、椅子が少し窮屈なのか体を揺らして最適な態勢を探していた。振り駒をして、先手。

これまで通り四間に振ると、相手は急戦の構え。四五歩早仕掛けと呼ばれる戦型だった。定跡がかなり詳しく整備されていて、どこで変化するのか、緊張する戦いだ。

望月の指し手は物理的に力強い。体重を乗せるようにして、駒を押し付けてくる。時折前の駒が吹っ飛ぶ。金が升目からはみ出している。その勢いに気圧されてはいけない。

馬を作った相手に対して、玉頭に嫌味を付けて対抗する。この戦型には付き物の展開だけど、実戦経験は少ない。ノートの記述と、自分の感覚を信じて進んでいくしかない。

守りが崩れ始める。そして、すでにお互い秒読みになっている。最善は逃すかもしれないが、悪手を指さないように注意する必要がある。こちらの方が逃げ道が多いので、少し強気に攻められる。捨て駒から、スピードアップの手が見える。手筋だけど、これで寄らないと駒を渡すので自玉の危険度も増す。どうするか。いや、これはもう、決断するしかない！

望月の動きが止まった。この手を読んでいなかったことがうかがえる。10秒、電子音が響く。私も、頭をフル回転させる。20秒、望月の手が盤上に現れて、少し震えながら自らの玉をつかむ。玉で取るのが最強の手だとは分かっていた。それに対して桂馬、角と追い打ちをかける。攻め続けていける、大丈夫だ、これで……

と、それまで荒々しかった望月の手つきが、突然柔らかくなった。観念したのかも、と思った

。玉をまっすぐ引く手。これは左右どちらにも逃げられるように、ということだが、歩を打てるのでこちらが一枚節約できる。これは勝ちだ。

3三歩。決まった。そう思った。

「あの」

「え」

「二歩」

最初、突然声を出したので投了するのかなと思った。だが、望月はほっとした顔で、3八の地点を指さしている。そこにはかなり前に受けた歩があった。一つの筋に二つ歩を打つ反則、二歩。負け……だ……

「あ、ありがとうございました」

声が上がっていた。しばらくはうまく把握できなかった。

3三歩は読んでいなかった。最後の局面になって、安易にそれで勝ちだと思い込んだ。けれどもその歩は、打てない歩だった……。私は、相手に合せて気を抜いてしまった。

対局が終わり、ふらふらと立ち上がった私は歩き出していた。どこに向かっているのかはわからなかった。

「うーん」

「また悩んでる」

ウィンドウ越しに魅惑してくるアイテム。薄い紺の、チェックのボアワンピース。ずっと新しいワンピースが欲しかったのだけれど、気が付けばもう夏も目前。買うなら今しかない。

「よくない？」

「佳乃子っばい」

夏休みは制服を着ない日が多いし、私だっておしゃれをしたい。父さんは私の小遣いを減らすことはしてなくて、最近あまり使っていなかったので手持ちもある。

「買う」

「おっ」

こうと決めたら、迷っている場合ではない。ぱっとつかんでレジまで持っていく。買った。買った。買った。

「きょうはなんか違うね。というか、最近佳乃子ちょっと違う」

大きな買い物はテンションが上がる。出費のことは忘れてとりあえず上機嫌になる。

「そう？ 大人になった？」

「それは……」

ポケットの中で、携帯がプルプルと震えた。

「あ、電話だ……はい。……うん。……わかった」

「どうしたの」

「兄さんが急に悪くなったって……すぐ行かなきゃ……」

ここからではバスが出ていない。一度家に帰ってから自転車に乗っていても遅くなる。けれどもお金は今使ってしまったのでタクシーには……

「何してるの。タクシー拾うよ」

「え、でも私……」

「ほらっ」

イヨリは、私の腕をつかんで走り出した。表通りまで出てきて、大きく手を振る。普段それほど気にしていなかったけれど、案外タクシーも通っているようで、すぐにつかまった。

「高石会病院まで」

「はい」

イヨリの行動力には面食らう。そして、感謝もする。

「私からのプレゼントだから」

「え」

「佳乃子、頑張っしてほしいから、タクシー代のプレゼント。その代り、私にもいつか頂戴ね」

「わ、わかった」

自動車は簡単に坂を上っていく。色々考える間もなく、病院に到着した。イヨリは右手で千円札を出しながら、左手で私の手を握ってくれた。

「急ごう」

「うん」

玄関を抜抜け、階段を駆け上がり、病室へ。扉を開けると、父の背中が見えた。

「佳乃子……にイヨリちゃん」

振り返ったその顔を見て、少し安心した。疲れの色は見えたが、絶望はしていない。

「兄さんは？」

「嘔吐が激しかったけど、何とかおさまった。今は眠ってる」

「大丈夫……なのかな」

「わからない。風邪とかいろいろ併発している可能性があるって」

ベッドの上、管につながれている兄さんの姿。こんなに弱々しかったなんて。幼い頃から見えてきた姿との接点を、必死で探す。私をおんぶして、公園から帰ってきた兄さん。将棋盤を抱えて、河原に走る兄さん。大会で汗をかきながら、次の一手を探す兄さん。どの兄さんも、遠い存在に思える。

「……佳乃子？」

兄さんの首が、ゆっくりと横になる。いつもの半分ぐらいだけ、瞳が開いていた。

「うん」

「あ、イヨリちゃんも。久しぶり」

「お久しぶりです」

声に力はないけれど、心が弱っている様子はなかった。微笑みながら、私のことを見つめる。

「俺さ……やっぱりしばらく将棋指せないらしい。だから……佳乃子は頑張れ」

「……うん」

「親父……迷惑かけてごめんな」

「本当だ、まったく」

唇の内側を噛んだ。多分これから、何度もこういうことがある。そのたびに私たちは、できることをしていかなければならない。兄さんが一番頑張っていて戦っているのだ。

「兄さん……私ね……」

四間飛車で優勝するから。そう言おうと思ったけれど、すでに瞼を閉じていたので、言葉を飲み込んだ。

「長野さん、わざわざありがとね」

父さんが深々と頭を下げる。

「いえいえ、佳乃子にはいつもお世話になっているので」

「そんなそんな、きっと佳乃子の方がお世話になってる」

二人がそんなやり取りをしている横で、私はずっと兄さんの顔を眺めていた。私の目の前にいてほしいその顔。まだ一度も、私に対して悔しい表情を見せたことはない。今ですら、まだ余裕だぞ、という顔をしている。

いつまでだって待つ。私が勝ちたいのは、兄さんだ。その日が来るまで、頑張り続ける。



新しいノートに、新しいことを書き始める。

兄さんのノートにも書かれていたものを、大幅に書き足すことになるだろう。

私は、兄さんのコピーになることはできない。

むしろ別の方法で、兄さんを超えたいのだ。

私に合った戦い方。だけど、四間飛車は捨てない。

駒を手にして、一つ一つ確かめる。その感触を、手に刷り込んでいく。

一人きりの部屋。夏休みは、ひたすら将棋に溶け込める、天からのプレゼントだ。

「女の子って得だよねー」

マップを見ながら、イヨリが言った。

今日の彼女は特別かわいい。制服の時はもちろんスカートだけど、彼女はズボンの方が似合う。襟付きのシャツに、少し大きめの、明るい茶色のキャスケット。襟首からこぼれる髪は、とてもさらさらしている。

「何が？」

「だってさ、男二人じゃ遊園地来ないでしょ」

「そっか」

八月後半。カラッと晴れた日の午前。私たちは少し遠出をして、遊びに来ていた。

「ねえ。他の子が言うところちょっと気に障るけど……こういうデートもいいよね」

「で、でーと」

「あ、でも……」

「何」

イヨリが、びしっと何かを指さした。ジェットコースターだ。

「乗れる？」

「え、あ、うん」

人はそれほど多くない。夏休みと言っても平日だし、そもそもそれほど流行っていない遊園地なのだ。五分ほど待って、ジェットコースターに乗車。

「今日さ……あれ着てくるかなと思って」

「あれ？」

「この前買ったワンピース」

「あ……あれ」

「でも、やっぱ違う日に着るんだなーって」

「やっぱ？」

発車。ゆっくりと登っていくときが、ジェットコースターの真骨頂だ。実は、速さはいいいんだけど高さに弱い。

ガタン。頂上に着き、一瞬の停止。そして……

「見せたい人いるんだな、って」

加速し始めると、速い。声は遥か彼方に置き去りにされ、走る、走る、回る、回る。

あっという間の出来事。気が付くと、一周して、元いた場所へ到着。

「イヨリ……」

「どうしたの、酔った？」

「見せたい人って……」

「勘違いだった？」

「うーん……」

意識は全くしていなかった。けれどもあの服は、まだ外では着ていない。

「佳乃子はさ、敏感で鈍感だよな」

「えっ」

「そこがかわいってこと」

よくわからないけれど、悪い気もしなかった。

色々と乗り物に乗って、お昼ご飯を食べて、お化け屋敷なんかにも行って。とっても楽しい。

人が増えて、手をつなぐカップルなども目立ってきた。校内でもそういう人たちは見るけれど、外出先で見るとちょっと破壊力が違う。きっとみんな、楽しくて仕方ないのだろう。

「何見てるの」

「え、何でもないよ」

「あ、まだ乗ってないよね。観覧車乗ろ」

「うん」

観覧車の前にもカップルたち。ふと、昔のことを思い出した。小学生の頃も、この遊園地に来たことがある。兄さんとだった。はぐれないようにと、ずっと手をつないでいた。

「次だね」

観覧車に乗り込む。向かい合う私とイヨリ。

「宿題した？」

「え、突然そんな話……」

「追試とか補講とかさ、大変だったじゃない。二学期はそういうのないようにしないと」

「大丈夫……のはず」

「恋とかも、時間必要だしね」

恋。不思議な感触の言葉だ。私には無縁のような気もするし、すぐに近くまでやってきそうな気もする。

「恋かあ」

「応援するから」

「う、うん。ありがと。その時はよろしく」

恋をしようにも、今の私は将棋ばかりしている。考えてみれば、きっと、まだまだ先の話だ。

観覧車が頂上に近付いてくる。風景が開けて、とても眺めがいい。高いところは得意ではないけれど、壁があると随分気が楽で、怖さも感じない。

「こうやって見ると、田舎だねえ」

「言われてみれば」

眼下に広がる、家、道、田んぼ、畑、森。遠くには海も。振り返った先には、私たちの街、高台の病院もかすかに見えた。こののどかな風景の中で、ずっと育ってきた。そして多分これからも、ここに居続ける。

「あそこの市民プール、中学生の時行ったよね」

「あ、うん。私泳げなかったもんね。イヨリにはお世話になったなあ」

「ふふ、そういえばいろいろお世話したね。あ、でも裁縫は私が教えてもらった」

「そうだっけ」

「うん。あれは佳乃子の方が得意。きっと、指が器用なんだよ」

「そうかなあ」

自分の指を見つめる。細くも、長くも、白くもない。ただ、この指のおかげで、私は将棋の駒をつかむことができる。あの五角形の駒をぴんと持ち上げる自分の指を思い出してみれば、確かに器用なのかもしれない。

観覧車が落ちていく。現実が近づいてくる。そろそろ帰宅の時間だ。

「楽しかったね」

「うん。ありがと、イヨリ」

「感謝されても困るなあ。佳乃子の笑顔がね、好きなの」

「照れるなあ」

ゲートに向かって歩き出す。家に帰ればまた、ほとんど一人の生活が待っている。父さんは事務所で寝泊まりすることが多くなった。洗濯をして、ご飯を作って、将棋をして。淡々とした日々が待っている。

「佳乃子、今度遊びに行っていていい？」

「え、うん。いいよ」

「頑張りすぎないようにね」

「……うん」

きっと、これは嘘になる。私は頑張る。悔いを残さないように。そして、私が頑張り切りたから。

病院の帰り、あまりにも暑いのでドーナツ屋さんに避難した。せっかく入ったのだからと、アイスティーだけでなくドーナツも二つ、注文した。

ひんやりとした空気を、体の隅々まで吸い込む。紅茶が、口と喉の間を鋭く刺激した。幸せ。

夏休みの間は、できるだけ父さんの負担を減らしてあげたかった。最近、見るからに父さんは疲れている。せめて仕事だけに集中してもらえるよう、病院のことはすべて私が担当している。

おかげで私もちょっと疲れ気味だ。とりあえず、電動自転車が欲しい。

「大丈夫。元気にやってるよ」

何気なく聞こえてきたが、しばらくしてから聞き覚えのある声だと気付いた。前の前の席、

後姿。

「そう。ならいいけどね」

そしてその向かい側、髪の長い女の人が座っている。鼻筋が通っていて、唇が薄くて、肌が白い。美人だ。

「そっちこそどうなのさ」

「別に変ったことはないけど。九月いっぱい休みだし、どっか旅行行こうかな」

「いいな、大学生は」

相手は年上だ……。私はドーナツを口に含みながら、耳に神経のかなりを割いている。

「そういえば伸広はどうするの」

「どうって」

「進路」

「……まだ考えられないな」

貴島の下の名前なんて、忘れかけていた。二人はテーブルを挟んでいるけれど、とても距離は近く感じる。女性の方は突き放しているような顔をしながら、時折優しい目を投げかける。貴島の背中ほとんど動かない。

「そうね……」

「いつ戻れるかもわからないし。まだわかんないや」

「ま、大学行きたいのかどうかぐらい、はっきりさせないとね」

「そうだねえ」

「そろそろ行こうか」

「うん。……あ、姉さん、それ持つよ」

二人は立ち上がり、こちらに向かって歩いてくる。思わず下を向いたけれど、間に合わず一瞬貴島と目が合った。

「あれ、佳乃子ちゃん」

「こ、こんにちは」

「ここらへんなの？」

「そうだよ」

「へー。あ、姉さん待って。じゃ、また」

小さく手を振る。ちょっと、日焼けしていた。

「誰？」

「将棋の」

「女の子でもやってる人いるの？」

「いるよ。最近増えてきた」

二人は店を出ていった。

残ったドーナツを口に含む。甘い。

小雨が降っていた。病室の窓が、雨粒で埋められていく。

「佳乃子か」

「起きてたの？」

目を閉じていたので、眠っているのかと思った。荷物を置いて、椅子に腰かける。

「ぼんやりしてた」

「珍しい」

「でも、将棋したくなったよ」

兄さんはまだ目を閉じたままだ。声には力がある。

「そうだね。しばらくしてないもんね」

「しょうか」

「えっ」

「今の佳乃子ならできるだろ、目隠し将棋」

「.....わかった」

私も目を閉じた。

「佳乃子から指して」

「わかった。.....7六歩」

「3四歩」

「.....6六歩」

光のない世界の中で、窓を叩く雨音だけが響いていた。兄さんは、約一分黙っていた。

「8四歩」

「6八飛車」

私の四間飛車、兄さんの居飛車。これまでとは戦型が逆になった。

その後は、リズムよく指し手が進んでいった。頭の中にはしっかりと将棋盤が描かれている。

そして私の手と、兄さんの手も。何度も交差した、二人の指し手が、脳裏で再現される。

「.....強くなったな」

「そう？」

「けど.....疲れちゃった。封じ手にしよう」

「うん」

居飛車とか、目隠しだとか、そんなこと関係なしに兄さんの指し手には元気がなかった。将棋を指しているときはいつも本気で、真剣で、尖ってて、光っていたのに。そんな状態の中でも、将棋を指そうとしたのはなぜだろうか。私のためではないのか。瞼を開ければ、涙と共に声も漏れてしまうのではないかと思い、必死で耐えた。

「無理しなくてもいいんだぞ。指したいように指せば」

「楽しいよ」

「そっか。それならいいや」

言葉は、そこまでだった。気が付くと寝息を立てていた。目を開けた。いつもと変わらぬ兄さんの姿が、少しだけにじんで見えた。

びっくりした。朝起きると、父さんが台所に立っていた。

「おお、佳乃子おはよう」

「おはよう。どうしたの？」

「どうしたとは何だ。お前、今日大会だろ」

「そうだけど……帰ってきたのも知らなかった」

「昨日幹太に頼まれて。代わりに送り出してやってほしいって」

ここ数日、兄さんは口数が少なかった。将棋のことはまったく言わなかった。だから今、すごいびっくりしている。

「兄さん……他には何か？」

「ああ、なんか変なこと言ってたな。四間飛車をよろしくな、とか。何のことだ？」

「……頑張れってことだと思う」

食卓にピザトーストが並べられた。昔から変わらない、父さんにできる精一杯の朝食だ。父さんはアイスコーヒー、私はハーブティー。

「でも、まさか佳乃子がこんなに夢中になるなんてな」

「将棋？」

「ああ。お前、勝負事苦手だったもん。集中力ないし。勉強も嫌いだったしな。それは今もか」

「ひどい。でもね……私もなんで続けてきたかは、よくわからない」

「なあ」

休日の朝はいつも三人で、他愛もないことを話していた。兄さんが入院して、父さんが忙しくなって、私たちはバラバラになった。この生活もあと少し、最初はそんな気持ちで頑張っていた。けれどもだんだん、いつ終わるのかわからないんだ、これが日常になるんだ、とわかってきた。

父さんと二人、こうして朝食を食べるだけの非日常。どう受け止めていいのかわからないけれど、今私たちにできる精一杯の幸福なのかもしれない。

二つ空いた席。大昔にはそれらがすべて埋まっていた、少し前までは右隣が埋まっていた。例えば兄さんや私が大学に行って、ここから誰もいなくなってしまうなんてこともあるかもしれない。家族って、変わっていくんだ、なんて思う。

「どんな結果でも、帰りに寄って幹太に知らせてやってくれよ。気にしてると思うから」

「わかった」

もし元気ならば、今日は兄さんにとって最後の大会になるはずだった。悔しい気持ちもあるだろうけど、私を応援しているのも確かだ。

「まあ……父さんも、負けるよりは勝つ方がいいと思うぞ。頑張れ」

「うん」

食事が終わった。おいしくはなかったけれど、体に染み込んでいくのがわかる。

「じゃあ……父さんはちょっと寝る」

今日は休むと決めたのだろうか。それとも、料理で力尽きたのだろうか。父さんはひらひらと手を振りながら、リビングを出ていった。

一人残されて、実感する。広い部屋に一人はさびしい。仕事場の父さんも、病室の兄さんもそれを感じていることだろう。そういえば、将棋を指しているときはさびしさを感じない。対局相手だけではなく、それ以外の人々の温かさを感じる気がする。

私も自分の部屋に戻り、支度を整える。ボアワンピースを着て、髪を結んだ。鏡の中には、とてもすっきりした顔の女の子がいる。

「行ってきます」

小さく、つぶやいた。

秋大会は春大会と会場が違う。最寄駅から歩いて二十分。結構疲れたなあ、と思った頃に見えてくる、ピカピカの校舎。数年前に移転して新しくなったらしいけど、私は古くても便利な場所にある方がありがたい。

運動場ではハンドボール部が練習している。何種類かのユニフォームが見えるので、大会だろう。マネージャーや見学客の姿も見える。将棋は大会でもプレーヤーしかいないので、ちょっとうらやましくもあり。

校舎の間を抜け、離れた場所にある若葉会館と呼ばれる建物へ。二階建ての建物は会議や合宿に使えるようになっており、ここの一室を大会に使うのである。

会場内にはすでに結構人がいた。見知った顔もいれば、初めて見る顔も。

受付を済まし、部屋を出る。対局が始まるまでは、頭を休めることにした。すでに、やるべきことはした。だからあとは、長い勝負を乗り越える体力が重要だ。無駄な力は使わない。そして、心も冷やす。

「お、佳乃子ちゃん」

「……貴島」

その人はポケットに手を突っ込みながら、ふらふらと歩み寄ってきた。対局していない時は、とてもバカっぽい。

「幹太は」

「まだ無理」

「……そっか。残念だな。ま、また機会はあるか」

貴島の視線は、私の瞳を突き刺して別の人を見ている。確かに、私はそういう扱いをされても仕方のない成績だ。けれども、今ここにいるのは、今日この大会に出るのは私だ。

「今日は、必ず決勝に行くから」

「ん？ えらくやる気だねー」

「そう。やる気」

「よし、じゃあ期待して待ってるよ」

「貴島も途中でこけないようにね」

ひらひらと手を振りながら、大会会場に入っていく貴島。彼にとっては、優勝するのが当たり前  
の勝負、それはそれでプレッシャーがあるだろう。それでもきっと、盤の前に座った途端全て  
が消し飛んでしまうのだ。スイッチが入ると、別人になる。あるいは、それこそが本来の姿。

時間になった。会場に戻ると、すぐに開会式が。そして組み合わせ発表。春と違い、予選は四  
人リーグの二勝勝ち抜け方式。一度負けても決勝トーナメントに上げられるシステムだ。でも、気  
合的にも体力的にも、二連勝するのがいいに決まっている。

指定の席に座る。大きく息を吸って、ゆっくりと吐き出した。

「余裕じゃん」

前回の反省からか、貴島は昼食にサンドウィッチを準備していた。そして、当然のように私  
を誘ってきた。特に断る理由もなかったけれど。

「それでもないよ。貴島こそ危ないところなかったでしょ」

「まあね」

予選は二連勝で通過。どちらも相振り飛車だった。兄さんの研究は相振りでも深く、序盤から  
有利になる順についての記載はとても役に立った。兄さんに助けられての勝利ともいえる。

「その……前のところにはライバルとかいたの」

「うーん、まあ、ね、勝ったり負けたりの相手は。でもそいつ、あんまり大会出てこなくて。代  
表はほとんど俺だった」

「へー。じゃあ道場とかで？」

「そう。強いからって、勝ちたい奴ばかりじゃないわけよ。気持ちはわからん」

私にもわからなかったが、本当に強くなるとそういう考えも出てくるのかもしれない。ただ、  
私はやっぱり大会で本気になるのが楽しい。

「全国に初めて行った時……」

「ん？」

「スルーパスで女子代表だったの。その時代代表で言ったのに何もできなくて、すごく悔しかった  
。それから、本気で勝ちたいと思うようになったの」

「そうか。ま、俺も似たようなもんかな」

「そうなの？」

「最初は勢いだけだったし。支部団体戦で全国行ったけど、結果は惨敗。地元のおっちゃん和違  
って、間違えてくれねーんだな。自分でちゃんと勝ちにいかないダメなんだ、ってその  
時から意識するようになった」

少年のように無邪気に、大人のように真面目に。貴島はときどき、不思議な顔を……魅力的な  
表情をする。

「ま、負けず嫌いなんだろうね、元々。佳乃子ちゃんもそうでしょ」

「たぶん」



「じゃ、春から強くなったとこ、見せてもらおっかな」

もうすぐ再開時間だ。私が立ち上がると、貴島も立ち上がった。

「存分に、見てもらうから」

緊張した。9一の香車をつまみ上げ、9二に置く。玉が端っこに潜っていく、穴熊という戦法。四間飛車と組み合わせて、四間飛車穴熊だ。固さに任せて攻めまくるイメージがあるが、独特な感覚が求められる、実は繊細な戦法だ。

春の大会で敗退して、色々と悩んだ。そして出した結論が、「自分なりの戦法を見つけよう」ということだった。兄さんの真似をしても、どうしても無理が生じてしまう。それに四間飛車対策は、皆それなりにできている。だから私らしい、こまごまとしたポイントを稼ぎながらも、終盤間違えてもなんとかかなる戦法、そして研究しがいのある戦法ということで、四間飛車穴熊はピッタリだった。

早速相手は、うかつな駒組みをしてきた。兄さんのノートにも書いてあった、安易な歩突き。金を盛り上がっていくことによって、その歩は取られそうになる。穴熊から駒を離していく攻めなので、盲点になりやすいのだ。

そう、兄さんはなぜか自分が穴熊に組む変化まで詳細に調べていた。実際には指すことはないのに。どうやら兄さんは、四間飛車にまつわる戦法のマニアになっていたようだ。私はそこに、独自研究を付け加えていった。穴熊戦では、「勝手読みによる」対応が多くみられる。それに対していかに効率よく咎めるかを研究とておけば、本番で悩む時間が節約できる。

インターネットで実戦を積み、その棋譜の分析もした。定跡を外れる率の高い戦法は、外れてからいかに良さを積み上げていくかが勝負のカギになる。大振りの悪手は、こちらが間違えれば好手として通用してしまう。どれが悪手なのか。どう咎めればいいのか。それをシステマティックに理解して、実戦で考える時間を取られないようにするのが私の作戦だった。

相手は急戦を狙ってきた。が、手順が甘い。こちらから角道を空けて、駒がさばける。相手は攻めに使おうとした銀が立ち往生だ。この後は暴れさせないように、王手をかけさせないように指していく。バランスを保って。時間も残して。

相手の焦りが、盤上から伝わってくる。穴熊をする人は、とりあえず組んでしまっ、という場合が多い。だから慎重に指し進める穴熊には、面食らってしまうことだろう。そこら辺の心理状態までも、計算の内だ。

相手の攻めの糸口がなくなり、こちらの駒が前進していく。そのまま一歩ずつ進み、勝利を手にした。

ベスト8突破。トーナメント初勝利。

ただ、あくまで目標は一番上。一つ関門を突破したに過ぎない。そして次の関門は、望月。再戦だ。

当然のように貴島も勝ち残っている。次勝てば、決勝で対戦できるはず。

少しの休憩時間を挟んで、準決勝が始まった。振り駒をして、後手に。

望月の太い指が、勢いよく駒を進めてくる。今回も、四間飛車穴熊へ。相手は、銀冠。有力で一番厄介な作戦だ。

局面のバランスはなかなか崩れなかった。流石に上位常連なだけあって、定跡もしっかり知っている。そしておそらく望月も、貴島に勝つための努力をしてきたはずだ。貴島は、兄さんのいない大会で、突然現れて優勝していった。望月にとっては想定外の悔しい出来事だったに違いない。

いつも以上の気合いを感じる。そして私も、それに答えた。勝ちたい気持ち、貴島と対戦したい気持ちは私も負けない。

玉がいる側で、ごちゃごちゃとした戦いが始まった。こうなると、穴熊といえども流れ弾に当たりやすい。神経を使う戦いだ。けれども、こちらが悪いわけではない。間違えなければ、必ず相手にほころびが生じる瞬間が来る。それを見逃さないように。

8筋、9筋と続けて歩が突き捨てられた。一見厳しくそれっぽい手だったが、私のセンサーは反応した。歩を渡し過ぎたのではないか？ こちらから手が作れそう。ただし、失敗すればまたこちらに反動が来てしまう。

ここが、決め所。

もう、間違えない。ミスはするかもしれない。けれども、残念なことはしない。歩で形を乱し、桂馬を捨て、飛車を成り込む。この時歩が残っているのが大きくて、底歩などが利く。端攻めは怖いけれども、私の読みでは、間に合わない。

激しい応酬になった。けれども、望月の手つきから力が抜けていくのがわかった。強いからこそ、負けが見えるのだろう。こちらの玉は、絶対に詰まない形だ。そしてこちらの攻めは、切れない。反則をしない、それを気を付けた。一步ずつ、着実に追い詰めていく。

「負けました」

そしてついに、望月が頭を下げた。気が付かなかったけれど、私の手は震えていた。

ついに来た。私は自販機に走り、缶コーヒーを飲んだ。

部屋に戻ると、貴島はすでに席についていた。眼を細くして、盤に視線を落としている。すでに、極限まで集中しているのがわかった。

私も着席する。頬がけいれんしている気がした。ゆっくりと撫でる。息を大きく吸う。唇をなめて、息を吐き出す。

「始めるか」

貴島が、駒を振る。とが四枚。私の先手だ。

「じゃあ……お願いします」

「お願いします」

することは変わらない。心を落ち着けて、角道を開ける。貴島も一定のリズムで指し手を進め、すらすらと組みあがっていく。私が香車を一つ上げる。貴島も一つ、香車を上げる。相穴熊。最も繊細さの求められる、そして最も根気のいる戦型だ。

相穴熊は、四間穴熊の方が囲いが薄くなる宿命にある。その分仕掛けを封じて、駒得を目指していくことになる。絶対に相手の思い通りにさせてはならない。

貴島は定跡通りに指し進めていく。さすが、全く隙を見せない。きっと彼ほどの棋力ならば当たり前なのだろうが、しかし、努力の跡が感じられて嬉しくなる。兄さんを目指していたら、兄さん以上の人に出会えた。この将棋はきっと、宝物になる。

研究通りの仕掛けから、細かい応酬が続く。歩の手筋を使い、少しずつ敵陣を攻略していく。相手も大駒を成り、こちらの攻め駒を攻め、均等が崩れないようにする。体も頭も疲れ果てていたけれど、最終的には、心地よかった。

多くの人が観ている。それはわかっているけれど、全く気にならなかった。ここにたどり着けたこと。決勝の舞台に来て、こんなに内容の濃い将棋を指せていること。貴島が全力で応えてくれていること。全てが私の心を癒してくれた。

ふわふわとした世界の中で、五感全てが将棋のことを考えているような気分になった。全力以上のものが出せている。普段は見えないような手まで見えるし、貴島の考えていることもわかる気がした。

終盤。どちらが勝っているのかまったくわからない。秒読みの中、お互いギリギリまで考えて着手した。最善手をさせているかなんて、問題にならなかった。心が折れたら負けだ。そして途中から、はっきりと気づかされていた。やっぱり、貴島の方が強い。同じだけ頑張れば、強い方が勝つ。貴島が手を抜かない限り、私はどうしても追い抜けない。努力や熱意、そういったものの積み重ねが実感できて、ああ、そっかと思った。私は兄さんや貴島を、まだ見上げているにすぎない。やっと同じ場所に立てたと思ったけれど、二人はもっと先まで見据えているのだ。決して立ち止まって、私に手を差し伸べるようなことはしない。

攻防の角が打たれた。いい手だった。私はその手が見えていなかった。負けるんだな、そう思った。私は負ける。悔しさはなかった。できるだけことはしてきたから。今日だって、最高の力を出せているから。

「負けました」

すっきりとした声が出た。終わった。

「危なかった。いろいろ」

「あったかもね……でも、読めなかった」

「強くなったよな。四間穴熊も、あってる」

「ふふ。そうなの」

どっと肩が重くなった。今日だけではない。春から溜まってきた疲れが、一気に噴出してきたかのようなだった。それでも、とてもさわやかな気分だった。将棋、楽しい。

「ここか」

「うん」

病室に入ると、珍しく兄さんは体を起こしていた。

「兄さん」

「お、佳乃子……に貴島」

貴島の顔を見て、兄さんは目を丸くした。そしてその手に握られているトロフィーを見て、目を細めた。

「こんにちは。久しぶりっす」

「おう。まさかお前がこっち来るなんてな」

「自分でも思わなかったよ、まさかねえ。それに幹太の妹と将棋することになるなんて」

「対局したのか」

「決勝でね」

兄さんの目がさらに細くなった。

「惜しかったな、佳乃子。次は勝てるといいな」

「まあ、勝てると思う」

「言うねえ」

兄さんの声が元気そうで、本当に良かった。きっと、そわそわしながら待っていたのだ。

「……なんかあれだな、その服、初めて見るな」

「初めて着た」

「かわいいんじゃないか。なあ、貴島」

「そう、俺も気になってた。佳乃子ちゃんそれ似合うよ」

多分、私の目も細くなっている。こんなに幸せな時間があるといいのだろうか。そしていつかこの三人で、時間を忘れるぐらい将棋を指し続けたい。

「……二人はまだ一年あるんだな。貴島は全国もあるし……頑張れよ」

「もちろん」

「佳乃子は次こそだ」

「うん」

「ごめん、ちょっと横になる」

兄さんは体を布団の中に沈めていく。それを見た貴島はトロフィーを地面に置き、体をかがめて兄さんの耳元でささやいた。

「待ってますから。また、指しましょう」

数秒の空白の後、兄さんは微笑んだ。瞳を閉じたのは、涙を見せたくなかったからに違いない。



恋の棋譜、公開。

学生時代のバイト先の社員のお姉さんの話です。  
仮にHさんとします。  
そうですね、少し中倉彰子女流に似てたでしょうか。

Hさんは気さくな方で、オクテで引っ込み思案な僕にも  
気軽に話しかけてくれる、明るい人でした。  
一度対局してみたいと思ってたんですけど、  
手合いが全然違うし、相手にしてもらえないだろうな...  
なんて思ってたんですよ。

ところが、ある日。  
ほら、女子から男子への控え室差し入れデーがあるじゃないですか。  
その日ちょうど仕事で一緒だったので、僕ももらったんですよ。  
後から振り返れば、誰にでもあげてるような  
義理ふわふわほっぺなんですよけどね。  
他の人の目を忍ぶ感じで、そっと渡してくれたんです。  
その渡し方が可愛くて。  
ほんと嬉しかったですね。

お返しに、ちょっといい駒袋をプレゼントしようと用意したんです。  
中に「▲7六歩」と書いた封じ手を入れて。  
そんなことしたことなかったから、その日は朝からドキドキしてたんですよ。

そしたら、Hさんの後輩さんに見抜かれたんですよ。  
挙動不審だったんでしょうねえ。  
でも、その後輩さんから衝撃の事実を聞いたんです。

「Hさん、もう2年くらい対局してる方がいるはず」  
「確か住み込みで研究会をしてる」

目の前が真っ暗になりましたね。  
対局してる相手くらいいるだろうなとは思ってましたけど、  
住み込みで研究会となると、勝ち目ないじゃないですか。

駒袋のプレゼントも迷惑になっちゃうんじゃないか、とか。

でも、もう引っ込みつかないから、渡したんです。  
後輩さんからの話は聞かなかったことにして。  
単に、ふわふわほっぺのお礼だから、という感じで。

初手指す前から詰んでたようなものだったので、  
渡した時点で気持ちはすっきりしましたね。  
まあ、自分なりの最善手は指した、と  
内容には満足してました。

ところが。その後電話がかかってきたんですよ。

「△3四歩」

びっくりしました。嬉しかったというより、びっくりしたんです。  
嬉しい気持ちもあるけど、なぜ？という思いが強かったです。  
後輩さんの情報は古くて今はフリー対局待だったんじゃないか、と  
自分に都合よく勝手に読みして、  
そのまま指し手を進めることにしました。

お互いに探り合いをするような序盤でした。

「彼氏、いるんじゃないの？」と  
僕から仕掛ける手はいつでもあったのですが、  
その手を指すと後は一直線で、詰む詰まないの局面になるので、  
踏み込めなかったですね。

仕掛けてきたのはHさんでした。

「隠し事するのも嫌だからちゃんと話すね」  
と、角交換を挑んできました。  
後輩さんの情報は正しかったのです。

僕には狙いの反撃がありました。

「それでも、僕と対局したいと思ってくれたから、  
今、こうやって盤を挟んでるんだよね」

それからは、住み込みの研究会相手の話もよくしました。  
Hさんいわく、ずっと千日手っぽい流れで終わりが見えない、  
もう投了したい、という話も。  
ただ、形勢に差が付いているわけではなかったようです。

反撃そのものは成立していたと思うのですが、  
気がつけばこちらが苦しい局面になってました。  
自分と対局して、指し掛けになっても、  
Hさんは家に帰ったら、研究会をしてるんだ、と。  
僕の家で泊まりこみで対局したこともありましたが、  
途中、研究会相手と1時間くらい電話してたりするんです。  
その様子は、もう投了しそうな様子は感じられませんでした。

僕は気付かないうちに焦ってたんでしょうね。  
しつこくならない程度に、研究会相手との対局を終わらせるよう、迫ってました。  
自分の局面が不利だからこそ、勝負手のつもりでした。

しばらくたったある日。  
Hさんから、研究会相手との対局をを終わらせ、  
僕との対局に専念することにした、と連絡があったのです。  
急に形勢がこちらに傾きました。  
ここまでくれば、後手玉に必至がかかる局面となったのです。

これで、必至だ...！  
後は投了を待つのみ。  
そう思っていました。

Hさんが次の手を指す事になってた日。  
約束の時間になっても、連絡がありませんでした。  
こちらからも何度も電話をしても繋がらず。

おかしい。もう必至がかかってたはず。  
逃れる手はないはず...！

次の日になって、Hさんと連絡がつきました。  
Hさんが指した次の一手は、驚愕の一手でした。



必至をかけたつもりが、先にこちらの玉が詰んでしまったのです。

なぜ...？研究会は解散したのでは...？

確かに研究会は千日手で一度解散したようです。

ところが、Hさんが研究会仲間の帰りを見送った時、  
千日手指し直しをしたい、と強く思ってしまったんだそうです。  
そして、同時に僕の玉の詰み筋も...

衝撃的な逆転負けでした。

勝った！と思った直後だけに、ショックが大きくて、  
しばらく将棋なんてする気になれませんでしたね。

消費時間は約3ヶ月。次の対局は半年後です。

「自衛隊の人に追われているんです」

対局はそんな言葉で始まった……のかもしれない。

ゲームを貸してほしい、というのはただのきっかけに過ぎなかったらしい。畳の部屋、トイレは共同という古風なアパートに入った僕は、「最近知り合った人がストーカーかもしれないので守ってほしい」という妙な依頼とともに、時折その部屋に泊まることになる。

彼女には遠距離の対局相手がいたのだが、そちらの方は指し手が滞っているらしかった。ただこちらにも気になる人がいたので、お互いに「本命ではないよ」と確認し合うへんてこな関係が続いた。多面指しが二つ並んだ状態。

ある日彼女は「二番目に好きな人とは結婚できるって聞きました。私たち、結婚できるかもしれませんねっ」と朗らかな顔で言ってきた。僕は多分、半分笑って半分ひきつった、ブギーポップのような顔をしていたと思う。もしくは微苦笑。

突然電話がかかってきて、夜中の学校に行ったこともある。屋上に出て夜空を眺めていたら、地震が来た。揺れが収まった後、何とも言えない気持ちになった。お互いに右玉にして、駒がぶつからないようにしていた。それでも本命の対局が進まないの、二つ目の対局に集中してしまう。千日手にならないように、常に違う駒を動かすが、結局はこう着状態。

そして、相手の方が上手だった。

「彼氏できました。お祝いしてください」

いつのまにか本命の対局は投了させていて、さらに新たな本命の対局を始めていたのだ。しかもその相手は、〇〇部の部長。自分も部長であったので、部としても負けた気分になってしまった。

僕たちの対局は指しかけになった。どこかで、一番になれる日を望んでいたのかもしれない。連絡が途絶え、会うこともなくなった。

香りが記憶に残った。ちゃんぽんにされたカクテル、古い畳、タバコ。右玉は、香がいなくなると、弱すぎる。



ikkn

二月のまだ寒かった日、なぜか早く目が覚めてしまって始業の三十分も前に教室に着いた。まだ誰も来ていないのだということに気づくと、自分の教室だということに足音を立ててはいけないような気分になった。そっとドアを閉めた。

ランドセルを机の上に置き、窓際の棚の上の腰かける。棚の上に座ってはいけませんとかいう言いつけを守っている奴なんかいない。三階の窓からガラス越しに下を見てもまだぽつぽつとしか登校している児童は見られなかった。

すでに卒業式の練習には飽きていたが、今日も午後はまた同じ練習だ。五年生と合同だとか聞いている。

五分経っても誰も教室に来ることはなく、廊下から足音がしたと思ったらそれは隣のクラスの児童だったりして、退屈になってきた。寒かった。ストーブは備えつけられていたが、つけ方を知らなかった。試行錯誤すればつくのだろうが面倒だった。

暇つぶしに黒板に落書きでもしようかと思っていたら、ようやくクラスの女子が一人だけ入ってきた。

「あ、ユウくん」

と女子は言った。

「よう、高森」

やっと一人来たかと思ったら女子だった。心の中でため息をつく。暇つぶしにならない。

高森はランドセルの中身を机に入れ、空のランドセルを後ろの棚にしまった。することもないので、俺も机の上に放りっぱなしだったランドセルの中身を取りだした。

「ユウくんさあ」

「ん」

俺が聞こえるように返事をして高森はなかなか次の言葉を言わなかった。

「なに」

もう一度、はっきりと訊いた。

「将棋、強いて聞いたんだけど」

なんの話かと思ったら将棋だった。強いといえば強いし、弱いといえば弱い。週に一度、選択の授業で将棋を指しているだけだ。先生は将棋が強いわけでもなんでもなく、単に見ているだけで、俺たちが勝手に指すのだ。その中で俺が一番か二番目くらいに強かったけど、同じくらいの強さの奴に言わせると、「道場だと俺は負けてばかりなんだ」ということだったから、ちゃんと将棋をやっている人たちからすれば弱い方なんだろうと思う。

「強くないよ」

と俺は答えた。

「そっかー」

一体高森は何が言いたいんだろうと思った。

「ストーブ、つけるね」

高森は操作盤のふたを開けてボタンを一つ押した。ボタン一つでよかったのかとなぜか敗北感を覚えた。

「なあ、どのボタンを押したんだ」

「これ」

指差されたボタンには『電源』と書かれていた。それだけかよと拍子抜けした。

「いま私、ユウくんにもストーブのつけ方を教えたよね」

「まあ、そうだけど」

「ユウくん、私に将棋教えてくれないかなあ」

違和感があった。高森といえば、運動神経抜群でとにかく体を動かすのが得意という印象があったからだ。走るの女子の中で一番速かったはずだ。

「お前に将棋教えてどうするんだよ」

「だって、面白そうだし」

「指したことない奴に面白さなんて分かるかよ」

分かるよ、と高森は俺を見た。

「だって、ユウくん楽しそうに将棋指してたよ」

放課後、盤も駒もなかったのでノートに九かける九のマスと駒を書いて、高森と向かいあった。すでにほかの奴らは校庭にサッカーをしに行っていて、教室には俺たち以外に誰もいなかった。窓の外からボールを蹴る音が聞こえていた。

「とりあえず指すぞ」

7七の歩を消しゴムで消して、7六に新たに歩を書き込む。次の手でどれくらい将棋を知って

いるかが大体分かる。飛車先を突いたり角道を開けたりすれば、そこそこ知っているということになる。それくらい知っていれば、美濃囲いくらいなら教えてやれる。

「そっちの番だ」

と俺は促した。

「適当に指せよ」

考え込むようなところでもないのに、高森は指さなかった。俺の書いた『歩』という文字をにらんでいた。その様子を見てようやく気づいた。

「お前、まさか」

「ごめんなさい。ルール、全然分からないの」

いつになく、か細い声だった。

頭にきた。放課後ほかの男子がサッカーしているときにわざわざ誰もいない教室に残ってやったというのに、駒の動かし方からかよ。それくらい、先に憶えてから来いよ。

「話にならない」

席を立ててノートを片づけようとする、高森はものすごく悲しそうな顔をした。泣くなら泣けよと思った。

「けち」

今度は『歩』ではなく俺をにらんでいた。

「え」

「ずるいよ」

何がずるいんだ。

「勝ち逃げはずるい」

「どこが勝ち逃げだよ」

「自分だけルールを知ってる。卑怯者」

ノートを片付ける手が一瞬止まる。俺は本当に卑怯者だろうか。そんなことはない。ルールを知らない奴が悪い。

「ルール憶えてから来いよ」

俺は椅子に座ったままの高森を無視して教室から出る。廊下をしばらく歩いていると教室の方から、わーん、という泣き声が聞こえてきた。サッカーの輪に入る気にもなれず、家に帰る気にもなれず、俺まで泣きたくなってきた。ただ一つ分かっていたのは教室に引き返したら負けだということだけだった。

次の日はいつものように始業ぎりぎりに登校した。高森はまだ来ていなかった。チャイムが鳴って朝のショートホームルームが始まって高森は来なかった。

出欠をとるとき、先生が「高森から連絡をもらっている奴はいないか」と訊いた。誰も答えなかった。

「無遅刻無欠席は今日で終わりか」

と先生がつぶやいて、教室がどよめいた。

俺のせいじゃないぞ、と自分に言い聞かせた。

「いや、記録も大切だけどな」と先生は言った。「無理をしないというのはもっと大切なんだぞ。今は風邪が流行っているしな。そろそろ職員室に連絡が入っていると思うから気にするな」

一時間目が始まった。算数の授業だった。すでに算数は教科書が終わっていて、先週あたりから中学校の予習が始まったところだった。先生が言うには、出遅れると大変なんだぞ、ということだった。

先生が「マイナスが」とか「これを『プラス』と読もう」とか言っていたような気がしたが、俺は気が気じゃなかった。高森が来て俺のせいだとか言うんじゃないかとか、高森が来なくて俺のせいだとばれるんじゃないかとか、そういうことばかり考えていた。

唐突に教室のドアが開いた。

「寝坊しましたー」

元気な声とともに高森が入ってきた。

「高森、寝坊したときには申し訳なさそうに入ってくるものだぞ。たとえ申し訳ないと思っていなくても、そういうそぶりを見せることが大切だ」

先生は相変わらずの調子で身も蓋もないことを教える。

「ごごごごご、ごめんなさい」

わざとらしくどもって、高森は謝った。これは謝ったとはいわないと思うけど。

「しかし、お前が寝坊なんて珍しいな。新しいゲームが出たわけでもなさそうだしな。新しいゲームが出たらほかのみんなも眠そうにしてるよな」

「先生、私は大切な勉強をしていたんです」

今度はかしくまった言葉づかいで反省の色を示そうとしていたが、あまりにもわざとらしくかった。

誰かが、お前が勉強かよ、と声を裏返した。

「冷やかすものじゃないぞ」

先生はそいつをたしなめた。

「勉強は大切だ。大切な勉強ならしかたがない。高森、席に着け」

そして何ごともなかったかのように、また、「プラスが」とか「マイナスとマイナスを」とか教えはじめた。

休み時間に入ると、真っ先に高森が俺の方に向かってきた。

「勉強してきたよ」

何がだよ、と俺は言った。

高森は嬉しそうに答える。

「将棋のルール」

やっぱり、俺のせいじゃないか。無遅刻無欠席の記録が消えたのって。

その日の放課後から、毎日のように高森と将棋を指すことになった。ノートに書いた九かける九の将棋盤でだ。

最初は、桂馬が余計に跳ねたり、銀が真後ろに下がったりしていた。そのたびに、俺が「バカ」と罵って、高森が「ごめんなさい」と謝った。俺は、バカにはバカと言ってよいのだと自分に言い聞かせた。

それでも、三日もするうちに駒の動かし方のミスはなくなった。

一週間も経つ頃には、四間飛車と美濃囲いの組み方を憶えた。俺はそれを容赦なく棒銀で攻め潰した。

「私も棒銀やりたい」

と言ったので、棒銀の基本を教えた直後に筋違い角で高森の駒を全部取った。

「棒銀はお前には扱えない」

結局、その後一週間、高森の四間飛車を棒銀で攻め潰しつづけた。それだけやっていれば、高森は将棋が嫌になってやめると思ったのだ。それにやっぱり、勝つのは気分がよかった。

雪が積もっていた。土曜日で学校が休みだというのに高森は将棋を指したが、図書館で延々と将棋を指すことになった。寒いからやめようとも提案したが、高森は「逃げたら私の勝ち」とおどしてきた。負けるわけにはいかないの、静かにノートの上で将棋を指しつづけている。

相変わらず、俺は四間飛車を棒銀で攻め潰していた。

「この歩が強い」

高森は角の頭の歩を突かれるのを嫌がった。

「これ、なんか技の名前とかあるんでしょ」

と訊かれたので、「『三五歩』っていうんだ」と適当なことを言った。

「さんご一ふ、かあ。このさんご一ふから逃げればいいのか」

次の対局から、高森は飛車を引いて角を早めに逃げるようになった。意外といい勘をしている。飛車を後ろに引くのではなくて一つ横にずらせば立派に受けの形になる。

「お前、おしいな」

思わずつぶやいた。

「おしいって、何が」

いい線いっているとは教えたくなかった。

「ほらこれで飛車が詰んだ」

と話をそらした。

「ああっ」

高森の声が静かな図書館の中に響きわたって、周りの人たちの目をひきつけた。俺も高森も、慌てて口をつぐんだ。

ノートに高森が、『やっぱり私も棒銀やりたい』と書いた。俺は、『むり』と書いた。

高森は結局、最後まで棒銀を受けることができるようにはならなかった。図書館には将棋の本もあって、棒銀の受け方も書かれていたというのに、そこには気づけなかったようだった。

月曜日、なぜか朝から高森の気分がよさそうだった。負けすぎて頭がおかしくなったんだろうかとか思った。そろそろ、俺が負けてやらないとまた泣きだしたりするんだろうか。

そういえば、高森はあれから泣いていなかった。気の強さはなかなかのものだ。

そろそろ、棒銀の受け方を教えるか。

放課後、俺がノートを開いて待っていると、高森は断りもせずにそのノートを閉じた。

「今日は違うんだよ」

何の話だ。

「本物の駒で指すんだよ」

「お前、学校のを借りる気か」

まあついてきてよ、と高森はランドセルを背負って教室を出て行った。俺もあとを追って教室を出る。誰かのはやし立てる声が聞こえてきたような気がした。放課後に男子と女子が二人だけで将棋を指していれば、どうしたって目について噂になる。俺はつとめて気にしないようにして



いた。高森が気にしていないようだったからだ。高森より先に気にしたら負けだと思っていた。

校門を出て、どこに行くんだ、と俺は訊いた。

「道場」

という答えが返ってきた。

「金かかるぞ」

「ただでいいって言われたから大丈夫」

すでに高森は日曜日に一人で遊びに行ってきたとのことだった。俺はまだ行ったことがない。走ろう、と言われて、高森のあとを走った。さすがになかなか速かったが、女子の中で一番というのは男子だと真ん中くらいだ。余裕で追い抜けた。

「追い抜く、なん、て、卑怯、者」

すでに、高森の息は切れていた。卑怯者かもしれないと思った。棒銀をやるのなら、受け方を教えないと、やっぱりいけない。

二人とも息が切れて、道場に着く頃には結局歩いていた。

『島田将棋センター』という看板があったが、入り口が見当たらなかった。どこ、と訊いたら、こっち、と高森は階段を指し示した。狭い階段を登ると確かに二階に『島田将棋センター』とあらためて書かれていた。ドアのガラス越しに中が見えたが、客がいる様子はなかった。

本当にここだろうかと戸惑っていると、高森がドアを開けて「こんにちはー」と挨拶をした。

中から「こんにちは」と二人の声がして、俺の母親くらいの年のおばさんと、祖父くらいの年のおじいさんが顔を出した。

「いらっしゃい。昨日のお嬢さんと、それからこの男の子が昨日言っていた子だね」

穏やかな喋り方をするおじいさんだった。すでに話は通っているようだった。

「うん。駒使っていいですか」

「いいよ。こっちの席だね」

あらためて中を見渡すと、そんなに大きな道場ではなかった。学校の教室よりも狭かった。それから、道場だか将棋センターだか知らないけど、一人も客がいなかった。おばさんのほうは、カウンターの向こうでにこにこしていた。

「きみはここに座って、お嬢さんはこっちだね」

言われるままに、パイプ椅子に座った。ちょっと高かった。

「ユウくん、なんで急に静かになってるの。びびってるの」

「え」

正直に言えば、びびっていた。部屋の中にはずらっと盤が並んでいて、俺と高森以外には大人二人しかいなくて。

「始めるよ」

そんな俺の様子を察知したか、高森はすでに並んでいた駒を手にとって、振り駒をした。高森の先手。

「お願いします」

高森の声には気合が入っていた。

「お、お願いします」

俺はどもる。

初手、角道を開ける。

俺も角道を開ける。

高森は角道を止める。いつもの四間飛車だ。

そう、いつもどおりなのだ。

いつもどおりに、銀を繰り出し、いつもどおりに高森が受けそこね、いつもどおりに俺が攻め潰す。

あっという間に、高森の玉が詰んだ。

「負けました」

高森が投了した。これまで何度も聞いた科白だったけど、なぜか一番大きな声だった。

お互いに「ありがとうございました」と礼をした。

帰ろうかな、と思った。

「さて」

と俺たちの将棋を見ていたおじさんが、一つ提案をした。

「きみたち、今度は二人で戦って見ないか」

「二人でって」

何を言っているのか分からなかった。

「え、二人でもう将棋したよ」

高森にも予想外の言葉だったようだった。

「そうじゃなくてね。リレー将棋だ。お嬢さんと男の子のチーム対、私とあのおばさんのチームだ。一手ずつ交代で指すんだよ」

かなうはずがないと思った。大人対子供なんて、無理だ。まして、高森はまだ憶えたばかりだ。

「やる」

高森は力強く宣言した。

「え」

俺が何も言えなくなっているあいだに、高森は俺の隣に座った。

「大丈夫だよ、ユウくん。私、昨日、あのおばさんに勝ったから」

「本当」

「うん」

いつの間にか、目の前におじいさんとおばさんが座っていた。

「決まりだね」

おじいさんはそう言って、歩を五枚手に取った。振り駒で俺たちの先手になった。

「ユウくんからね」

高森に言われるままに、俺は角道を開けた。おじいさんも角道を開ける。

ここで俺は気づいた。高森は四間飛車にするはずだ。俺は棒銀の受け方を高森に教えていない

。負ける。

「ユウくん、いくよ」

高森の手が盤上に伸び、飛車先の歩を突いた。この飛車先の歩は、俺がいつも指していた手だ。これでは、四間飛車にできない。何を考えているんだろうと思って、やっと気づいた。高森は棒銀をやろうとしているんじゃないか。

おばさんは、角道を止める。向こうはおそらく振り飛車。

俺は棒銀を目指して銀を上げる。

予想どおり、こちらの棒銀を向こうの四間飛車を受ける展開になった。しかも、高森が言ったとおり、おばさんは多分、高森よりも弱い。手つきはしっかりしているけれど、駒の動きがちぐはぐだ。

勝てる。

高森に銀の進出を任せ、俺は船囲いを作る。

相手が美濃囲いの囲い方を間違えたりしているあいだに、着々とこちらは戦闘態勢を整える。

「ふむ」

おじいさんが、手を止めて考えた。ここは考えどころだ。なにしろ、陣形はこちらが優勢なのだ。このまま指せばこちらが勝てる。

「よし」

そして、おじいさんは角道を開けた。将棋っぽくいえば『後手4五歩』。勝負手でもなんでもない。角交換への一手だ。

高森の手が伸び、歩を一つ突いた。『先手3五歩』。

「えっ」

と声を上げてしまった。

「えっ」

と高森も俺を見た。

角を交換しなかった。俺と指すときに嫌がっていた『3五歩』。高森はこの手がいい手だと思っ  
い込んでいるのだ。角の交換なんか知らない。

負ける。

おばさんの手が伸び、こちらの角が取られて馬ができる。

俺は玉でその馬になった角を取り返す。

そして、おじさんの狙い筋は、そう、『後手5五角』。王手飛車取り。

勝負あった。

粘ることもできずに、ずるずると敗勢になり、あっけなく負けた。

「負けました」

俺と高森は投了した。

ぼうっとしたまま、将棋センターを出た。高森は「ありがとうございました」とか言っていた気がする。道場の人のどっちかが、「また来てね」とかそんなことを言っていた。

帰り道、階段を降りたところで、高森が何かつぶやいた。俺は、何を言ったのか聞く気にもな

れず、黙って家に向かって歩き始めた。

「駒っていいにおいだね」

え、と俺は聞き返した。何を言っているんだ。

「昨日、初めて駒に触ったから」

「だからって、におい嗅ぐなよ」

犬かよ。

公園の横の道をただまっすぐに歩いた。サッカーをしている奴らもいたし、携帯電話をいじっている奴もいた。滑り台には誰もいなかった。

まだ帰るには時間が早かったが、何もする気になれなかった。

突然、高森が泣きだした。

「なんだよ」

「ごめん」

高森は俺に謝った。

「私、下手で、ごめん」

俺は何も言えなかった。なぐさめようにも実際に高森は弱かったし、それは自分でも分かっていると思う。将棋の弱さは自分が一番よく分かる。

「お前、角交換できなかったな」

そうは言ったものの自分でも違和感があった。俺はごまかしている。高森ができなかったのは、角交換ではなくて棒銀だ。俺、四間飛車も棒銀も教えていなかった。

気がつくのと、俺まで声を出して泣いていた。

俺は高森と本当に将棋を指していたんだろうか。

「ユウくん、泣くことないよ」

なぐさめられて、癪に障った。

「お前が、弱いからいけないんだよ」

俺は怒鳴った。ひどいことを言っているという自覚はあった。

「私、弱いよ」

高森は怒鳴りかえした。目に涙をためながら俺をにらんだ。

「お前、弱いんだよ。お前、棒銀、憶えろよ。俺、教えるから」

「憶えるよ。私、弱いよ。私、強くなるよ」

その怒鳴り声を聞いて、やっぱり俺が弱かったんだと思った。俺は負けたのだ。将棋ではない別の何かに。

(了)

# お城はあきた



成ってるなー  
成ってますねー

王様たちは  
成り駒の国に到着した



やっぱり顔がないとね

えー

この国を治めている  
「龍」と面会した



何がいいかなー

顔を描くことになった



考え中



考え中



考え中





これだ!

空

王様は「空」になった



楽しいなー

空

空

楽しいですねー

王様たちは成り駒の国で  
暮らし始めた



誰だろう

誰でしょうね

向こうから  
誰かがやってきた

つづく



硬派系将棋短歌

「我が生は香車なりき」に憧れる「桂馬」であると知った今日こそ  
断絶は孤独の怯え 然《しか》れども俺は崩さぬ矢倉の自我を

坊ちゃん系将棋短歌（マグネット式将棋セットに寄せて）

マグネット さあ指示せぼくの「香」彼女が消えた北はどっちだ  
「裏返れ。傷つけたくてたまらない。反発しあう磁石みたいに」  
磁石さえ弱々しくも他者を恋う「アンタが指した駒を頂戴？」

日常系将棋短歌（大喜利チックに）

ネタがない……将棋知らない……わからない……棒銀語る友達怖い……  
皆はさ 川柳書いても「LOVE将棋？ アンチ文芸？ 月子さん萌え？」

半島

駒を 箱にしまった帰り道少年は喉に血を感じおり

きらきらとすりへらしつつ傾いて「ぼくはあなたに負けたくなかった」

深夜0時 布団で耳をふさいでもまだ聞こえてる対局の音

「神さまはとても素敵に残酷ね。アナタは飛車でアタシは香車」

「ぼくはここだ ここにいるんだ」盤上のアナタを今日は否定していく

飛車は香に香車は飛車に惹かれゆく直線交じる盤の上こそ

## 題詠

捨てられた駒の心が叫んでる

捨てられた駒の心が叫んでる 元の持ち主に戻るだけだぜ 跳馬  
捨てられた駒の心が叫んでる 盗んだバイクではしりだしたい 半島

夢のよう王手飛車が決まったぞ

夢のよう王手飛車が決まったぞ あとは全駒目指してみるか 跳馬  
夢のよう王手飛車が決まったぞ 自玉は必死？それがどうした！ にゃんこ  
夢のよう王手飛車が決まったぞ 僕の王将もうとられてた 落波

穴熊に困っただけで勝った気分

穴熊に困っただけで勝った気分 働いたら負けだと思って引き籠もりにゃんこ  
穴熊に困っただけで勝った気分 ほらパトラッシュ、ルーベンスだよ 半島

とりあえず高価な駒を買ってみた

とりあえず高価な駒を買ってみた 手ピカジェルもついでに買った。にゃんこ  
とりあえず高価な駒を買ってみた ヤフオク見たら激安だった 半島  
とりあえず高価な駒を買ってみた ヤフオクの駒偽物だった 落波

## 講評

捨てられた駒の心が叫んでる 元の持ち主に戻るだけだぜ（跳馬）

評：相手が泣こうと喚こうと人事異動はタライまわし……という解釈でよろしいか。ああ……今日も日本には駒の心が叫んでいますな……。というかあれですかね、将棋の盤上では泣いて馬謬を斬るという次元が存在しませんね。まあ敗因は常に自分というのでも潔しですな。でもこの歌を見る限り、駒への愛着もあるのかな。……跳馬社長は相手の産業スパイをこちらで買収した後

に切り捨てるタイプなんですか。クソッやっばアンタを信用するんじゃなかったぜ！！ 皆さんは駒の悲しい叫び、聞こえますか？（ウォール街半島）

捨てられた駒の心が叫んでる 盗んだバイクではしりだしたい(半島)

評：この世で一番有名なバイクは、なんといっても「尾崎に盗まれたバイク」でしょうね。本来腹立たしいことのはずが、尾崎に盗まれたとあれば誇らしささえ感じてしまいます。そのため全国には百台を超える自称「尾崎に盗まれたバイク」があるとされます。突き捨てられた歩が駒台の上でそれを見つけることもないとは限りません。相手が気が付くと歩が一枚足りない。駒台の下も座布団の裏も鞆の中も机の中も探したけれど見つからないの。それより僕と踊りませんか。ブロロロロロ……(オーマイリトル落波)

夢のよう王手飛車が決まったぞあとは全駒 目指してみるか (跳馬)

評：積極的です。取った飛車で敵陣を荒らし一網打尽。笑いが止まりません。しかし全駒の仕方を考えてるうちに時間切れという間抜けな負け方もあるのでご注意を。ちなみに全駒とは、わざと相手の王を詰まらずに、どんどん駒を取っていくことです。嫌がらせです。嫌がらせのうまい人は将棋が強い。王手飛車が夢のよう、と言っているのとちょっと矛盾しますね。今度月子さんが全駒の仕方をレクチャーするので、一時間4千円でどうですか。(ドン・落波)

夢のよう王手飛車が決まったぞ白玉は必死？それがどうした！（にゃんこ）

評：そう、白玉を差し出してでも欲しいのが飛車。飛車のためなら臓器を売ることすらためらわないのが将棋指しというものです。討ち取られた王は思います。「私は実力のないまま王になった。ただ父の跡を継いだだけだった。飛車は実力で地位を勝ち取った。だから民は私を見捨て、飛車を選んだのだ。私も自らを鍛え、敵陣に切り込める猛者にならねば」次局、修行から帰還した王は一気に跳躍して敵陣へ……「反則です」(鳥山落波)

夢のよう王手飛車が決まったぞ 僕の王将もうとられてた（らくは）

評：終局後、将棋飲み会が終わった後で酩酊のうちに眠りこむ作者。翌朝気が付いたら目の前には片付け忘れた将棋盤が。「ああ、そうか。僕は昨日負けたんだな……」そして彼はベランダに出て空を見上げ、シャボン玉を吹く。仲間たちとふざけてコンビニで買ったものだ。電車の走る音が聞こえる。街ではサラリーマンや高校生がいそがしげに駅へ走っていた。……うん。無理だ。この歌のシュールさは妄想ではどうにもならなかった。（ふかわ半島）

穴熊に囲っただけで勝った気分 働いたら負けだと思って引き籠り（にゃんこ）

評：そして十年……さらに十年……ゆあーんゆよーんゆあゆよーん。気付いたら千日手ですね。わかります。ただ穴熊という戦法をらくはさんから伺った内容で判断すると、この短歌は非常に「良く言ってくれた！」でしょうね。非常に腑に落ち、さらに笑いもとれる。にゃんこ先生は噺家になれそうです……。幾時代かがありまして……。茶色い戦争ありました。幾時代かがありまして……。それは香車の皮衣。（中原半島）

穴熊に囲っただけで勝った気分 ほらパトラッシュ、ルーベンスだよ（半島）

評：神様の祝福が二人を包む。まるで、それは、駒たちに囲まれた王将のようだった、ということでしょうか。本音を聞いてみましょう。「パトラッシュ、僕は一度秋葉原にあるというメイド喫茶に行ってみたかったんだよ……」(ハーデス落波)

とりあえず高価な駒を買ってみた手ピカジェルもついでに買った。(にゃんこ)

評：さすがです。やはり駒を買ったなら扱う指の方も手入れしないとですね。あと、高価なものを買った後は少々の出費も安く思えてしまうから危険ですよ。ところでにゃんこさんの指はどのようなになっているのでしょうか。にゃんこさんはどこまでが人間でどこからがネコなのでしょう。ひょっとして自由自在なのでしょう。盤駒をカリカリしだしたりしないのでしょうか。今度コツソリ教えてくださいね。(マタタビ落波)

とりあえず高価な駒を買ってみた ヤフオク見たら激安だった（半島）

評：ざまあwwwwwwwwww、ですね。いやまあ考えてみましょうよ、駒というのはパートナーともいえるわけです。たとえ安く買えたとしても、高いお金を払ったことにも意味があるのです。しっかり手入れしてあげてください。愛おしんであげてください。見栄えが良ければいずれヤフオクでもっと高く売れるかもしれませんよ。(百度落波)

とりあえず高価な駒を買ってみた ヤフオクの駒偽物だった（らくは）

評：ざまあwwwwwwwwwwというのは嘘でございます。それよりもアータ、ノークレームノーリターンだって念を押したでしょう？ 困るんですよネーこういうショップ評価付けられちゃ。営業妨害って知ってます？ 今度私の知り合いのお兄さんたちとお宅へ伺いましょうか？ 謝るんだったら皆川さんをくれ。（司会者半島）



清水らくは

「な、何よその目」

そんなことを言われても仕方がない。俺の部屋を訪れた皆川さんは、とても今から研究会をするとは思えない、ヘンテコな格好をしていたのだ。まず目立つのは髪。つむじから台風が発生したかのようにまかれていて、肩まで突風が吹き荒れている。眉毛は細くきりりと描かれていて、睫毛も絶賛増量中だ。両耳には金色のイヤリング。鳩が二羽くっついたみたいな形だ。胸元は鎖骨がくっきりと見えていて、十字架のペンダントが光っている。赤と黒のチェックのワンピースは丈を間違えたのか膝上20センチぐらいまでしかなくて、それを補うためか膝まであるブーツを履いている。

「イベントの帰りか何か？」

朝の十時だというのにバカなことを聞いてしまった。いや、徹夜の帰りということもあり得るか。それにしても化粧がばっちり整っているけれど。

「そんなわけないでしょ。上がっていい？」

「あ、うん」

たけのこを引っっこ抜くように苦労してブーツを脱ぐと、真っ赤なニーソックスが現れた。まじまじと見て、結論。皆川さんは何かをやりすぎている。

しかし俺にはそれを注意する勇気もなく、彼女を部屋の中に招き入れた。

「……こんな感じなんだ」

まじまじと見られても、あんまり物がないだけのつまらない部屋だ。皆川さんはバッグをソファにおいて、テーブルの前に腰かけた。

「どんな感じに見えます」



「辻村っばい」

「ばい？」

「一目じゃよくわからない感じ」

それは単に変だ、と言っているのと変わらないのではないか。別にいいけれど。

「ちょっと待っててくださいね。紅茶を淹れますから」

「あ……あのさ」

「はい？」

「ケーキ買ってきたから……食べなよ。たまたま目についたから」

「はあ。じゃあ、小皿も出しますね」

女の子が甘いもの好きというのは本当らしい。まあ、男性棋士もタイトル戦でばくばく甘いもの食べているけれど。俺は実は、あまりそういうのを食べない。ただせっかく買ってきてもらったので、黙っておく。

「盤はこれ？」

「あ、はい。安いやつなんですよ。昔、兄弟子から買ってもらって」

「へえ。……て、あれ？」

「どうしました？」

小皿を並べる俺の顔を、不思議そうに覗き込む皆川さん。なぜそんな表情をするのかまったくわからない。

ピンパーン

その時、インターホンの音が鳴り響いた。入居した時から、少し調子はずれの音だった。

「あ、来た来た」

「え？」

玄関を開けると、そこには先輩が二人。善波四段と、長曾根二段だ。昨日連絡を貰ってから、少ない人脈を当たって研究会に来てもらうようお願いしたのだ。二人はよく控室にもいるし、それほど忙しくないだろうと踏んでいたが正解だった。

「お、いい部屋じゃない」

「そうですね」

善波さんはどかどかと、長曾根君は遠慮がちに部屋に入ってきた。

「あの、辻村……」

「うん？」

「四人で？」

「ああ。色々な戦型指せた方がいいと思って」

「そ、そう」

皆川さんはなぜかテーブルにおかれた四枚の小皿を見ながら、小さく頷いていた。唇を噛んでいるようにも見えたが、理由はわからなかった。

目の前には豆腐。醤油を付けて一口頬張る。確かに、売り文句の通りに濃厚な味がした。

今日は、竹籠商店街杯。インターネット道場で若手女性棋士がトーナメントで戦う棋戦である。ただ、それだけではない。スポンサーとなっている商店街の各お店で解説会が行われるのだ。お客さんは様々な解説会を比べて見れると同時に、お店の商品についての説明を聞いたりもできる。俺が担当することになった豆腐店では、最近売り出した「やっこさ豆腐」を試食することができる。電気店では大型モニターで対局画面を見れるし、八百屋では「野菜将棋」なるものが準備されていて、大盤の上に野菜が置かれている。例えば歩は玉ねぎ、金はキャベツといった具合で、一回動くごとに5円ずつ安くなり、対局終了と同時に売り出すそうだ。

今年は二回目で、去年はいろいろな不安を抱えながらの開催だったが大盛況だったらしい。将棋に興味のない人も足を止めてくれるし、何より一つの対局に複数の解説者が付く、というのが好評だったようだ。

用意されたパソコンに、四つの盤面が映し出されている。出場者は八人。皆川さんなどの女流棋士のほかに、奨励会員の月子さんや女流アマチュアも参加している。若手女性ナンバー1決定戦なのである。

一回戦、皆川さんの相手は桑木研修会員。13歳と今回最年少で、女流育成会には所属したことがない。聞くとところによると奨励会からプロ棋士になるのを目指しているらしい。

各出場者にはモニターカメラも設置が義務付けられているので、現在の様子を見ることが出来る。今日の皆川さんは髪の色も落ち着いていて、ちょっと茶色がかかっている程度だった。紺色のブラウスにネックレスをしている。眉毛は描き過ぎな感じがするけれど、全体的には良い感じである。

相手の桑木さんは美少年かと思まごうほどきりりとした顔つきで、髪も短くちょっとぼさぼさだった。服は制服だろう、ブレザーっぽい。年齢や境遇などは別にしても、対極的な二人だ。

ちなみにつっこちゃんは今日もとてもかわいかった。ツインテールから延びる髪は、タイムラグのある荒い映像でも輝いて見えた。真っ白なカッターシャツも、よく似合っている。あの後ろに三東さんがいるのかと思うと悔しい。

俺のブースはそこそこの人気で、十数人の観衆がいた。おそらく豆腐が試食できるからだ。そういえば今日は「制服で」というリクエストがあったのだが、普段着ていないので余所行きみたいな感じがする。何でも高校生が制服を着ると人気は二割増しになるらしいが、意味が分からない。

対局が始まると、あっという間に局面が動いていく。早指しの上に四戦やっているのだから、全てを把握するのは無理だ。とりあえず一つに的を絞って解説することにする。

まずは金本-小柴戦。アマ最強の小柴さんは、プロに何度も勝っている実力者だ。中飛車からの軽いさばきを得意とする、いかにもいまどきの若い子、といった感じの指し方を得意とする。局面はやはりゴキゲン中飛車、それに対し月子さんは右銀をするすると上がっていく指し方だ。最近奨励会で流行っているらしいのだが、つっこちゃんが指すとレトロな急戦に見えるから不思議である。この指し方は相手の手を限定する一方で、こちらの方針も立てにくい。一気に攻めれないと見るや持久戦になったり、いきなり大駒が総交換になったりと景色の変わり方が激しいのだ

。「これはですね、気合に見えてかなり研究の進んでいる手順です。後手は金銀が前に繰り出せない代わりに飛車と角の働きがいいんですね。先手は抑え込みに行くんですが、角がなかなか働かない。角をおとりに飛車を成り込んで桂香で攻めるような感じがいいんですね」

中盤になり、さすがに手が止まる。他の三局にも目を移す。相居飛車は一局もなく、振り飛車人気うかがえる。皆川さんは三間飛車相手に穴熊。先日の研究会でも出てきた形だ。どうしても穴熊は組むことが目的になってしまうが、三間飛車相手だと特に、序盤が重要になる。右銀を使えること、相手の飛車に活躍させないこと、端攻めを「無理攻め」にさせることがポイントだと教えた。

これまでの皆川さんは、どこかふわふわしたところがあった。勝ち負けにこだわらないというか、何かを賭けているという感じがしなかった。それがここ数日、何かが変わった。すぐに結果に出るかはわからない。ただ、指し手に意志を感じられるようになった。

観戦者は少しずつ入れ替わる。俺の解説に一切耳を傾けない、豆腐を食べに来るだけの人もいる。そういえば隣はブティックで、女流が入れ替わりで店の服を着て解説、ということで一番人気ようだった。そりゃあ豆腐食べながら男子高生の話を聞くよりはそちらに行くだろう。

ぴろっ、と電子音が響いた。投了の音だ。大学女流ナンバー1の吉野さんが早々と勝負を決めていた。四間飛車相手に見事な急戦だった。

「筋がいいですね。最後まで飛車を取らず、金の方を取って決めました。そっぽの大駒はおとりなんです。取った飛車を打っても底歩で受かる。金を取った場合、とった馬も攻めに利いて、歩では受からない。金も攻めに使えます。参考になる感覚ですね」

負けたのはプロ。とはいえ最近誰も驚かない。強い女性が増えたのだ。

続いて次々と対局が終わっていく。皆川さん、そしてつっこちゃんも勝った。

午後、皆川-金本戦が実現する。

若手女流棋士と奨励会員。今までにはあまり見られなかった組み合わせだ。そもそもつっこちゃんが公式戦を指すの自体、今回が初めてなのだ。

昼食は、当然豆腐料理。豆腐ステーキに豆腐のスープ、冷奴。いい加減豆腐に飽きてきそうなものだが、ありがたくいただいた。普段誰かに作ってもらうことがないので、差し出されるだけでうれしいのだ。

観戦者たちにも割安価格で豆腐料理が提供されている。その中に、見知った顔がいた。黒いジャケットにやわらかい襟のクリーム色のシャツ、首元には小さな銀色のペンダント。口紅やアイシャドーも施されている。いつもと違って女の子っぽい格好なので気が付くのが遅れた。

「木田さん」

「……お疲れ様です」

木田女流2級。この格好は、隣のブティックで出演したままのものだろう。元々顔立ちが整っているの、おしゃれが似合う。

「出番は終わり？」

「まだありそうです。先輩たち、着替えはじめるとなかなか戻ってこないんですよ」

「なるほど」

「最後のほうしか見れなかったんですけど、辻村さん、解説上手いですね」

「いやいや、早口で聞き取れないって言われるよ」

「大丈夫でしたよ。ほ……私まだこういうのに慣れなくて」

どことなく、木田さんには影がある。年齢に見合わずというか、若くしてプロになった人間らしくないというか。そういえば年齢は俺の方が下なのだが、こちらが敬語を使われる関係が定着してしまった。奨励会に落ちたことなどが、彼女の心にしこりを残しているのかもしれない。

「来年は出場の方で頑張ってね」

「そう……ですね」

何となく浮かぬ顔だった。ひょっとしたら、出場資格を失うぐらいに活躍するつもりかもしれない。自分が木田さんの立場だったら、そう考えるかもしれない。

昼食時間が終わる。「失礼します」と言って、木田さんは席を立った。

数分後、午後の対局が始まった。二局だけなので解説も楽になる。

皆川一金本戦は相居飛車。相掛りだ。先手になった皆川さんは引き飛車棒銀を選ぶ。これは研究会で決まった先手番の時のつっこちゃん対策だった。つっこちゃんは対ひねり飛車が得意で、昔の形に明るい印象。なのでできるだけ最新形で対応した方が得、との判断だった。

ただ、つっこちゃんの対応は正確だった。時間の使い方も適切で、悪いところが見当たらなかった。他方皆川さんは、初戦よりも顔が大きく映っている。カメラは固定なので、前のめりになっているということだろう。気負っているに違いない。

まったくいじられていないつっこちゃんの眉毛が、とても眩しく見えた。プロになった多くの棋士が、光と言うものを持っている。努力だけでは獲得できないそれを、つっこちゃんは持っている。付け焼刃で努力した皆川さんには、残念ながら追いつけない。

「攻め始めるともう止まれないわけですね。先手は玉が薄いので、攻め合いには持ち込めない。ただ、ちょっと切れ模様ですね」

もう一局は、吉野さんが穴熊から快調に攻めていた。非常に現代的だ。

「現在銀損なんですが、五筋の歩が切れているのが大きいです。垂らせばと金、受けにも利きます。先手は左の銀がさばけていないので、それほど得していない。また穴熊は持ち駒の数がものを言うんですね。桂馬と香車を取れるので、攻めには困らなさそうです」

そして、そのまま波乱は起きなかった。二人はきっちりと勝ち切り、奨励会員とアマが決勝戦に残った。

結果は、見えていた。それでもわからないふりをして、解説を続けた。

店主から、豆乳を貰った。さすがに大豆のにおいに飽きてきた。

決勝戦は相矢倉。がっちりとした戦いから、先手の吉野さんが仕掛ける。が、つっこちゃんは崩れない。受けが強いというよりは、基本的に手がしっかりとしている印象だ。これは、師匠から習ったものとは考えにくい。三東さんの手はしっかりとしていないから。

矢倉の先手は、一度間違えるときつい。入玉されるのを防げなくなってきた。

「これは、後手勝ちですね。金本さんは一手も間違えていません」

最後は指す手がなくなり、先手が投了した。金本月子、初めての棋戦参加で優勝。

「強いなあ」

観戦者の中から声が漏れた。確かに強い。プロになるまでにはもっと階段を登らなければいけないが、現状ではこれで十分だろう。

感想戦が終わり、カメラのスイッチがオフになる。

「それでは、これで解説会を終わります。商店街はまだ空いていますので、是非お買い物して帰ってください」

人々が引き上げていく。俺は携帯を手に取り、「お疲れ様でした」と打って、送信した。

ついにこの日が来た。

C級2組順位戦三回戦。二連勝同士、川崎一辻村戦。

昇級に向けた勝負はまだまだ続く。けれども、この一戦は一番重要な対局だと思っていた。

くしくも、現状勝率はちょうど七割。これに負けて七割未満になるのは悔しすぎる。

九時四十分。すでに川崎さんは上座についていた。ペットボトルのお茶とのお菓子が脇に置かれている。

俺は下座に着き、腕時計を外す。そしてカバンから、湯呑みを出した。川崎さんが、一瞬それを覗きこむのがわかった。

別に何の変哲もない、少し大きめの湯飲みだ。けれども、大事なものでもあった。プロになった時、おじさんが贈ってくれたのだ。小さい頃から唯一俺をかわいがってくれた大人だった。遠くに引っ越してしまい滅多に会うことはなくなったけれど、俺のことは覚えてくれていた。

高校生には不釣り合いな渋さだったが、気に入った。いつか大事な対局で、使おうと決めていた。

余韻に浸りたいところだが、C2の日は人が多すぎてどこか落ち着かない。どの部屋も人、盤駒、テーブル、記録係でぎっしりになっている。俺のような十代から、五十代のベテランまで。上を目指す戦いもあれば、フリークラス落ちを避けるための戦いもある。本当にいろいろだ。

三東さんもいる。正直なところ、順位戦で勝っているイメージがない。このままでは若いうちにフリークラスに落ちてしまうだろう。けれども、前とは少し違う雰囲気を感じる。少し歳をとったというか、父親のような顔をしている。

振り駒はない。順位戦は先後が決まっています、俺の先手だ。十時になった。

一礼して、天井を見上げる。何かを探しているわけではない。残像を消して、頭の中の盤を鮮明にするのだ。

一分ほど経ただろうか。ゆっくりと初手、▲7六歩。

川崎さんは盤面にじっと視線を落としている。時折、上唇をなめている。

しばらくして、二手目△3四歩。

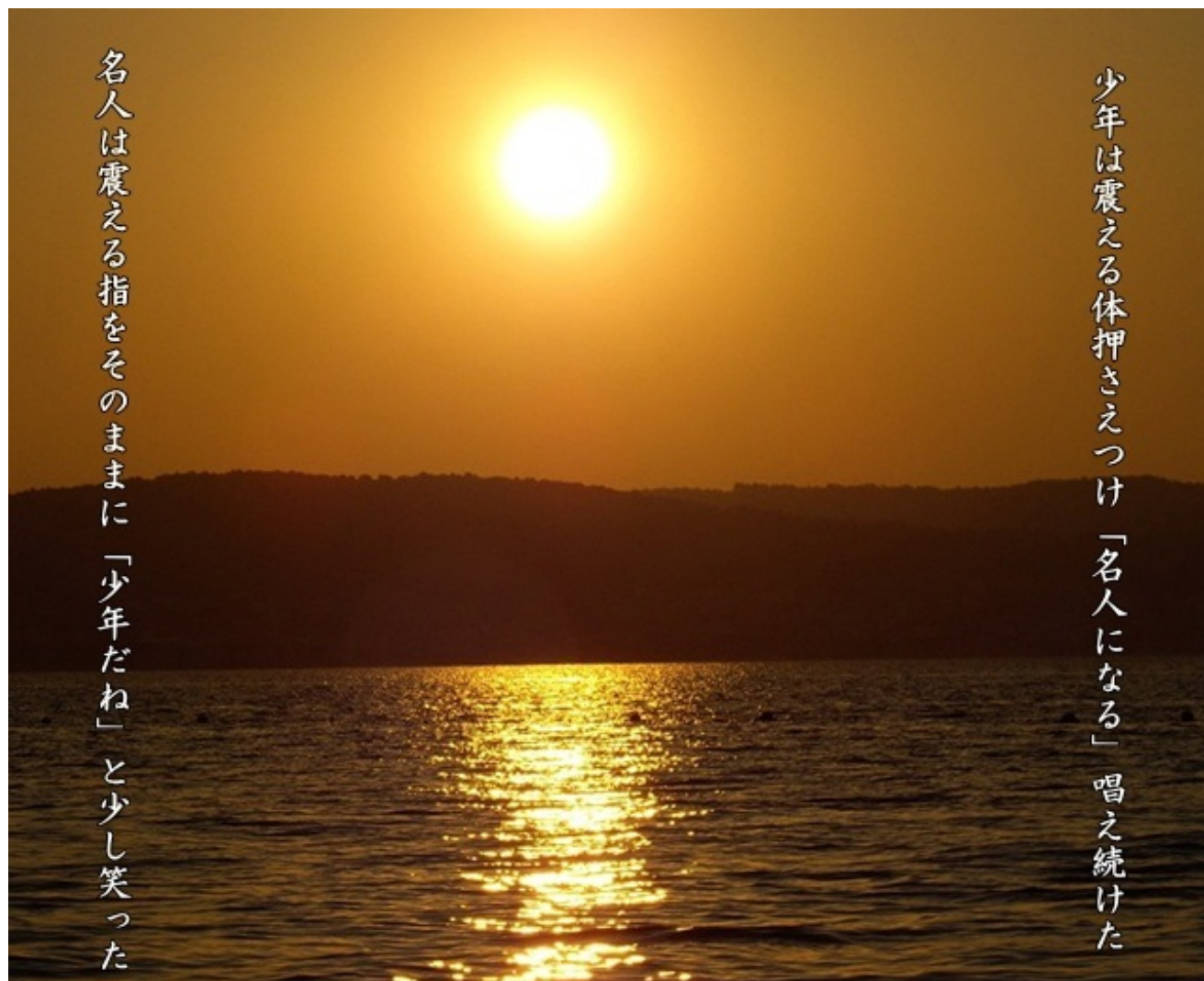
それからしばらくは、すらすらと指し手が進んでいった。横歩取り3三角。最近特に多くなっている戦法だ。おそらく相手も研究充分だろう。

湯呑みに注がれたお茶を、一口飲む。いつもと同じ中身だが、少し深い味に感じる。喉の奥が、洗われていく。

19手目まで進み、川崎さんが考えている。俺は席を立ち、廊下に向かった。何かをしに行くわけではなく、リズムというものだ。

順位戦の一日は長い。今日は特に長くなるだろう。勝たなければいけない。絶対に、勝たなければ。

<続く>



ツクモさん、指しすぎです！



贅楽夢

——懸君。あの子と将棋を指してくれないか？

そう言って。

住職は静かに右腕を伸ばし、部屋の一角を指さした。

振り返ると、そこには僕を射るように見つめる一人の少女の緋色に染まる瞳があった。辺りには夕日が差し込んでいる。少女の瞳の色はそのせいだろう。

.....そう言えば、いつの間に雨は上がっていたのか。

やがてその少女は音もなく立ち上がり、すべるように僕の脇を抜けると茜色に染まる将棋盤の前に座った。

あの時そこで引き返すべきだったのだと今でも思う。だが、その時の僕はその場を離れることが出来なかった。

そこにあるモノに目を奪われて。

そこにいたモノに心を囚われて。

後悔は何故いつも、先には立たないのだろう.....。

—

「こんなところにお寺があったなんて全然知りませんでした」

「道沿いにありますしねえ。山門も地味ですし」

山門が立派ならいいというものでもないんですけどね.....そう言いながら、ここ（「長考



寺」というらしい) の寺の住職がお茶を差し出してくれた。借りたタオルで濡れた髪を拭きながらお茶を飲む。足は座ったときから正座。和室の客間に通されたのだから当たり前と言えは当たり前なのだが、つい正座してしてしまうのは言ってみれば僕の職業病みたいなものでもある。

「すみません、急に上がりこんだりして」

「急に激しい雨が降ってきましたからねえ。それに、お寺というのは誰にでも門戸を開いている所なので、気にしないでください」

やけに人当たりの良い住職は座卓を挟んで僕の真向かいに座ると「田沼泥鰯」と名乗った。字を聞いてふざけたような名前だと思ったが、僧侶なりの深い意味でもあるのかもしれない。どの道、本名ではなく法名だろう。

僕は「懸香太郎といいます」とだけ言った。勿論、法名ではない。住職の歳の頃は三十代半ばぐらいに見えるが、実際はもっと上かもしれない。頭は光り輝くような剃髪である。というか照明を受けてホントに光っていた。住職は名前だけでなく表情までふざけているように見える。法衣を着ていなければ怪しい訪問販売員に見えるかもしれない。

「ありがとうございます。雨足が弱くなったら帰りますので……」

ゴールデンウィークも後半の5月4日のこの日、僕はイライラした気分を両手一杯に抱えながら、ちょっとした気まぐれでいつもは通らない道をぶらぶらと歩いていた。単なる散歩である。その途中、急に強い雨が降り出して、雨宿りの場所を探していた時にこの寺の門が目にとまったのだった。軒先で雨宿りをしていると境内にいたらしい住職から声をかけられた。あれやこれやで、今ではこうして和室でお茶を飲んでいる。有り難いことである。そう言えば「有り難い」は仏教用語だって聞いたことがあったっけ。

「もっとも修行をしたいという方には厳しくなりますが……。どうです？入門して坐禅組んでみませんか？」

とんでもない。そもそも僕は別の分野に入門している身なのだ。

僕は棋士、つまりプロの将棋指しになることを目指して「奨励会」という養成機関に所属している。奨励会は段級位毎にクラス分けされ、成績に応じてクラスの昇降級が行われるのだが、僕はその一番上のクラス「三段リーグ」に所属していた。リーグの在籍者は二十名。半年程度の期間をかけて総当り戦が行われ、ここで上位二位以内に入れば卒業。晴れてプロ棋士としての資格を得ることが出来る。

「なるほど将棋をねえ……」

住職がニコニコしながら脇に視線をやった。この部屋に入った時にとっくに気づいていたことではあったのだが、その視線の先には——将棋盤が置いてあった。

「立派な将棋盤ですね」

厚さ10cm程の盤に5cmぐらいの足付。現代のプロの対局で使われるものと比べると小さいが、側面に漆塗りの上に金箔を使った蒔絵のようなものが描かれていて、ところどころ色が剥がれ落ちてはいるものの、高級感が漂っている。盤の上には赤茶色の駒箱が静かに鎮座していた。

——？

ふと、違和感を感じてよくよく将棋盤の方を見てみると。

「駒台はないんですね」

将棋には相手から取った駒を好きな時に好きな箇所へ打って使うことが出来るルールがあり、取った駒を『持ち駒』と言うのだが、それは使わない間は駒台の上に置いておかなければならない。その駒台がこの風景には欠けていたのだ。

「檀家の人、知人のそのまた知人……という方からの預かりものなんですけどね」

住職は立ち上がり、将棋盤の方へ向かって歩きながら「江戸時代から伝わるものらしいんですよ」と言った。

どうりで古いはずだ。古すぎる。将棋の盤駒というのはそんなに長持ちするものなのか。

住職によれば江戸時代には駒台はなかったそうで、それは初耳だった。駒台がなかったのだとしたら、持ち駒は盤側の床の上にそのまま置いていたのだろうか？この厚さの将棋盤に駒台なしではさぞかし見にくかったことだろう。

「どうです？おヒマなら一局教えていただけませんか？」

ヒマも何も外はまだ豪雨でとても帰れそうにない。もう帰りますから傘貸してください、とも言い切れず、僕は「ええまあ」等と意味不明の受けこたえをして、この急な指導将棋を引き受けることになった。

……引き受けてしまったのだった。

二.

「強いですねえ」

住職が感嘆の声をあげる。対局は住職の希望でハンデなしの平手戦で行わた結果、あっさり僕が勝った。

指導対局の場合は相手の力に応じて手を緩める（場合によってはワザと相手に勝たせる）こともあるのだが、住職の棋力では多少緩めたぐらいでは足りない感じだった。町の将棋道場で初段に少し足りないくらいだろうか。

千回指しても僕が全勝するだろう。……等と口に出したりはしなかったけど。そもそも、奨励会三段クラスだと、事故でも起こらない限りその辺のアマチュアに負けたりはしない。当たり前だ。

「うーん、さすが『名人候補』」

その言葉に、駒を片付ける僕の手が一瞬止まった。……どうやら知っていたらしい。

「いやあ、実は最近流行りの『観る将棋ファン』ってやつでしょね」

「あ、そうでしたか。では将棋界のことにも詳しいんですね」

自分で将棋を指す指さないは別にして、スポーツ観戦を楽しむのと同じようにプロの将棋の観戦は熱心にする。そんなスタイルのファンを世間では「観る将棋ファン」と呼んでいる。しかし、いくらファンとは言え一介の奨励会員までカバーするとは恐れ入る。たとえ僕が……『元・名人候補』であったとしてもだ。

「良かった良かった。助かった。強い人と友達になれて」

いつの間にか僧侶の友達が出来てしまった。返答に困っている僕に向かって、住職はさらにこんなことを言い出した。

「……実は頼みがあるんだけど」

友達になったせいか口調がタメ口になっている。

——ちょっと私には荷が勝ちすぎていてね……。

小さく呟いて、住職はゆっくり目を細めると。

——懸君。あの子と、将棋を指してくれないか？

そう言って。

静かに、ゆっくりと右手を上げた。人さし指が僕の右後方へと伸びている。一瞬、風が凪いだような気配を感じて、僕はゆっくりと振り返る。

住職が指さした部屋の片隅に。そこに……。

——巫女がいた。

どうやら腰まで伸びているらしいストレートの黒髪を水引で結わえ、前髪は眉毛がちょうど隠れる長さで切り揃えられている。透き通るかのように映えた白衣とそれを際立たせるような紅の袴——緋袴。

どう見ても巫女である。巫女にしか見えない。みこ。巫女と書いて「ふじょ」と読んだり、そう言えばイタコも巫女の一種なんだよね？……等というレベルの話では勿論なく、神社でよく見かけるあの可愛い可愛い巫女さんそのものだった。

最近はそのアルバイトのイメージが強くなってきているが、本来の巫女は神託を得てそれを人々に伝えるための存在だ。神楽を舞い、祈禱をし、占いを行う。古来よりこの国に連綿と伝わる神に仕える存在。巫女の神秘性を強調するような白い肌と薄紅色の唇。茶色がかったやや大きめの瞳が、じっとこちらを見つめていた。

この巫女さんが……将棋を？神楽じゃなくて？

いや、まあ、何と言うか。

『巫女が将棋を指すの図』は、とても美しいとは思うのだ。

それに巫女装束に限らずとも、そもそも和服での対局姿というものは男女を問わず美しいものだし。

例えば。

弥内女流名人がタイトル戦で披露する和服の袴姿に至っては、それはもう古今東西、前代未聞、空前絶後に美しく、もはや文化遺産に指定されるべきレベルに達しているのだ。

普通の和服でも超絶に美しい弥内さんが巫女装束に扮して将棋を指したりしたら、そのあまりの神々しさ故に、僕は心臓発作を起こしてしまうに違いない。実際、そんな妄想をして心臓が止まりかけたことは一度や二度ではない。三度や四度ですらない。両手の指では数え切れない。弥内さんほどではないけれど、弥内さんの足元にも全然及ばないけれど、その巫女——巫女装束の少女は十分に美しく、そして決してコスプレ用衣装などでは

ない（と、断言させて頂こう）本物の巫女装束を完璧に着こなしている。

まさに巫女の中の巫女だった。This is 巫女。

……と。

まあそんな、誰得なのか判らない巫女語りはこの辺にしておいて。

そんなことより。

「住職……ここ八幡宮だったんですか？」

巫女がいるのは普通は神社と相場が決まっているわけで。

ただ、大昔の神仏習合の名残りからお寺の境内で神道の神を祀っているケースもあり、その場合は名は「寺」であっても普通に巫女さんがバイトしていたりもする。

「いや、八幡様もお稲荷さんもないただの禅寺。立派な七堂伽藍だったでしょ？ 懸君も明日から坐禅に来る？」

「遠慮しておきます。それより、普通の禅寺になんで巫女が？」

住職の趣味だろうか？ありうる。巫女は立派に趣味として成り立つのだ……言ってる自分でも意味が判らないけど。

住職は僕の疑問には答えずに、こんなことを言い出した。

「キミ……その、どのくらい強いのか？ほら、プロの中でどのくらいのレベルなのか、とかさ」

『観る将棋ファン』ならそのくらい判るだろう、と思ったが口には出さずに一応答えた。答えさせられたのかもしれない。

「正確にはまだプロじゃないんですけど。まあ、何とか三段リーグを突破しさえすればプロ棋戦でもそこそこいけると……思うんですけど……」

情けない。人は他の誰でもない、自分自身の言葉が一番胸に刺さる。そもそも、三段リーグを突破することさえ出来ない人間が「そこそこいける」わけなんてないのだった。

僕が十四歳で三段に昇段したのが今から三年ほど前。そのタイミングで三段リーグを抜けていれば、史上四人目の中学生棋士誕生となるはずだった。僕自身、それが既定路線だと半ば確信していたし、周囲からもそういう空気を感じていた。だが、星一つの差で昇段を逃し、その後は毎回リーグ戦での成績は四、五番手で安定。中学生でのプロデビューは果たせないまま現在に至っている。

中学卒業後、僕は高校へは進学せずに将棋一本で生きる道を選んだ。高校生活と奨励会の両立は無駄だと思ったのだ。中学生棋士とはいかなかったが、それでもすぐに四段になれるつもりでいたし、プロ棋戦でもそこそこ活躍できる自信もあった。そして、二十歳ぐらいで元・奨励会員か女流棋士と結婚して、いずれ『名人』や『竜王』などのビッグタイトルを獲得するつもりだったのだ。タイトル獲得賞金で地下一階、地上2階建の豪邸を建て、さらにTVゲーム部屋を作って毎日『ラブプラス』三昧だあ！……と、妄想だけは立派に膨らんでいるのだが未だに実現していない。永遠に実現しないかもしれない。

「動機が不純な気もするけど、まあ夢の実現のためにはそれくらいのエネルギーがいるのかもね」

住職はそう言ってくれたが、そのエネルギーも最近は枯渇気味だった。

今年こそ……多分……という、今にして思えば意志薄弱な決意で臨んだ今期三段リーグ初戦でいきなり負けた僕は、ショックから立ち直れないままズルズルと時を過ごし、そして昨日の対局で、ついに開幕四連敗を決めてしまっていた。星が逆になっていれば、多分今ごろ僕はここにいなかっただろう。

そう、僕は雨宿りのためにここに来たのではない。部屋に一人であることに耐えきれなくなって、ただ逃げてきただけだ。

僕は……本当は「天才」で「中学生棋士」になれたはずで。将来の「名人」候補だったはずで。でも、今は「何とか棋士になりたい」ただそれだけだった。将棋指しは「棋士」になれなければ食べていけない。奨励会はプロの養成機関であって就職先ではないのだから。

僕は、二十歳までに四段になれば、棋士になる夢を捨てなければならないことになっている。それが、奨励会に入る時の両親との約束だった。

でも、これまで将棋しかしてこなかった僕に将棋以外の何が出来るだろう？ 18歳にして世界の終末が近づいてきている気分だった。

「こちらの巫女さん、将棋のプロでも目指してるんですか？」

つまり、奨励会員とは言え将棋界に身を置いている僕に、彼女の棋力を見てほしいということなのかと、その時の僕は思ったのだった。

「目指してるわけじゃないんだが……とにかく将棋の相手を探しているみたいで、最近『SHOGIクラブ24』で指しまくってるらしい。どんどんレートを上げてるらしいよ」

「ネット将棋ですか」

『SHOGIクラブ24』とはネット上で会員同士が将棋を指せるサイトのことだ。匿名で指している奨励会員も多い。勿論、僕もよく指している。トップクラスのプロ棋士もお忍びで指しているのではないかという噂も絶えない。というか指している。バレバレだ。

「プロの将棋を観戦して、観戦記をブログで公開したりもしている。毎回コメントが殺到する程の人気らしい」

「うわあ、かなり熱心な将棋ファンなんですね」

「ブログのファンの間では『姫』と呼ばれている」

「おおっ！」

「さらに、昼間から2ちゃんねるで大暴れしているという噂も……」

「……なるほど」

巫女はVipperだった。

三.

「ツクモくん、君の相手がようやく見つかったよ。……って別に探してたわけでもないけど」

住職がVipper疑惑のネット厨将棋巫女に声をかけた。

「ツクモです。以後、お見知りおきを」

巫女が名乗り、僕が、こちらこそと挨拶を返す。あまりじろじろ見てはいけない、と思いつつも、つい巫女装束のあちらこちらに視線が泳いでしまう。

正直、僕のこれまでの巫女追っかけ人生の中でも最高峰クラスの巫女さんだと思った。

一体どんな人生歩んできたんだって話だが、別に後ろめたいことなど何もない。記憶にはない。

「『月』に『萌え』で月萌（つくも）。月読命（ツクヨミノミコト）から拝借した名前です。巫女にぴったりの名前でしょう？」

そのとおりだと思った。思ったが、いきなりそんな名前の解説をされても返答に困るわけで。ちなみに、月読命は名前のイメージは女神っぽいのだが、実は男神だという説の方が有力らしい。「月」と聞いて「女性」だと思うのは、きっと月に代わってお仕置きしてくれるセーラー戦士の影響に違いない。それはともかく、苗字は何というのだろうか？

「私のような萌えキャラにぴったりの名前でしょう？」

でしょう？と言われても、衣装以外の属性がわからないのでホントに「萌えキャラ」かどうか判断がつかないが。というか、多分違うと思う。そもそも「萌え」というものは本来、衣装や作られたキャラ等の記号ではなく、受け取る側の感情の発露でしかないのだ。そもそもこういう発言は聞いている方が恥ずかしくなる。正直、痛い。イタタタ、だ。——それはそれとして、苗字については華麗にスルーされていた。

巫女装束の少女はさらに

「あなたの将棋は、なかなか筋が良いです。かなりの才能を感じます」

とのたまった。さすが将棋界のアルファブロガー、僕の才能を見抜くとはこの巫女かなりデキるな？……そんなことを思った僕もかなり「お痛」だった。

「デキるも何も……」

思っただけでなく、うっかり声に出してしまっていたらしい。僕の台詞を聞いた住職は、何だか面白いイタズラを思いついたような顔をしている。

「その子は多分、君より将棋歴は長いと思うよ」

へえ。何歳だろう？見た目は十五、六歳の感じなのだが。

「レディーにいきなり歳を聞くなんて……イヤらしい。セクハラですよ？」

年齢を聞いたらセクハラ認定されてしまった。そうか世間ではそうなっているのか。何しろ奨励会員は世事に疎い（多分）。……僕の場合は世事には疎いがデマとかゴシップとかエロには詳しかったりするし。でもそれはインターネットのせいであって、断じて僕個人の人間性とは関係ない。ないはずだ。

「まあいいでしょう。お相手しましょう。ただし」

やたらと上から目線だ。しかも、いつの間にか僕の方が巫女に挑戦させていただいているみたいな空気になっている。

「持ち時間無制限。まぐれでも何でもアナタが勝てたら……」

「何という自信だ！」

……こっちは中学生棋士になりかけた男だぜ？その可能性は消えたけど。天才と呼ばれた男だぜ？今じゃ元・天才と呼ばれてるけど。

つまり僕は、つまらないプライドだけは立派に高かったのだ。……この時までは。そして。  
「ふっ……」

と不敵な笑みを一瞬浮かべた巫女が、ビシッ！と音が聞こえてきそうな勢いで僕を指さしながら言った台詞はさらに「痛い」発言だった。

「特別に、この衣装のミニスカバージョンを披露してさしあげます！」

「何ですと？」

「実は私ニーソ履いてますし」

「巫女の絶対領域が拝めるだと！？」

「まあ、巫女は神に仕えているので私の場合は存在自体が絶対領域なわけですが」

誰が上手いことを言えと。というより、ミニスカニーソの話はそれが言いたかっただけのフリとしか思えない。

「いや、そうじゃなくて。それはスカートじゃない。緋袴と言うのだ！」

突っ込むところが違う気もしたがここは絶対に譲れない。

「……やけに巫女に詳しいのですね？」

とても不本意なことに、巫女の格好をした少女に巫女に詳しいことをなじられているような気がする。何だろう？あの汚物を見るような目は。もしかしてアキバを徘徊しているオタクと同類と思われたのだろうか？確かに僕は休日にはアキバを徘徊してるけど。何となくだが、せっかくお知り合いになれた巫女さんに嫌われそうになっている危機感を感じた。

まずい。立て直しを図らなくては……。

「詳しいのは当然だ。僕は初詣の時期には行けるだけの神社にお参りして巫女という巫女を鑑賞して回るほどの巫女マニアなんだ」

開き直ってしまった！

「何ですって？アナタという人は、神社を巡って巫女を視姦して回っているのですか！？」

「視姦じゃなくて！」

「痴漢？」

「違う。漢字を置換しないでください」

「それ別に上手くないですよ？くすくす……」

「くすくすって口で言うか！？」

「くだらなすぎて笑うのが面倒だったのです。大体、ちゃんとお参りしたことなんてあるんですか？」

「勿論。ちゃんとお賽銭も出してるし。ちなみに、直接お金を渡そうと思って巫女さんを追いかけてまわしていたら、しつこすぎるって怒られたことがある」

「巫女に直接おヒネリを渡すとは……。イメクラか何かの風俗ですか」

「巫女装束というのも元々は古代神道のしきたりだとか意味だとか色々あったはずなん

だけど、今では単なる社会風俗の一種としてしか見られていない感じがするよね」

「今、ご自分の変態的嗜好を学術用語っぽい言葉でごまかそうとしましたね？」

「ごまかしてなどいない。僕は巫女については真面目に勉強してるんだ。将棋の定跡より巫女の方が詳しいくらいだし。いやむしろ巫女が専門で将棋がバイトなんだ！」

きっとそうだ。だから中々四段になれないんだ。……とギャグのつもりで言ったのだが、これは案外真実をついていたかもしれない。

「そんな事だからアナタは永世奨励会三段なのですよ」

「うわっ、永世称号なのに全然嬉しくないっ!？」

将棋のタイトルをある一定の回数獲得した棋士は引退後に『永世〇〇』の称号が与えられる。例えば埴生名人は先年、名人通算五期を達成して「十九世名人」の資格を得ている。ちなみに奨励会三段はタイトルでも何でもなく、そもそも正式なプロとして認められていない身分なので、永世奨励会三段などという称号は実在しない。してたまるかっ!

「片鍋竜王は若くして永世竜王になったというのに……」

やたらと棋界情報に詳しい巫女だった。さすが将棋ブログの姫である。ちなみに片鍋竜王とは弱冠20歳で棋界最高タイトル「竜王」を獲得しその後7連覇を成し遂げて永世称号を獲得した将棋界最高峰の棋士の一人だ。僕の目標であり憧れの棋士でもある。

「……じゃあ僕は、20歳までに永世巫女に」

「そんなタイトルはありませんし。というより男性は巫女になれませんよ？」

「残念だ! くそっ、生まれ変わったら巫女の緋袴になってやる」

「そっちですか! ま、アナタほどの巫女への執着があれば生まれ変わったら緋袴になれるかもしれませんね」

「生まれ変われたら、ぜひ僕を履いてください!」

土下座をお願いしてしまった。

「キモっ」

さらに嫌われた!

「アナタのような変態を弟子にするのは大変不本意なのですが……」

どういうわけか弟子入りの話になっている。

「まあ、とりあえず一局指してみましよう。脈があったら下僕ぐらいにはしてあげます」

下僕かよ!

……そうして。

訳の判らない交渉が終了すると。

月萌が、すっと立ち上がり——僕の脇を通り過ぎて、そして彼女は夕日に染まる将棋盤の前に座った。

こうして——。

僕と巫女装束の奇妙な少女は、将棋を指すことになったのだった。



#### 四.

時刻は午後6時を過ぎていた。

住職は、そんなものを何で持っていたのかと言いたくなるぐらいに正式の（つまり将棋大会等で公式に使用される類の）対局時計を持ち出してきている。駒台は結局用意されなかった。

対局時計みたいなマニアックなグッズがあるのだから、駒台くらい持っていそうなものだが。仕方がないので駒箱をひっくり返して駒台の代わりにするしかない。将棋盤が立派な分、かえって格好がつかないけど。

「時計係は私が引き受けよう」

住職の提案で対局は双方1時間の持ち時間、切れたら双方1手1分以内で指すことになった。お寺という場所のせいだろうか、まるでタイトル戦が行われているような妙な高揚感を感じる。……というのはいくら何でも言いすぎか。それに懸かっているのはタイトルではなくミニスカなんだけど。いや、ミニ緋袴なんだけど。

「言い忘れていましたが……」

ミニ緋袴姿の妄想を見透かされたのか、月萌は下衆なものを見下すような視線を送ってくる。おかしい。ミニスカ披露すると言い出したのは月萌の方なのに。

「よく考えたら私だけ何かを懸けるとするのは不公平です」

確かに。じゃあ負けたら僕もミニ緋袴姿に……とくだらないボケをかまそうとする僕に月萌が宣告した。

「私が勝ったら、懸さんの一番大事なものをいただくことにします」

……は？

「男の子の一番大事なものをいただきます！」

長〇有〇の抱き枕だろうか？……持ってないけど。

「……抱き枕が恋人なのですか？」

ほっといてくれ。いや、だから持ってないってば。

「さては……。懸さん、あなた……」

いやっ。そんな目で見ないで！

「童貞さんなんですね！？」

月萌は、ビシィ！という音が聞こえてきそうなほどの勢いで人差し指を僕に向けながら叫びやがった。そんなに大声出さんでも。寺の中に『ドーテー』が響き渡ってしまったじゃないか！

「ど、童貞って何ですか？ それって都市伝説ですよ？」

「おえっ」

吐いた！？何故ッ！？背中さすりましょうか？

「ああ、気持ち悪い。さっさと始めましょう。この対局は一刻も早く終わらせないと……。童貞と長時間同じ部屋にいと、そこの住職のようにハゲてしまうという噂を聞いたことがあります」

嘘つけ。そんな都市伝説は存在しない。それにしても住職にも遠慮のない巫女である。当の住職は月萌の毒舌は軽くスルーして、ぼけっと禿頭を撫でている。手触りはよさそうだった。

す、——と。

風が凧いのような感覚が通り過ぎると。

いつの間にか、月萌の視線は盤上に注がれていた。

月萌が駒箱を開け、中から駒袋をつまみあげる。紐をほどき、盤上にゆっくりと、丁寧に駒を取り出す。プロ棋士を思わせるような完璧な動作だった。

まず彼女が「王将」の駒を、次いで僕が「玉将」を並べる。以下、順次駒が盤上に並べられていく。

将棋の駒の並べ方には一応「作法」があって、江戸時代にあった将棋の家元のそれが現代に伝えられているらしい。月萌は「大橋流」で並べていた。一方、僕は「玉将」の後には手に触れたものから順番に並べていく。僕自身はあまりこういうことにはこだわりのない。

双方が駒を並べ終え、

「では、振り駒を……」

言いかけた住職を月萌が制止する。

「レディーファーストという言葉があってですね」

巫女の一声で月萌が先手に決まった。レディーファーストってこういう時に使う言葉だけ？

住職は肩をすくめて、それからペしっと綺麗に剃り上げた頭を一つ叩く。叩きごちも良さそうだ。

「……では、対局を始めてください」

対局開始が宣言された。

月萌が居住いを正す。黙って座っていれば何しろ巫女装束である。まるでこれから神前での儀式が執り行われるかのようだった。

対する僕も背筋を伸ばしなおす。将棋は礼に始まり礼に終わる。思えば、将棋の対局開始前の一連の所作は将棋の神に捧げる儀式なのかもしれないと、眼前の巫女を見ながら思う。こんなことを思ったのは将棋を始めて以来初めてのことだった。タイトルを争うトップの棋士たちは、どれほどの敬虔さを持って将棋盤に対峙しているのだろうか？

「では……よろしくお願いします」

礼をして顔を上げる。月萌の瞳はまっすぐに盤上に向かっていて、視線を実体化できたなら、この時の月萌のそれは、きっと盤上に突き刺さっていたに違いない。

この少女が現役の女流名人だ、と言われたらうっかり信じてしまうかもしれないぐらいの気高さすら感じたが、もしかすると「巫女装束補正」が掛っていたかもしれない。

……それに、そもそもこの少女はトークが下品だ。女流名人たるもの、弥内さんのように佇まいも喋りも超絶に上品でなくてはならないのだ。やはり弥内さんこそ至高の女流

名人である。異論は認めない。

月萌が目を閉じる。一つ深呼吸。再び目を開けやや視線を落とし、左手をすっと盤上に伸ばした。

シルクのように美しい指が7七の「歩兵」をつまみ上げ、そして、駒が華麗に中空を舞う。

——▲7六歩。

パシ、と、乾いた音が——。

長考寺の七堂伽藍の静けさの中に、響きわたったような気がした。

五.

将棋には多種多様の「戦法」がある。それらは「定跡」として整理され、プロ棋士や奨励会員の間で日夜研究が続けられている。僕と月萌の戦いはその中でも最も本格的な戦法の一つとされている「相矢倉」と呼ばれる戦型になろうとしていた。正直、少しだけ「指導対局」気分であった僕は、駒組みの途中であえて通常と違う手順に分岐して「雁木（がんぎ）」と呼ばれる陣形に組み上げた。この状態で月萌の攻めを受けていなそう、という作戦である。相矢倉を真剣に指すだけのやる気がなかったとも言える。

「……ご存知ですか？ 懸さん」

急にジト目で話しかけられて狼狽する。

「その『雁木』は、江戸時代の檜垣是安とかいうヘボ棋士が、寺の山門を見て思いついたという中二病戦法なのですよ？」

初耳だった。中学校なんて存在していなかったはずの江戸時代に中二病患者がいただなんて！

「その山門というのが、この寺の山門と同じくらいのヘタレ山門だったという」

住職は静かに微笑んでいる。というかニヤニヤしている。

「全く、忌々しい……」

どうやら、この巫女は雁木が嫌いだったらしい。期せずして僕は美少女巫女に精神的な嫌がらせをしてしまったようだ。言わば雁木ハラメント。略して「ガンハラ」。異性にモテたい将棋ファンや交際中の将棋カップルは、相手にガンハラをしないよう気をつけて欲しい。ガンハラ訴訟に発展しても日本将棋連盟は責任を負いかねます。

「そんなヘタレ囲いなんて、ギッタギタにしてやるんだからねっ！」

月萌は僕をビシッ！と指さしながらベタな台詞を吐き、次いで『どびしいっ』という音が出そうな勢いで住職の方へと人さし指を向けた。人を指さすのが好きな巫女である。

「この寺の山門も、そのうちケチョンケチョンにしてやるんだから！」

雁木じゃなくて山門が嫌いなのかもしれない。ただ言ってみただけのような気がするが、そもそも山門が嫌いなら何故この寺にいるのか意味不明である。そう言えば、どうして禅寺に巫女がいるのかまだ答えを聞いていなかった。が、今はそれどころではな

い。

ガンハラへの怒りが棋力をパワーアップさせてしまったのか、中盤戦に入って月萌の攻撃はさらに激しさを増していく。一発一発が重いパンチを繰り出す月萌の攻撃に対して、急所に当たらないようギリギリの間合いで凌ぎ続ける。それにしても。

——強い。

指導対局気分は既に失せ無意識のうちに本気モードになっていた。駒の持ち方、指し方もいつのまにか余裕がなくなっていたらしい。

「それにつけても懸さんは駒の扱いが下手くそですね」

……そう、僕は駒の持ち方があまり綺麗な方ではなく以前はよく年配の棋士から「将来の名人がそんな指し方では困るよ」と小言を言われたものだった。最近はそういうこともすっかりなくなってしまったが、それは周囲が慣れてきたというよりも、僕が「名人候補」ではなくなったということなのだろうと思う。

一方、月萌の方はたとえばこちらが恥ずかしくなるぐらいに手つきが洗練されている。

一分の隙も見せないその対局姿は、将棋は勝負事である以前に芸事なのだと、そう主張しているかのようでもある。プロ並みに強いアマチュアはたくさんいるが、対局中の所作までプロ、しかもタイトル戦を彷彿とさせる雰囲気醸し出しているアマチュアはそうはいない。

というか、それはプロでも一握りの者にしかない、それこそタイトル戦を何度も戦って初めて身に付くオーラみたいなものなのだと思う。それに似たものをこの巫女装束の少女は持っている。一介のアマチュア棋士が何故、こんなオーラを纏っているのだろうか？

これも「巫女装束補正」だろうか？

「……実は、リアルでの実戦の時以外はほとんど駒を持ったことがないんだ」

僕はゲームで将棋を覚えてネット将棋で腕を磨き、そして奨励会に入会した。将棋はパソコンを使うことがほとんどで、木やプラスチックで出来た普通の将棋盤のセットを所有したことがない。一度両親が買ってくれると言いだしたことがあったが遠慮した。研究も観戦も棋譜の整理も全てパソコンでやっていて、駒を持つのは奨励会での実戦と知人の奨励会員や先輩棋士達とたまに指す練習将棋の時ぐらい。要するに物理的な「駒」というものに、それほど興味がないのだった。だから「美しい指し方」をしようだなんて考えたこともなかった。

「パソコンでやってても、将棋好きなら普通は盤駒を揃えるでしょう？」

「いや、あってもどうせ使わないような気がする。今一人暮らしで部屋も狭いから置く場所もないし」

「美少女アニメの抱き枕をあんなに大量に買い込んだりするから部屋が手狭になるんです」

見て来たように言うな！

「本当に駒を使って研究したことがないのですか？」

月萌は、なんとなく怒っているようにも見えた。美少女抱き枕を大量所有している、ごく



十万三千冊の魔道書が、実はインデックスの将棋の駒に書かれていたという衝撃の新説が発表されてからしばらくして――。

互角だった形勢はやや月萌の方が有利な状態へ変遷し、やがて局面は終盤戦に入っていた。

僕は将棋界でも終盤力に定評のある方だ。自分で言うのも何だが、ある程度「天性」のものだと思っている。中学生棋士になりかけたのも全てはこの終盤力の賜物だ。駒は触らないし定跡の研究もほとんどしない僕だが、毎日詰将棋の問題を解くことだけは欠かしたことがない。

詰将棋は本を開いて問題を覚えたら、後は脳内イメージで駒を動かす。将棋脳を鍛えるのに盤駒は要らない。結局、将棋は「読みの力」を競うゲームであって、駒の扱いの美しさを評価する採点競技ではないのだから。

だが、そうは言っても。

月萌の終盤力も尋常ではなく形勢をひっくり返すことは徐々に困難になりつつあった。一手一手をなるべく早く指していたのに、持ち時間も残り少ない。将棋が終わる前に時間切れで負けてしまいそうだ。……いや待て。そもそも月萌が対局中に喋りすぎなのだ。

しかも僕の考慮時間の時だけ喋ってたし。絶対わざとだ！

ふと視線を上げ将棋盤の対面に目を向けると、そこには将棋盤の上に静かに視線を落とす落ち着き払った巫女の姿があった。その姿を見た瞬間、この将棋はこのままお互いが正しく指せば月萌の勝ちに終わることを、僕は覚悟した。相手をワナに嵌める紛れのある変化もいくつか見えたが、逆転のチャンスを追いつける気力は既になくなっていった。

そして。

それから数手の後、静かに僕は頭を下げた。

「参りました」

月萌は「ありがとうございます」と礼を返すと、顔を上げてキッと僕を睨んだ。

「懸さん、この将棋、真剣に指しましたか？勝利への執念が足りないではありませんか？」

そんなことは……。いや、勝つつもりで指してはいたのだけれど。正直、月萌の強さが想定外すぎた。今すぐ三段リーグに参加しても余裕で勝ち越せるんじゃないか？

「私の考慮中に将棋のことだけを考えていましたか？どうせ超絶美少女の私の可憐な唇にでも見蕩れていたのでしょうか？」

どの口でそれを言う？……僕の思考を妨げるようなトンデモトークを展開していたのは目の前の巫女だったように思うが、勘違いだろうか？

「この巫女衣装の下に隠されたキュートな絶対領域を想像して楽しんでいましたね」

そここのところは強く否定出来ないんだけど。否定はしないが別に将棋のことを考えていなかったわけではない。少なくともガンハラをした後はずっと本気だったのだ。ミニ緋袴姿をケータイのカメラで激写しまくってから帰宅するつもりだったのに！

「全く……。本物の棋士はいつどんな時でも将棋のことだけを考えているものなのに。お

方様は『盤上の棋理を追い求めていると、この世の真理にすら触れられるような気がする』とおっしゃっていました。……ああっ、お方様ったら萌えるっ、萌えるわっ……はあはあはあ……」

巫女が悶えている。『お方様』とやらが誰なのかは知らないが、その様子からすると月萌の憧れの人なのだろう。

もしかして、プロ棋士だろうか？

「余計な詮索はしないでください。あと、勝手に話しかけないでもらえますか？マネージャーを通していただけませんか」

一局の将棋に勝っただけで、月萌はすっかり雲の上の人になっていた。ふんぞり返っている。どんだけ調子に乗ってるんだ？

「これぞまさしく『絶対領域』ってやつですね！懸さんは、私の美脚をご覧になりたかったのでしょうか、残念ながら私は何人たりとも冒しえない領域に到達してしまったようです。頭が高いですよ？私に話しかけるときは、ちゃんとおでこを床に着けなさい」

ヒドい言われようである。だんだん悔しさがこみ上げてきている。おかしい。始めた時は単なる指導対局気分だったのに。

「まあ、懸さんは抱き枕カバーの萌え絵のおみ足でも眺めていればいいのです」

抱き枕なんか持ってないと言うのに。

……と、そんなドSトークがしばらく続いて。

それでも一応感想戦らしきものが行われ（月萌の言葉の暴力を浴び続ける、という単なる罰ゲームだったのだが）辺りもすっかり暗くなった頃に。

——ようやく、巫女との将棋はお開きとなったのだった。

「うーん、君なら勝てると思ったんだけどねえ」

寺務所を出て、山門の方へ向かう僕に、住職が何故か申し訳なさそうに言う。

「それは……期待に添えなくてすみません」

「まあ大丈夫だろう」

何がどう大丈夫なのか判らないのだが。

「暴言の嵐だったしねえ。集中力を削がれたのかもしれないけど。懸くん、精神力を鍛えたいなら坐禅でも組んでみたら？」

「せっかくですけど遠慮しておきます。今日はありがとうございました」

改めて礼を言い、山門をくぐると、またあの巫女の声が聞こえてきた。いつの間にそこにいたんだ。

「もう少し序盤の研究をなさった方がいいですね。パソコンをされるのでしょうか？twitterをやってみるといいですよ。将棋クラスタに泣く子も黙る『序盤ソムリエ』と呼ばれる方がいらっしやいますからフォローしてみてください。最新の定跡だけでなく古い定跡につい

でもツイートされるので、とても参考になります」

「わかった。やってみるよ、ありがとう」

「それと」

月萌はまた僕をビシッ！と指さした。今日で何回指されたのか、もう覚えていない。「お忘れかもしれませんが、『大事なもの』はきちんと回収させていただきますからね」そうだった。

……脳内で、大事な美少女フィギュアと抱き枕が走馬灯のように駆けていく……いや持ってないんだけど。ほんとにほんとに持ってなんかいないんだけど。

帰宅してすぐ、PCを起動してtwitterにアクセスした。手帳を引っ張り出して以前登録したアカウントとパスワードを確認する。「@Yuki\_aisiteru」とあったが、全く意味が判らないので「@shogi\_kkr」に変更した。これからは将棋中心になるのだからこの方がいいだろう。

「将棋」をキーワードにツイートの検索をしてみると、確かに将棋を話題にしたツイートがたくさんある。よくもこれだけ話題があるものだ。対局や手順の考察だけにとどまらず、プロ棋士のことについて熱く語っていたり、各種イベントについて情報交換していたり。

熱心というか何と言うか。将棋の棋士がまるでスポーツ選手かタレントみたいに思えてくるような雰囲気だった。

月萌が言っていた「序盤ソムリエ (@yamajunn21)」のアカウントを探してみるとあっさり見つかったので、早速フォローしてみる。

元々他人とのコミュニケーションというやつが苦手だったのだけれど、それでも恐る恐る「リプライ」というやつを試してみたりして。その頃にはもうすっかりtwitterが楽しくなっていた。「@Yuki\_aisiteru」時代にはなかった感覚で、やはり意味の判らないアカウントは使うものではない。

「@yamajunn21 はじめまして。将棋の定跡に詳しいと聞いてフォローさせていただきました。僕も少し将棋を指します。よろしくお願ひします」

身分は隠して。一般の将棋ファンのフリをして。するとすぐに返事が来た。

——来たけど。来るには来たんだけど。

「@shogi\_kkr 見せてもらおうか。@shogi\_kkrのツイートの、性能とやらを！」

……ガンオタだった……。



七.

「住職！住職！……僕です！住職！」

次の日、僕はまた長考寺を訪れていた。時刻は午前11時頃。とっくに開いていた山門を一気に走り抜け寺務所へ向かう。僕はろくに用件も告げずに、我を忘れて住職を呼んでいた。この時間帯、この寺では何をしていたのか。もしかすると、一般市民が参加する坐禅会でもやっていたかもしれない。だとすれば迷惑行為以外の何物でもなかっただろう。当然のように、若い修行僧らしき人にひとしきり怒られてから昨日の和室に通される。待っていると、しばらくして住職が現れた。

「ん？寺務所の窓口で迷える衆生が錯乱しているというから来てみれば、何だ懸君じゃないか。どうしたの？坐禅組みに来たのかい？」

「そ、それどころじゃありません！」

「禅寺に来ておいて坐禅どころじゃないとは面白い。それは公案かい？だが修行で禅問答するのは臨濟禅。残念ながらうちは曹洞禅だ」

確かに住職は相当イカレてそうですよね……といつもならそんな軽口を叩いていたかもしれないが、この時の僕にはそんな余裕は微塵もなかった。というか心の余裕が微塵切りだった。

「これを見て下さい！」

我ながら情けなくなるぐらいに大声を震わせながら、左腕を住職の眼前に差し出しす。その左腕は……。前腕部。つまり、肘から先が。きれいさっぱり、消失していた。

月萌との対局が終わった昨日の夜。

twitterで遊びすぎてすっかり夜更かししてしまった僕は、いつの間にやら寝落ちした。座卓の上に突っ伏して寝ていると、不意に「懸さん」という声が聞こえてきたのだった。多分午前2時を過ぎていたと思う。寝ぼけ眼で顔を上げると、ノートパソコンを挟んだ向こう側に白装束の少女が正座していた。

「約束のものを頂きに参りました」

……月萌？

そう言えば、将棋で負けたら「大事なもの」をもらうとか言っていたな。とっさに僕は周囲を見回す。ど、どれだ？どの抱き枕を奪うつもりなんだ？いやいや抱き枕なんて持ってませんけど？

白装束の少女は、す、と立ちあがり、そして両手に握られたソレ（……斧のようなものに見えた）を持ちあげると

「えいっ♡」

と、無駄に可愛い掛け声とともに大きく振りかぶって……僕に向かって、ソレを振りおろした――。



「……で、目を覚ましたら腕が無くなっていた、か。なるほど腕ときたか」

住職は、ペし、と光り輝く禿頭を叩いた。その口ぶりはまるで、こうなることを予見していたかのように聞こえなくもない。この住職は、何をどこまで知っているのか。

「あれは……あの女の子は……月萌に見えました」

「月萌くんだろうねえ」

大体、突然左腕が消失して、しかも痛みも何もないというのは異常だ。僕はライダーマンか？人間の腕はアタッチメントではないのだ。部屋には血の一滴も流れていなかった。

急に腕が消えて混乱してしまった僕は、部屋中を引っ掻きまわして探してみたりもした。

急いで探し出せば、また元通りくっつけられるという保証もないのに。だが、いくら部屋を引っかきまわしてみても腕は現れてはくれず、ただただ部屋に美少女フィギュアが散乱していくばかりだった。おかしい、僕は美少女フィギュアなんて1つも持っていないはずなのに。

それにしても、この状態は腕が切断されたというより—— そう、まるで左腕は最初からそこにはなかったかのようなのだ。

肘の先——元々腕が付いていたはずの部分には、うっすらと産毛のようなものが生えていた。触るとくすぐったい。完璧な産毛だった。犯人の偽装工作だとしたらかなり手がこんでいる。

「あのコは……何者なんでしょうか？」

住職はその問いには答えず、土俵下の砂かぶり席にいた力士のような緩慢な動作で立ち上がると、昨日の対局で使った将棋盤の方へと向かった。盤上の駒箱を両手でそっとな持ちあげ、またこちらへ帰ってくる。そして、その駒箱を僕の方へと差し出しながら、蓋を開けて裏を見てごらん——と言った。

「『大——』？」

蓋の裏に文字があったが潰れていてよく見えない。

「大橋なんとか、って書いてあるらしい」

大橋？ って……？ポニョ？

「のぞみと違うし。君、ホントに奨励会員？」

すごく嫌な顔をされてしまった。住職はジブリが嫌いなのだろうか？うっかり冗談も言えない。奨励会員はツライ。

「大橋というのは江戸時代の将棋の家元、大橋家のことだ。この駒を私に預けた人物は大橋分家の遠い親戚の末裔だ……と自称している」

分家の親戚ですか……と答えたが実はよくわかっていない。僕は将棋の歴史については全くと言っていいほど知識がない。巫女の歴史についてはわりと詳しいけど。そもそも奨励会の入会試験に「将棋の歴史」なんていう科目はないのだが、世間ではどう思われているのだろうか？世間では奨励会の存在自体が知られていないかもしれないけど。

「この話は、あくまでその人が言っているだけで裏付けは全くないんだけどね」

そう言って、住職はその駒にまつわる話を語ってくれた。

「昨日も言ったと思うけど、この駒はこの寺の檀家の知人のそのまた知人から預かったものなんだ。元々の持ち主は江戸時代の将棋の家元・大橋家の者らしいが、詳しいことは聞いていない。で、歴史的に貴重なものではあるらしいから手放すのはもったいない。さりとは、実際にこれで将棋を指すのも憚られる。そんなこんなで将棋の駒なのに対局で使われることなく月日は流れ、その間色々な事情があって譲渡や売買を繰り返されてきた、と」

なるほど、聞けばよくありそうな話ではある。そんなに古くて貴重な駒なら、確かに実際に使うのは気がひけるかもしれない。まあ僕は駒にあまりこだわりがないので、その辺りの感覚はよく判らないのだが。

「そして、今から約20年ぐらい前に異変が起こり始めたらしい。将棋盤と駒を置いてあった部屋から、夜中にパチリパチリと将棋を指しているような音がしたり、青白い光が漏れてきたり……」

思っきりステレオタイプな怪談である。アレンジすれば「番町駒屋敷」とか「将棋灯籠」とか色んなバリエーションが出来てしまいそうだ。

「怪談じみて気味が悪いよね。で不良物件扱いされたこの将棋盤と駒は、また何度か譲渡と売買を繰り返して私の依頼人の手に渡り、そして今、ここ長考寺に流れ着いたというわけさ」

……付喪神（つくもがみ）と言うのだろうか？長い年月を経た古い器物にはやがて魂が宿り妖怪化するとかいう話を何かの本で読んだ記憶がある。人の想いが器物に宿るのか、あるいは人知の及ばぬ何かの理が器物を化物に変化させるのか……。そういえば「ツクモ」という名もそれに掛かっているような。というかそのまんまだ。

「どんな分野でも名人の域に達するほどの人物は、道具に魂を込めるものだしね——妖怪のことは専門外だからよく判らないんだけど」

と住職。

よく判らないのなら、こんな怪しいものを預からないでほしいものだ。

「いや、だって迷える衆生を僧侶が見捨てるわけにはいかないだろう？昔からお化けと和尚はセットで語られることが多いから、うちに持ってくれば何とかかなと思われても仕方ない。実際はどうにもならないんだけど」

どうにもならないって——。しかし、そういう日くつきの物であるのなら、これまでも僕のような被害者が出ていたということだろうか？

「それがね、これまでは音と灯りの目撃談だけだったらしい。月萌君が現れたのはごく最近のことなんだ。彼女と将棋を指して……」

——と、そこで住職は一旦言葉を切って、そしてこう言った。

「被害を受けたのは懸君と私だけだよ」

え？……住職も月萌と将棋を指して何か被害を受けたのか？

「うん。盤駒を預かって一週間くらいした時、この部屋が淡く光ってパチパチ音がするものだから、普通に部屋に入ってみたら月萌君が”一人将棋”をしていた」

一人将棋——。それは、将棋を覚えたはいいが自分一人が熱中してしまい周りに相手がいなくて、又は周りの相手が弱すぎる、という状況に置かれた少年少女が罹る病の一種である。

将棋盤の前に座ってたった一人で将棋を指す。先手も後手も自分が受け持つ。基本的には「先手：ホントウの私」「後手：異世界からやってきたもう一人の私」な感じだったり「先手：私」、「後手：埴生名人（のつもり）」みたいな配役で将棋を指す。で「ホントウの私」が勝つと本気で嬉しくてついガッツポーズが出てしまったり、ニヤニヤが止まらなくなって左手で口を隠して右手で頭髪をかきあげながら

「……いやあ」

なんて呟いてみたりもする。……さすがにここまでくるとかなりの重症で、家族から憐れみの表情を向けられたあげく、これはいくら何でも可哀想だということで町の道場に連れていかれたりするそう。

この病気は罹患率は低いものの、強くなる人は大抵罹るとも言われていて、要は将棋界のはしかみたいなものらしい。そうか、月萌も「一人将棋病」に罹っていたのか。可哀想に。ちなみに僕の場合は、将棋を覚えてすぐネット将棋を始めたので一人将棋をすることはなかった。というか盤駒を持ったことがないし。あれか？もしかして、一人将棋の経験がないと四段になれないなんてことは……いや、そんなまさか！

「……で、試しに対局してみたらあっさり負けた。さらに斧で叩き斬られて髪の毛をとられてしまったんだ。以前は長髪だったのに。ううっ……」

泣くなよ。

「……って、それ、剃ってたんじゃないんですか!？」

「まさか。最近までこの界限じゃ『ドレッドヘア坊主』で鳴らしてたんだよ。写真見る？」  
見ない。見ない方がいいような気がする。

ドレッドヘア坊主って何それ坊主じゃないじゃん。

「髪を剃れば大悟するってわけではないよ。大体、お釈迦様の髪型だってドレッドヘアみたいなもんだし。あと坊主ってのは、本来は髪を全部剃った頭って意味じゃないから」

住職によれば「坊主」とは元々「房主」と書くのが正しく、それは「僧房の主」つまり、現代でいうところの「住職」という意味と大差ないのだそうだ。そんなことはホントにどうでもいいんだけど。

「それに長髪でも坐るのには何の不自由もないしね。懸君も坐禅組んでみる？」

「遠慮しておきます」

それより——問題とすべきことがある。

どうやら住職は、月萌との将棋で負けたら『対価』を払わせられるということを知っていたことになる。不意に昨日初めて会った時の住職の表情に感じた、詐欺師のような印象を思い出す。もう騙されたとしか思えない。先に言えよ！断ったのに！

「そう言えば依頼人に聞いたんだけど、この駒の元々の持ち主ってのは発狂して死んだってことになっているらしい。一説には、物の怪に魂を食われて死んだとも言われている……と、その人が駒を譲り受けた時に前の持ち主に聞いた、と言うのだよ」

伝聞が繰り返されていてどこまでも怪しい話だが、よくもまあ、そんな盤駒を譲り受ける気になったものである。

「あ、そうそう。大橋分家と言えはさ、ツギッターで『消えた大橋分家の墓の謎』でツイートがまとめられてるから読んでみたら？現役の将棋観戦記者さんの渾身の取材の様子が読める。今回の件とは関係ないけど、まあ参考までに」

……ちょっと待て。住職もtwitterやっていたのか！呪われた駒の話よりそっちの方が驚きだ。

——で、結局。

月萌という巫女装束の少女の正体は——？

「由緒ある盤駒だからね。自分で将棋を指したくなって、魂が宿って化けたのかもしれない。それが君の言う『付喪神』なのかどうかは、私には判らないけれど」

「でも、まだ信じられません。科学が発達したこの時代にお化けが実在するだなんて」

「懸くん、お化けを否定する考え方が科学的思考というわけじゃないよ。科学が発達しようが衰退しようが出るモノは出る。大体、科学は予測される様々な現象の説明や思考実験の産物として四次元以上の多次解釈をよく持ち出すけど、それらを実際に観測することには成功していないじゃないか。人間には決して観測出来ない次元に妖怪の世界があるかもしれないよ」

住職の話が何だかSFチックになってきた。元より僕は中卒の上、学校の成績もひどいものだったから、そんな話はさっぱり理解できなかった。小説は好きだがSF物はあまり読まないし。

まあ……と住職は続ける。

「科学で何でも説明出来るのなら、君の左腕が痛みもなく消失したカラクリを科学の言葉で解き明かすことが出来るかもしれないね」

「……住職は、妖怪を信じているんですか？」

「私は根が素直なんだよ。この目で見ただけでも見えなかったことも何でも信じる。それに、こうして剃りもしないのにつるっぱげになってしまった事実があるし」

坊主が坊主頭になることに何の不都合や不思議があるのか判らなかつたが、住職が言うとおりにそれも月萌の仕業だとするなら……人間業とは思えない。多分、斧で頭は剃れないはずだ。それに、何より僕自身がこうして左腕を失ってしまっているのだ。確かにあの時、夢うつつではあったけれど。

「月萌が妖怪で、将棋で負かされたら身体はどこかを持っていかれるだなんて、そんな大事なことをなぜ黙ってたんですか」

「君が巫女装束に見蕩れていたから言い出せなかつたんだよ」

ああ、そうでした。ごめんなさい。でも！それにしても！

「それに、将棋で負ければ成仏して消えるかと思って。君なら勝てると思ってたんだけどなあ」

今さら指導対局のつもりでしたなんて言えない。ていうか、僕に全ての責任があるみたいな空気につ！？

「いちいち将棋指すとか、そんな面倒なことしなくてもお祓いとかできないんですか？」

「禅僧は黙って座るのが仕事。加持祈祷が必要なら密教僧に相談してくれ。……あ、そうそうtwitterやってる真言宗の僧侶がいるから紹介しようか？」

「そのお坊さんに、この盤駒を預ければ良かったじゃないですか」

「まあそうなんだけど。まさか巫女の格好したお化けが出てくるとは思わなかつたし」

「確かに。……そのお坊さんをフォローしたら悪霊退散しますかね？」

「さあ、どうだろうねえ」

とぼけながらも住職は、その霊験あらたからしい僧侶のアカウントを教えてくれた。

「@southmtmonk (kakuyu)さん、と。じゃあ今夜にでも早速相談を。って……ん？その人が月萌の垢に直接リプ送れば早いんじゃないですか？twitter上で祈祷が出来るかどうか知りませんが。あ、そうか、さては月萌のやつ警戒して既にブロックしてるんですね？」

「いや、それが……。実はkakuyuさん、ほとんどプロレスの話しかツイートしないんだよ」

何じゃそりゃ！

……そういうわけで。

いつの間にか。

僕と住職の間で、月萌は駒が化けた妖怪であるというコンセンサスが出来あがってしまったのだった。

そんな証拠はどこにもないのに。それを裏付ける情報もないのに。住職の話を聞いた

だけで、僕は思考停止してしまっていた。思えばそれは、将棋指しとしてあるまじき行為だったかもしれない。

その時は、正直もうどうでもよくなってきていたのかもしれない。状況を説明するための科学知識が僕にはなく、それならもう妖怪の仕業でいいような気がしていた。何よりこの痛みも傷跡もない肘から先の消え去った左腕が、科学では説明できない何ものかの存在を示しているではないか……。

八.

「なるほど、次はプロレスで勝負ですか。……つまり私の水着姿が見たいと？」

声がして。

振り返ると——奴がいた。

昨日と同じく腰までの長さのストレートの黒髪を水引で結わえ、前髪は眉毛がちょうど隠れる長さで切り揃えられている。透き通るように映える白衣とそれをさらに際立たせる緋袴。髪は、見るだけで艶やかさが伝わってくるほどに黒い。

完璧すぎる巫女装束の少女が立っていた。

「昨夜は突然お邪魔しましたが……よく眠れましたか？」

いけしゃあしゃあと言う。

「それにしても、懸さんの部屋は二次元美少女の抱き枕だらけで圧倒されました」

僕の部屋に抱き枕なんてないから！めったなことをゆーな！

「一応、プロの卵なのでから抱き枕ではなく将棋の内容で圧倒していただきたいものです」

それについては返す言葉がない。抱き枕は持ってないけど。

「昨夜僕の部屋にいたのは、やっぱり月萌だったのか。僕の腕を奪ったのはお前か？」

「奪ったとは聞き捨てなりませんね。将棋で勝ったことへの正当な対価です。本来であればアナタの方から届けにくるべきです」

状況と容疑者の弁が一致している。やはり月萌には人間の身体の一部を奪う妙なスキルがあるということか。信じられない。しかも突然腕がなくなったのに痛みがないとか。どういう理屈だ？

「『大事なもの』って言っていたよな？何故、左腕なんだ？」

「棋士にとって駒を持つ手は大事でしょう？……あれ？……はっ！？」

「お前、僕と向かい合って座っていたから、右腕と左腕を間違えたな？」

「……てへ♡」

「可愛く笑ってごまかしたってダメだから！」

天然なのか単なるバカなのか判らない。

「僕の腕をどうした？……まさか食ったのか？」

「し、失礼な！童貞の腕を食べる巫女なんていません！」

「童貞でなければ食うのかよ！」

「いやー、いい稼ぎになりました」

「売ったの!？」

稼ぎって……お化けの世界にそんな闇経済があっただなんて。

「若い男性の身体の部位は、魔界では高値で取引されるのですよ」

「儲けてどうする？」

「ちょっとゴスロリに興味が」

「服を買うのかよ! ……しかし、それは僕もちょっと興味がある」

「あら、気が合いますね」

「そうですね。twitterで相互フォローしませんか？」

「いいですよ。懸さんのツイッター垢は？」

月萌が懐からスマートフォンを取り出した。巫女装束の妖怪が現代文明の粋を集めた機器を扱うとは。ところでお化けがどうやってスマホを購入できたのかとても気になる。お化けの世界にもケータイ会社があるのだろうか? AUじゃなくて「霊U」とか。ドコモじゃなくて「ドコニデモイル」とか。「ソフトバンク」じゃなくて「祖怖徒番苦」とか。…

…

って、最後のはまるで暴走族のチーム名みたいだ。

「『@shogi\_kkr』だ。奨励会員だってのは伏せてあるんだから、僕の個人情報を晒さないでくれよ？」

「……なるほど。では」

月萌はメーカーの判らない正体不明のスマホを操作する。

「早速ですが、ブロックしておきました」

「お前は○○○○先生か！」

ツッコミが全部伏せ字になってしまったじゃないか!

ところで。

月萌からブロックされたことは、まあ脇に置くとしても、脇に置いてはおけない問題がある。と言うより自分の脇に置けるなら置いておきたいものがあった。つまりは僕の左腕のことだ。

腕を……取り戻すことは出来ないのか?

「質流れしてなければ取り返せるかもしれませんが保証はできません。童貞の腕が大好きな餓鬼が昨夜のディナーでとっくに食べている可能性もありますし」

質流れって! お前は、僕の左腕をどこに売り飛ばしやがったんだ! ?

おかげさまで僕は、歯磨きをするときに左手でコップを持ちながら右手でハブラシを使って磨くというスキルを失ってしまった。パソコンのキーボードを打つ時も片手しか使えない。

文字入力に倍以上の時間がかかるだろう。それに、これからポテトチップスの袋をどうやって開けたらいいのか判らなくて絶望するぜ!

「……何だか聞いていたら大したことないような気もするのですが？」

自分でもそんな気がしてきたが、きっとそれは気のせいだ。ポテトチップスは人生にとっ



て重要な要素のはずだ。

「大体、懸さんの左腕が社会にとってどんな価値があるんですか？そんなものがあっても世の中の役には立ちませんよ。むしろ害悪かもしれません」

社会貢献する左腕なんて聞いたことねー！

「分かりました」

ゆらりと。

月萌が立ちあがった。この少女の所作はまるで風が凪いでいるかのように静かだ。

所作だけは。

黙ってさえいれば。

「もう一度対局して私に勝てたら左腕の回収に協力しましょう。私の方は、またミニスカ巫女を懸けましょうか？」

「だから、それはスカートじゃなくて緋袴だと何度言えば」

「相変わらず巫女のことにはこだわりますね」

「巫女については一手の違いも見逃さないぜ」

「将棋では手順前後だらけのくせに」

「ああっしまった。あそこでああ指しておけば月萌の絶対領域をペロペロ出来たのに」

「ペロペロの約束はしてません！今は懸さんのへボ将棋の話をしてるんですっ」

「こ、これでも終盤の寄せは正確だって評価されてるんだぞ。将棋の力っていうのは結局終盤力なんだから。終盤になれば何とかなる！将棋なんて中盤省略して早く終盤になればいい！」

「何ともならず左腕なくなったじゃないですか」

そうでした。月萌さんは強かったです。しかし。それでも僕は。

左腕を取り返さなくてはならない。このままではティッシュで鼻をかめない。風邪をひいたら鼻づまりで死んでしまうかもしれないし、お腹が空いても焼きそばUFOの蓋が開封出来なくて餓死してしまう危険がある。そもそも今朝は、着替えが異常に大変だった。ボタンの付いたシャツは当分着れそうにない。

「次、勝てばいいんだろう？」

「随分自信があるんですね。ただし次も私が勝ったら……この次は魂をいただくかもしれませんよ？」

——あの、緋色の瞳だった。今は夕日は差していない。

それにしても。

何となく悪徳金融に引っかかって泥沼に嵌ったような悪寒がする。見れば住職の表情も怪しい。グルじゃないかとすら思えてくる。「田沼泥鮒」という法名も何だか疑念を抱かせる……いや、そんなまさか。

不意に起こった疑念を頭から無理矢理振り払って、僕は月萌をまっすぐに見る。

正直、彼女は強い。でもチャンスがないとも思わない。自分の方が弱いと決定的に感じるほどの差はないと思う。弥内さんよりほんのちょっぴりだけ強いぐらいだろうか？……っ

て弥内さんゴメンなさい。

「左腕は……返してもらおうぞ」

「私に勝てればの話です。それに必ず回収できるという保証はありません」

やはりこれは詐欺の手口だと思ったが、ここまで来て後には引けない。

「次はもう少し気合いを入れることにする。魂でも何でも懸けようじゃないか。でも、次は僕が勝たせてもらう。首を洗って……いや、絶対領域を洗って待ってるんだな！」

これまでのお返しに、月萌に向かって“びしい”と指さしてやった。右手人差し指で。残った右手で。

「そういう懸さんは、洗うと特別管理産業廃棄物が発生しそうですね」

「ごめんなさい！僕なんかもう海底に埋めちゃって下さい！」

産業廃棄物を海底に埋めていいのかどうかよく知らないけど。

結局。

将棋指しという人種は……負けたら死にたくなる程に負けず嫌いなのだった。左腕を失うことよりも一局の将棋の勝ちを失うことが怖い。四段になれるなら手足の一本くらい惜しくない、奨励会にはそんな奴らがたくさんいる。多分だけど。再戦を申し込んだのは、左腕を取り戻したいというよりも、むしろ将棋指しとしての意地だった。

「負ければ、今度は死ぬかもしれませんよ？」

……と少女は薄紅色の唇で、なぜか抑揚のない棒読み口調で囁いた。

「ではもっと気合いを入れてさしあげましょう。万が一、いえ億が一にも懸さんが勝てたら……」

ありえないほどの低確率を言い渡し、そしてたっぷり間をおいて。



月萌はまた懲りもせずに僕を指さした。「ビシィ」と何故か口で言いながら。

「この巫女装束を脱ぎます！脱いでしまいます。それはもう思い切って！この際だから！」  
……。10秒ほどの沈黙が流れた。

「何だとおおお！！巫女が巫女装束を脱いだら巫女じゃなくなるじゃないか！」  
つい拳を握りしめてしまった。これは由々しき問題である。

「わ、私、これでも脱いだら凄いんですよ？……エ、エロいわよ？」

「いや、ヌードになられても作者の力量ではエロさを描写できないと思うけど」

「誰がヌードになるといいましたか、イヤらしい。水着になるだけです」

「お寺の中で水着になったら十分イヤらしいわ！」

そもそも「駒.zone」的に大丈夫なのかの方が不安である。水着だなんて！……しかも紐ビキニのグラビアだなんて掲載できないっ！

「紐じゃありませんっ！スク水です！さっきプロレスするって言ってたじゃないですか」  
何だプロレスの話だったのか。いやしかし、スク水はプロレス用の衣装じゃないと思うのだが……。むしろ競泳用水着だろうか？よく知らないので今度プロレスに詳しい kakuyu (@southmtmonk) さんにtwitterで尋ねてみよう。

グラビアの話もなし、ということで。

「グラビアの件は、らくはさん (@rakuha) からオファーがあったら考えましょう。ちなみに水着になってもニーソは履いたままです」

「くっ、お寺の中なのにスク水ニーソ姿を披露するだなんて、そんな素敵な様子を作者はちゃんと描写できるのか！？」

「そう言えば、さっきから何だかメタな話ばかりになってますね。ご心配なく、作者の技量が足りなくても全く問題ありません。『駒.zone』公式絵師である、まるぺけ (@maruX) さんが挿絵を描いてくれます。では早速twitterで……。

『@maruX まるぺけさん、『駒.zone』に私のイラストを描いてくれませんか？』」

「仕事早っ！……いや待て。まるぺけさんがそんな仕事受けるわけないだろ！」

「まるぺけさんは可愛いロリッ娘が好きだから受けてくれるもんっ！」

「まるぺけさんは口の悪い子は嫌いだもんっ！」

つーか、お前はロリッ娘だったのかよ？迂闊にも全然気づいてなかったぜ。まあ、僕はロリコンじゃないからどうでもいいけど。っていうか僕と月萌は年齢的にそんなに離れていないはずだけど。少なくとも見た目は。……妖怪の年齢ってどうなってるんだろう？

「ちなみに私、○○○○様に似てるとよく言われます！」

「おい、めったなことを言うなよ……」

面と向かって嘘をつくな、嘘を。

不敬罪です。

つか、お前もう逮捕される。懲役3年くらい。執行猶予1年くらいで。

「あ、そう言えば……」

「今度はどうした？」

「ドエロい絵ならスコップ (@schophits) さんが超絶に得意だと聞いたことが……」

「なぜそこまでエロさを求めるんだ!？」

「では早速……『@schophits スコップさん、私のエロかわいい絵を描いてくれるよね?』」

「やめんか!」

「あと、妖怪クラスタにも絵師さんがたくさんいらっしゃいますし」

「なるほど、妖怪だけにそちらの方が専門か」

「か（以下略）さんとか、さ（以下略）さんとか、く（以下略）さんとか……」

「『駒.zone』の読者層とは別クラスタだから気を使って略したんですね判ります」

「ああっ! あんなコトやこんなコトをされている私のえっちい姿がスコップ(@schophits)さんのPixivにあげられたらどうでしょう?……スコップさんならやりかねないっ!!」

「お前、もしかして露出したいだけなんじゃないのか?」

「ツインテニーソだけでお茶を濁しているような月子(@tsukiko\_sann)なんかには負けません!」

「一体誰と戦ってるんだお前は!？」

そう言えば、最近「月子」という名前のツインテニーソ少女が奨励会に入ってきたとかいう噂を聞いたような気がする。その子もtwitterやってるのか。よし今度将棋会館に行ったときに月子さんを探してみよう。twitterでフォローしてみようかな。でも速攻でブロックされたら嫌だな。月子さんの方からフォローしてくれないかなあ。……何ていうか、ネガティブ思考すぎる自分にへこんでしまう。

さて。

月子さんのことはほんのちょっぴりだけ気になるけれど、弥内さんの五分の一ぐらいは気になるけれども、今はとにかく月萌との将棋である。こうなった以上、次局は是が非でも勝たなければならない。お化けのスク水ニーソ姿を実際に見られるチャンスなんてそうそうあるもんじゃないし。というより、お化けじゃなくてもそんな姿はお目にかかれない。

いや待て。スク水ニーソなんてネットの画像掲示板やエロゲの世界以外に実在するのだろうか? なんてことを考えていたら、もう将棋どころではなくなってきたのだった。

……違った。そうではなくて。

次の対局の結果によっては、もし次の対局にも負けてしまったら。

昨日の対局の後、左腕を失った。月萌は今度は魂を、と言っている。それは死ぬということだろうか。

——僕はまだ死ぬわけにはいかない。まだ四段になっていない。まだ弥内さんからバレンタインデーのチョコレートを貰ったことがない。生きてさえいれば、来年こそは貰えるかもしれないじゃないか!

「月萌のスク水ニーソを一度も見ないで死ぬわけにはいかないな」

「嘆かわしい。将棋指しともあろう者が何という不埒な」

「いやいやいや、お前が持ちかけたんだろう!」

「そうでしたか?……まあいいでしょう。次の対局はいつにします? 私は今からでも構いませんよ?」

左腕は取り返せるものならさっさと取り返したかったのだが、奨励会の対局もある。負けが込んでいるので、本業の方もおろそかには出来ない。というか、今いきなり対局しても勝つ自信がないかも、とかこっそり思ったのは月萌には内緒だ。

「またこっちから連絡する。携帯の番号教えてくれ」

「私の方からまず掛けますから着信を登録してください。懸さんのケータイ番号は？」

「XXX-XXXX-XXXXだ」

「わかりました。では……。はい完了。さっそく着信拒否リストに入れましたので連絡はこの寺の寺務所の方に入れてください」

「どんだけ嫌われてるんだ、僕は！」

「夜な夜な美少女フィギュアを舐めまわして興奮してるようなド変態に携帯の番号なんか教えられますか！」

「そ、そんなプレイはしてないし！名誉棄損で訴えるぞ！」

「お化けに日本の法律は適用されませんよ？アメリカの法律ならともかく」

「どんな治外法権だよ」

「懸さんの場合は痴漢法権です」

「意味が判らないっ！」

そうやって。

お寺の中なのに煩惱てんこ盛りの会話でワイワイ盛り上がりながら。

盛り上がっているうちに、左腕がなくなったショックから少しだけ逃避しつつ。

僕と月萌は、再戦の約束を交わしたのだった。

九.

長考寺での一件の後しばらくの間、将棋会館では「左腕どうしたの？」「GW中にうっかり失くしてしまいました」

……という挨拶が交わされることになった。納得する人は一人もいなかったし、真剣に心配してくれる人もいたので、適当にあしらうことには罪悪感を感じたりもしたが、本当のことは言えないし、言うにしてもどう説明すればいいのか自分でもわからなかった。両親にもまだ話していない。話したらきっと大騒ぎになる。

実は、何の脈絡もないのだけれど、弥内さんにだけは本当のことを話して相談に乗ってもらおうと思っていた。何となく、何でも相談したくなるような、そんな雰囲気のある素敵な人なのだ。

……で。

将棋会館で弥内さんに会った時に思い切って話しかけようとしてはみたものの、あっさり脇を通り抜けられてしまった。すり抜けられた。それはもう鮮やかに。まるでFCバルセロナのメッシのドリブルみたいに。それはまるで、女子W杯で優勝したなでしこジャパンの選手が弟子入り志願したくなるんじゃないか、というぐらいの超絶テクニックだった。

あの弥内さんはきっと誰にも止められないだろう。表情もツンツンで、とり付く島もないとはこのことだ。というか島に取り付くための船への乗船すら拒絶されてる感じだったよな。

.....嫌われているのだろうか？

弥内さんはきっとツンデレなのだと信じている。誰の前でデレているのかは知らないけれど。

月萌に左腕を奪われ、弥内さんの華麗なドリブルに翻弄された散々な5月が終わると、ジメジメと空気の湿った季節がやってきた。そろそろ敷きっぱなしの万年布団を干さないとかビが生えるかもしれないな——なんてことを考えだした六月四日。

三段リーグ8回戦の対局が行われた日のことである。

「お前はさ、執念ってものがなさすぎるんだよ」

それは、奨励会同期の千場さん.....千場桂市さんの口癖みたいなものだ。千場さんは僕の三つ年上で、奨励会員であると同時に都内の大学の工学部生でもある。全体的に丸っこい印象で、起き上がりこぼしが服を着ているようにしか見えない。後ろから押したら一回倒れてくるっと起き上がりそうな感じがする。「知能情報工学科」とかいうところに在籍しているというから、コンピュータ将棋の研究でもして名人を超える将棋ソフトの開発でもしたいのかと思いきや、本人曰く

「コンピュータ将棋？ 古い古い。人間より強い将棋プログラムなんか作って何が面白いの？ これからはガンダム将棋だよ！ 僕はモビルスーツに乗ってガンダムとザクで将棋対局するのが夢なんだ！」

とのことである。ガンオタ同志、ソムリエ (@yamajunn21) と気が合いそうだ。

モビルスーツに乗って将棋を指したい等と言う戯言はともかく、千場さんは概ね人当たりが良くて面倒見の良い人、悪く言えばややおせっかいすぎる性格で、僕が負ける度に心配して話しかけてくる。ただ心配はしてくれても勝負は別で（当たり前だ）、三段リーグ4連敗後、3連勝して何とか持ち直しかけていた僕は、今日この日、まだモビルスーツには乗っていない千場さんに序盤から大きくリードされ、そのまま負かされてしまったのだった。そして、感想戦の最中にまた得意の台詞「お前は執念がない」とやらを浴びせられてしまう。

これで3勝5敗。今期の四段昇段がますます厳しくなった。モビルスーツに乗って将棋に勝てるのなら、ぜひそうしてみたい気分だった。

「気合い入れて掛からないとリーグ陥落しちまうぞ」

余計なお世話である。大体、そう言ってる本人は4勝4敗なのだから、他人の心配をしている場合ではない。ただ、こうやって千場さんから話しかけられたこの時、僕の脳裏には何故か月萌のあの言葉が浮かんでいたのだった。

「少し序盤の研究をなさった方がいいですね.....」

序盤と言えば序盤ソムリエである。あれ以来、@yamajunn21さんとはtwitter上で親しく

させてもらっているのだが、おかげさまで定跡よりもガンダムについて詳しくなりました！TV作品は既にファーストからダブルオーまでカバーしたし、東方はもちろん赤く燃えている。ちなみにお気に入りのモビルスーツはサザビー。ネオ・ジオンがシャア専用開発したモビルスーツで、ファンネル、サイコフレームを装備している。赤い機体が超絶にかっこいい。そして、ティファ・アディールは俺の嫁である。

.....やれやれだぜ。

これでは何のソムリエなんだかわからない。別に@yamajunn21さんのせいじゃないんだけど。どちらかと言えば将棋の話よりガンダムネタに反応する僕の方に責任があるんだけど。

とにかく。

序盤のセンスがない、ねじり合いになったら執念が足りない、では弱点が多すぎる。アッガイぐらい弱すぎる。こんなことではティファを幸せにしてあげられないじゃないか！ガロード・ランにティファを任せていて、それでいいのか？>俺。

——と、まあそんなわけで僕は、これまでの人生で最大とも言うべき一大決心をしたのだった。つまり序盤の研究を真面目に始めてみることにした。

「.....千場さんの研究会に参加させてもらえませんか？」

千場さんの将棋は僕とは真逆のスタイルで、言わば先行逃げ切り型である。序盤研究の深さでは四段以上の棋士たちからも一目置かれて、彼が主催して奨励会員を集めて行っている研究会には参加者が多い。今更参加を請うのも年上とは言え同期のライバルに助けを求めるみたいで気が引けたが、研究会というのはお互いの技術を盗み合う場でもある。ギブアンドテイクなのだ。僕が参加することで他の研究会メンバーのプラスになることもあるだろう。例えば、ソムリエ受け売りのガンダムネタとか.....。

「お？少しはやる気になったのか？勿論OKだよ。『隻腕の天才』が参加してくれれば、こっちも終盤の勉強になるしね」

知らない間に新しい二つ名がついていた。現実の生活における苦勞を思うと少しムツとしたが、ネーミングの雰囲気だけはちょっとカッコイイ。少なくとも『元・天才』よりはマシずっとマシだ。

しかし。

もし僕が左腕を取り戻したら、今度は『元・隻腕』とでも呼ばれるのだろうか？「なんでまた腕生えてきたの？」とか質問されまくりそうな気がする。いずれにしても面倒な話である。困ったものだ。弥内さんに相談しよう。

.....うっかり近づいたらまたあの華麗なドリブルでかわされてしまうだろうか？今度はレッドカード覚悟で身体を張って止めてみるか？

.....身体を張って止めたら通報されるかもしれないな。

などと妄想に耽っている間、千場さんはずっと研究会の説明をしてくれていたようだ。我に返って話に耳を傾ける。

「.....で、最近は何局指定戦ってのを主にやっててさ。あるテーマ図まで前例の手順で

進めて、そこから『V.S.』するんだ」

『V.S.』とは、つまり実戦のことだ。要は、ある程度自分で事前研究してきて、それを実戦の場でぶつけあう。それを繰り返すことで研究の精度を高めていく。机上の研究だけではどうしても独りよがりになりがちだからだ。

研究で有利と結論が出たからと言って、実戦で実際に勝てるとは限らない。研究の成果が使い物になるのかどうかを実戦で試す。実戦力を上げて、それを公式戦にぶつけるための下地とする。それが研究会の目的だ。

「今度からしばらくは『8五飛戦法』の研究するから。ちゃんと自分なりに準備してから来いよ」

「ありがとうございます。じゃあ宜しくお願いします」

素直に頭を下げた。

「そうそう次の研究会ではさ、つっこちゃんにも声をかけてるんだけどね」

「つっこちゃん？」

「最近、奨励会に入ってきた金本月子さん。知ってる？……まさかそれが目的じゃないよね？」

「まさか、違いますよ」

月子さんなんて先日月萌に聞いたばかりで、まだ見かけたこともないし探してもいない。

将棋一筋の僕には、女の子を追いかけているヒマなどないのだ。はっはっは。

「……あ、そうか。お前は二次元にしか興味がないんだったな」

「違います」

「ロリコンなんだって？」

「それも違います！」

一体誰がそんな根も葉もない噂を流しているんだろう？

そんな感じで千場研究会に参加した僕は、それから週に2回のペースで開催されているその研究会にマメに参加した。月子さんは見かけなかったもので、要は千場さんはフラれたということなのかもしれない。伝え聞くところによると、中々競争率が高いらしい。

——まあ何と言うか、将棋一筋の僕にとってはどうでもいい話である。「ツインテ・ニーソ少女」という属性が気になって気になって気になって仕方がない……なんてことは全くもってない。ありえない。

研究会のない日は自宅で研究したり、ネットで実戦を指したりする。新作フィギュアをAmOzonでポチったりなんてことをしているヒマは全くない。月子さんのことも考えない。

と、まあ。

そんな日々がしばらく続いて。

僕は三段リーグの成績を4勝6敗として、7月7日、七夕の日を迎える。こういうお約束が大好きな僕は、PCのデスクトップ上に短冊を貼るアプリを使って願い事を書いた。

——四段になれますように。



—— 弥内さんのドリブルを止められますように。

「左腕が戻りますように」と書かなかったのは、実力で取り返すつもりだから……とかではなく、単にこのアプリが2つまでしか書けない仕様だったからだ。アプリ作者には機能のアップデートについて迅速な対応を求めたいところだが、そもそもフリーソフトなので文句は言えない。

さて、この日も千場さんの研究会に参加し、やっぱり月子さんには会えず、研究会の打ち上げは断って、僕は一人自宅でPCの前に座っていた。エロサイトの巡回ではないし秘蔵の巫女さん画像を眺めていたわけでもない。将棋の実戦練習である。いやマジで。

千場研究会に参加する以前の僕は、実戦練習と言えればほとんどネット将棋道場『SHOGIクラブ24』だけだった。ここのサイトのトッププレイヤーの実力は侮れない。匿名だが奨励会員も多数登録しているし、四段以上のプロ棋士もいるはずだ。アマチュアでもトップクラスの実力者はプロの四、五段クラスと互角に戦うし、実際、アマチュアから編入試験を受けてプロ棋士になった人もいる。『SHOGIクラブ24』は、そうしたアマ強豪や匿名の将棋界関係者が多数跋扈しているのだ。

僕は『SHOGIクラブ24』にアクセスした。『Yuki\_aisiteru』でログインし「対局室」に入って「有段者」タブをクリックする。

すると。

——ん？

入場者リストの中に怪しげな文字が見える……。

『tsukumo\_sann』という人が対局中だった。一瞬「tsukiko\_sann」かと思ったが違った。

震える右手でマウスを操りその対局の観戦画面を開くと……。

tsukumo\_sannは大人気だった。

観戦者同士によるチャット欄が、さながら2ちゃんねるのvip板の如き勢いで流れていく。

twitterのネタクラスタと言った方が近いかもしれない。

「さすが姫！好手連発！」

「姫がながれー！」

「すげー、姫の寄せ速えー」

「姫かわいいよ姫」

「tsukumo\_sannは俺の嫁」

「それは阻止 > tsukumo\_sannは俺の嫁」

絶っっ対に月萌だ、間違いねー！何だこのノリ。

というかtsukumo\_sannが人気者すぎる。

その将棋はほどなくしてtsukumo\_sannの圧勝に終わる。tsukumo\_sannのステータスは「対局待」状態になったが、しばらく眺めていても誰も挑戦しない。応援する人はたくさんいても、対局依頼が殺到するというわけではないらしい。それはそうだろう。たった今行われた将棋は、笑えてくるくらいtsukumo\_sannの圧勝だった。ぼっこぼこである。というか公開処刑だった。しかも終わった後にtsukumo\_sannときたらchatで

「弱すぎます！顔を洗って……いえ、全身をハイターで消毒してから出直していらっしゃい！」

とのたまっていたし。応援団はやんややんやの大喝采である。

「ぼくも姫にののしられたいお！」

とか言っているバカがいるし。じゃあお前が挑戦しろ。

——しかし。しかしである。

いくら何でもこの狼藉は許せないな。仕方がない、この僕が月に代わってお仕置きしてやる、相手が「月」萌だけに。……あれ？今チラッと部屋の棚にセー〇ー〇ーンの姿が見えたのは何故だろう？僕はフィギュアなんて一つも持っていないはずなのに？

ともあれ。

一人で勝手に義憤に駆られた僕は、tsukumo\_sannに持ち時間1時間で挑戦した。

僕の後手番。またか。レディーファーストなのか？

戦型は相矢倉模様となり僕が途中で変化手順を選択する。長考寺での対局と同じく「雁木」である。つまり雁木ハラスメント。略してガンハラ。この戦法の是非はともかく単なる意地である。嫌がらせとも言う。どちらかと言うと嫌がらせそのものだった。

tsukumo\_sannが先攻し、その攻撃を僕がいなししていく展開も長考寺の時と同じだ。

tsukumo\_sannがやや指しすぎ（戦力や形が整わない状態で攻めかかったり成功の可能性の低い手順で攻撃することを将棋用語で『指しすぎ』と言う）と思われる手順で攻めてきた。それでなくても月萌は人を指さしすぎの奴である。今日は指さしが出来ない代わりに将棋が指しすぎなんだな……等とつまらないダジャレに一人興じていると、chatが入ってきた。

「私の下僕に抱き枕が恋人という棋士のなりそこないがいるのですが、あなたの将棋はその下僕にそっくりですね」

その下僕に心当たりがあるよ！ありすぎて泣けてくるよ！

それからしばらくの間、chat欄ではtsukumo\_sannのドSトークが続く。ドSトークをしつつ厳しい指し手を繰り出してくる。持ち時間が少なくなりお互いにほぼノータイムでの応酬になってもchat欄の勢いが止まらない。駒を動かしながらchatが入ってくる。どうでもいいけど、何でこんなに次から次へと罵詈雑言を思いつくのか。

それはまるで腕が3本あるんじゃないか？と思うようなスピードだった。

……tsukumo\_sannのPCのマウスを操作しているのは、実は僕の左腕ではないのかと、そんなシャレにならない妄想をしてしまうくらいに。

そして。

平静を失った僕は、頭がい骨の中にヒーターでも入ったみたいに頭がぼかぼかになり、やがてカッカカッカして。もう脳髓が沸騰してしまっ。ついにはtsukumo\_sannの攻めを受け損ねて。

——負けてしまった。

悔しくてとりあえず壁に頭を3回ほどぶつけてくる。ゴツゴツゴツン。痛い痛い痛いっ。

局後の感想戦は観戦者、というか月萌の応援団も交えたお祭りと化していた。

「指し手に執念というか集中力が感じられません。むしろ煩悩が感じられます。さてはガンハラしながらモニタの前でニヤニヤしてましたね？」

ガンハラとか言ってる！まずい、これはもう間違いなく僕だとバレている。おかしい。「Yuki\_aisiteru」のアカウントと僕を結びつけるものなんてないはずなのに。部屋の戸棚に長〇有〇のフィギュアなんて置いてないのに！

「しかも抱き枕を抱えてハァハァ言いながら将棋を指すとは……変態さんですね」

ハァハァとか言ってないのに！言ってはいないけど！……あぁっ、完全に僕だと同定されてしまった。童貞だけに……。って自虐ネタを言っている場合ではなく。

多数の観戦者が観ているSHOGIクラブ24の感想戦で「変態さん」よばわりするという公開処刑。それは、僕のアカウントに「変態」のレッテルが貼られてしまった瞬間だった。

tsukumo\_sann、恐るべし。

つーか、この垢もう使えねーよ！

「弱すぎますね。PCに将棋が弱くなるウイルスが感染してるんじゃないですか？ウイルスチェックしてから出直してきては如何でしょうか？」

月に代わってじゃなくて月萌にお仕置きされたのは僕の方だったわけで。

僕はSHOGIクラブ24の対局室からそっとログアウトした。〇〇枕を、ぎゅっと抱きしめながら。

住職の「坐禅でも組むかい？」という声が、聴こえたような気がした。

その時の僕は、対局の勝敗に気を取られすぎてどうかしていたとしか思えない。月萌が何者であるかについて。月萌という存在に関わる大事なことについて。僕はすっかり忘れていたのだった。

十.

——tsukumo\_sannの公開処刑を受けてから一カ月あまりが過ぎた頃。

8月14日。世間はお盆休みである。

7月後半以降、気温が上昇し蝉が鳴き、街を歩く少女たちの肌の露出が増え、ネット掲示板にアップされる二次元美少女画像のラインナップにビキニ姿が増えてくると、それに比例するように（いやいやいや千場研究会の成果だと思うけど）、僕は調子が上向きになりこの時点で奨励会三段リーグの成績を8勝6敗と持ち直してきていた。

残りは四局。それを全勝して競争相手が一つ負ければ……という厳しい条件ではあるが、四段昇段の可能性を残している。

そして僕は久しぶりに、ここ——長考寺を訪ねていた。勿論、月萌と再び相まみえるために、である。時刻は午後1時を過ぎた頃。辺りに響き渡る蝉の鳴き声が、まだ小学生だった頃の夏休みの記憶を僕に思い起こさせる。

あの頃の僕は……既に部屋にこもってネットで将棋をしていたような気がする。夏休みなんて関係なかった。ただただ、将棋を指すだけの毎日。それは今も変わらず。だから僕は、プロ棋士になれるまでは何者にもなれないままなのだ。

山門を抜け境内を見渡す。視界の中心に。

——彼女がいた。

水引で結わえた腰までの長さのストレートの黒髪。眉毛がちょうど隠れる長さで切り揃えられた前髪。

透き通るかのように映えた白衣とそれを際立たせるような紅の袴。

黒い浅沓。

寺の七堂伽藍に囲まれたその少女は、どこまでも場違いで、それでいて当たり前のようにその風景に溶け込んでいる。妖しく、怪しい、そして幽かな、巫女装束を纏った月萌は、僕の訪問を予感していたかのように、そこにいた。

「月萌。……忘れ物を受け取りに来たよ」

「忘れ物の照会は寺務所の方へお願いします」

僕は早速、寺務所へ向かい「すみません、こちらに左腕の忘れ物は届いてませんか」

——って、言うかそんなこと！

「奨励会、最近調子が良いみたいですね。ノリツッコミの出来は最悪ですが」

「さすが『姫』。相変わらず棋界情報にくわしいな。ノリツッコミの件はスルーして欲しかったぜ」

「それにしても、そのツッコミスキルでは今期の奨励会卒業は少々厳しいと言わざるをえません」

四段になるにはツッコミスキルがいるのか！千場研究会で報告しないと！

そうだ、月子さんにも教えてあげなきゃ。まだ会った事はないけど、かなり深刻な天然ボケらしいので急いで教えてあげないと月子さんは四段になれないかもしれない。

「最後まで頑張ってみるさ。さっさと卒業して、タイトル取って豪邸を建てるんだからな」

「そう上手く行きますか？ 大体、奨励会を卒業すればもう一人前の棋士だと思ったら大間違いですよ？」

「判ってるさ」

「判ってませんね」

自信満々で断言された。月萌は腕組みまでしている。

「どうせ未だに『天才』と呼ばれた頃の自分に酔っているのでしょうか？ 懸さん、才能というものは大輪の花を咲かせる可能性にしかすぎないのですよ？ 土を肥やし水をやり、陽の光をたくさん浴びせて、たくさんの手をかけなければその可能性は枯れてしまうのです。逆に甘やかしすぎれば根腐れてしまいます。つまり、ほっといても楽に咲く花などないのです。懸さんの将棋の花は枯れかかっている上にナメクジが10匹ぐらい這っています。かなりキモいです」

途中までは何だかいい事言ってる風なセリフだったのに、最終的にはひどい悪口を言われただけの印象しか残らなかった。何を言っても悪口になる。それが月萌クオリティ。

月萌は「ちっちちち…」という感じで人差し指を軽く振ってさらに毒舌を続ける。きっと舌本体も毒で出来ているに違いない。舌の本体があるかどうかすら疑わしい。毒舌というより毒毒だ。

「どうせ、あえて努力を避けることで天才だった頃の残滓を味わっているんでしょう？ きっかけさえあれば四段になれる。転機が訪れれば波に乗ってプロのトップクラスに肩を並べられるとでも？ 現実から目をそらしてつまらないプライドだけにすがっていても将棋は強くなりません。そんな心構えでは奨励会を卒業できても、いつまで経ってもタイトルなんて取れませんね。……豪邸ですって？ 懸さんの場合、豪邸じゃなくて童貞が建ってしまいます」

童貞なんかに住みたくない！

——確かに奨励会卒業はゴールではないわけで。棋士としては、それはむしろスタートなのだから。

せっかく四段になっても、勝率が悪ければ数年と経たずにプロとしての資格を失うことだってありうる。いや、そういう下向きの発想ではダメで、クラスを上げタイトルを狙う位置に行かなければならない。童貞じゃなくて豪邸に住みたい。僕は、タイトルを取りファンに認められる棋士になりたいのだ。

「ファンに認められたければtwitterのフォロワーを増やさなければダメですね」

「またtwitterか。お前、どんだけツイ充なんだよ」

「いいですか？」

ちっちちち、と今度は口で言ってから、月萌は僕に人差し指を突き付けた。

「棋士たる者、回文師のこたら(@kotoracchi)さんにフォローされて初めて一人前と言えるのですよ！！」

「え？マジで！？すぐフォローしなきゃ！……フォロー返してもらえるかなっ？」

「こたら回文のネタにされたら一流棋士です」

「あぁっ、一流棋士へのハードルが高いのか低いのか判らなくなった！」

「ことらも、回文、昆布、イカ、貰とこ！（ことらもかいぶんこんぶいかもらとこ）」

「何と言う出来の悪い回文だ！！！」

「回文ではなく怪文を発表するのが捏長(@konenagakuni0)会長です」

「匿名とは言え将○連○会長をdisるとは、なかなかのチャレンジャーだな」

「『駒.zone』の発行に圧力が掛かるかもしれませんね。くすくす……」

「お前なんか、らくはさん(@rakuha)にブロックされてしまえ！」

一応フォローしておくけど会長のツイートはフリーダムすぎて楽しいって、その筋では大人気なんだぞ。その筋ってどの筋だかよく知らないけれど。

……等と。

twitterの将棋TLネタで楽しく盛り上がっていると。

「ん？懸くんじゃないか。どうしたの？坐禅組みに来たの？」

作務衣姿に身を包んだ長考寺の住職、田沼泥鰯が現れた。

住職の坐禅のススメをいつものように「遠慮しておきます」と断って、僕は訪問の目的を告げ、そしてあの寺務所の奥の和室に通された。前回と同じく、住職が対局時計を準備して、僕と月萌は盤を挟んで対峙する。待ちに待った二度目の対戦である。SHOGIクラブ24で公開処刑されているから正確には三度目なんだけど。

ま、あれはもうなかった事にしておいて。黒歴史という事にしておいて。月萌も何故かこの件については触れてこないし。もしかするとバレてなかったのかもしれないし。

そんなわけで、僕の左腕回収を懸けた月萌との第二局である。そう言えば、スク水ニーソも懸かっていたのだった。

「@shogi\_kkrさんと将棋なう」

「なう？」

「スマホでtwitterに投稿しました」

「早っ。全然見えなかった」

「そうでしょうか？私のスマホ操作の速度は筋井九段の寄せ並みなのです」

「遅っ……てか、それってミスが多いうってことですよね！」

「なっ！！何ということ……たかが奨励会員のくせに超一流イケメン棋士の筋井先生を小馬鹿にしましたね！アナタなんて筋井九段にかかれば終盤を迎える前にケチョンケチョンなんですからねっっっ！！！」

もの凄く怒られた。青筋まで立てている。お化けも青筋たてるのか。つーか、筋井九段のファンだったのか！

筋井九段というのは「筋井システム」と呼ばれる、将棋史に刻まれるであろう新定跡を編み出したスター中のスター棋士だ。終盤力の衰えから近年は成績を落としてはいるものの、それでも一流棋士には違いない。新しい構想を生み出す発想力と序盤理論の精密さはプロ棋士の中でも群を抜く。千場さんの比ではないのだ。サイヤ人とスーパーサイヤ人くらい違う。確かに今の僕の力では月萌の言うとおりの序盤の構想で抑えこまれてし

まい、終盤力など使うヒマもなくねじ伏せられるだろう。

「筋井先生を小馬鹿にする懸さんなんて……………さっさと死ねばいいのに……………」

「うっわ。巫女さんにぼそっと死ねとか言われてしまった！死にたくなかった！」

「そうですか。では早速ツイッターでtogo(@golgo56513)さんに仕事を依頼しましょう。

『@golgo56513 G13型トラクター求む』」

「ええっ！？ツイッターって暗殺依頼も出来るの！？」

「twitterに不可能はありません。口先一つで時の政権や経済界をですぬ……」

何だかホントにありそうな怖い陰謀論を説き始めたので台詞の後半は聴こえなかったことにした。人間、知らない方が幸せなことは確かにある。知識が必ずしも人を幸せにするとは限らないのだ。

それからしばらくして。

随分と長い間政治と経済について語った、というか騙った月萌は、やがてその話題に飽きたらしく

「……さて、ゴルゴが現れる前にさっさと将棋を終わらせましょうか？」

ゴルゴさん、一度来てもう帰ったんじゃないだろうか？

くすくすくす……と月萌が妖しく笑う。気が付くと僕を見る眼が三白眼になっていた。そして、あの緋色の瞳。

だが、それでも。相手が妖怪だろうが何だろうが。

今度こそ勝つ。勝ちたい。勝てたらいいな。勝てますように。

月萌の奴、棋界一の投了魔、志摩九段みたいにさっさと負けてくれたらいいのに。

「レディーファースト・ルール」で、またも月萌の先手。

第1局と同じく、月萌は初手「▲7六歩」と角道を開けた。対する僕は「△3四歩」と応じて、以下「横歩取り8五飛戦法」と呼ばれる戦型に誘導する。プロのタイトル戦でも頻繁に採用される現代将棋の花形定跡だ。この戦型は水面下で膨大な研究が行われていて、特に奨励会員同士の研究は微に入り細に渡っている。トッププロがタイトル戦で採用した指し方が実は奨励会員との合同研究会の成果だ、というケースも少なくない。そして僕の頭の中には、千場さん主催の研究会「8五飛研」で仕入れたばかりの情報がたっぷりつまっていた。

……ようするに僕は、業界人による研究会で仕入れてきた最新の研究をアマチュアにぶつけようとしていたのだった。え？プライド？何それおいしいの？

「なんという小癩な。超絶美少女アマチュア棋士を相手に、業界最新の研究をぶつけようだなんて……」

あっさりバレた。

「女の子相手に必死すぎると、いつまでたっても童貞ですよ」

ほっといてください。僕は将棋が恋人なんです。

「おや？あの抱き枕は『ショーギ』という名前だったんですか？」

抱き枕は恋人じゃなくて嫁だから。抱き枕なんて持ってませんけど。

そんな、ネタだらけの会話をしながらも。

それでも盤上は、徐々に徐々に一触即発の様相を呈していったのだった。

「横歩取り8五飛戦法」は、将棋の戦法の中でもかなり「危険」な部類にカテゴライズされるだろう。スタートしてすぐに、断崖絶壁を背にしたような緊張感あふれる戦いに突入する。相当深い事前研究の下、慎重に手を進めていかなければ一瞬で負けにしていまいかねない。

だがプロ同士の場合、どんなに危険と隣り合わせの戦いであっても、一手のミスで急転直下に決着が着くということはほとんどない。それは奨励会員同士であってもだ。大技が掛かりそうで掛からない。むしろ大技を封じ込め合う駆け引きが、延々と続いていく。

それはまるで、お互いに一発長打を秘める強打者を揃えた両チームのエースが、絶妙の配球で打線を封じこめて、最小失点での競り合いが続いている、そういう展開の野球の試合のようになる。

そして僕と月萌のこの将棋もまた、そういう展開になっていった。

月萌は、盤上にまっすぐに視線を落とし微動だにせず対局に没頭している。業界屈指の深さを誇る千場研究会で仕入れてきた変化に即興で対応する月萌。驚嘆するほどの棋力を持った巫女装束の妖怪。一体、これほどの実力をどうやって身につけたのか。ネット将棋だけでここまで強くなるのが、果たして可能なのだろうか？

それとも……これが「大橋分家」に関わる者故の実力ということなのか。

じり、じり、と。神経がすり減るような駆け引きを続けながら、それでも攻撃の切っ先はお互いの王将の喉もとへと少しずつ近づいていく。

互いの攻撃陣が互いの防衛線を破る。

ジャブが飛び、ボディブローが炸裂する。少しずつダメージが蓄積していった。

終盤に入ってから、僕は自分の陣形を変形させて「鷹橋ブロック」と呼ばれる防御陣を敷いた。8五飛戦法の名手、鷹橋九段創案の陣形リフォーム作戦だが、このタイミングでの鷹橋ブロック発動はプロでも前例がないはず。

先日の千場研究会で試したばかりの、僕の「新手」だった。

「……ちっ」

月萌さん、今、舌うちした？

「懸さん、さてはこの局面まで研究範囲ですね？」

「うん。月萌さんの助言に従って真面目に研究を重ねてきた成果だ」

「序盤の研究をしろとは言いましたが、こんな終盤まで研究しろとは言ってませんよ！」

「いやだって『横歩取り』の研究ってそういうもんだし」

序盤の研究と言っても最終的に実戦で勝つためにやっているのだから、変化手順によっては序盤や中盤を通り越して、終盤に入るところまで研究するケースもある。場合によっては詰みまで研究してしまうことだってあるのだ。「8五飛戦法」の勝敗は研究の占めるウェイトが大きいから、そうした傾向が余計に強い。

「これは……もはや暴力ですね。婦女暴行です。アメリカ政府に訴えますし！」



「ああっ、行きすぎた将棋の研究が深刻な外交問題に発展しそうだ」

「この問題は後日、国連の安全保障理事会で話し合われることになるでしょう」

「将棋がとうとう国際紛争の火種に!？」

火種というか、ブログのネタにする気に違いない。

外交ではなく盤上における危機を感じたのか、月萌はそこでトークを打ち切り、盤上へと視線を戻した。ここから月萌が沈思黙考し、長考に入る。その様子は、まるで意識が将棋盤の中に潜ってしまったかのようなようだった。

――また、あの『オーラ』だった。そうなのだ。「巫女装束補正」だとか「手つきや姿勢」などではない、それは何かを「持ってる」者だけがまとっている、独特の空気みたいなものだった。形ではなく内面から滲み出てくるような何か。

あれは……あれこそが僕が欲しかったモノじゃないのか？何故、月萌はソレを持っているんだ？

そして。

それまで30分ほど残っていた持ち時間から25分を費やす大長考の末、放たれたその一撃は、僕の度肝を抜く驚愕の一手だった。

飛車、角を立て続けに犠牲にして「鷹橋ブロック」を一気に攻略に掛かる。将棋は持ち駒を再利用出来るルールのため、駒を捨てて攻撃するということは相手に戦力を渡すということでもある。月萌の陣形も既に相当弱体化しているのだ。駒を渡せば強烈なカウンター攻撃がある。それにも関わらず、このタイミングで大駒を捨てての猛攻。

それは、僕から左腕を奪ったあの「斧」の威容を連想させるような、豪快な手順だった。僕からの反撃手順を、全て見切っているとでも言うのか？

派手な駒の交換が行われ、月萌の攻撃が一段落してみると。

その局面は。

――気がつくともはやエンドロールが流れているも同然の状態となっていた。

ここからお互いが普通に手を進めると、どうしても月萌の側が一手早く僕の玉を仕留めることになる、そんな局面。その速度を逆転させる手順は―― ないのか。

残り時間が切迫して、いやそれ以上に入念な事前研究を実戦の場で堂々と打ち破られたショックで、僕はさらなる逆転勝ちを目指すための気力を失っていた。

顔をあげるとそこには、将棋の神に仕えるかの如く、凜とした姿勢で佇む巫女がいた。

その姿を見て、僕は勝つことを諦めてしまった。

千場さん、僕は執念がなさすぎるのでしょうか？

それからほどなくして。

「負けました」

「は？聞こえませんが？」

「参りました！月萌さんはめっちゃ強いです！」

「頭が高いです。ちゃんとおでこを床に着けて！」

月萌に向かって土下座した。それは、大岡越前や水戸光圀公だってここまで低い土下座をされたことはないだろうというぐらいの、日本史に特筆されるような卑屈で見事な土下座だった。

それからしばらくの間。



僕は土下座したまま月萌のどSトークを聞き続けるという前代未聞の感想戦をやらされた後、身も心も憔悴してからようやく、長考寺を後にすることができたのだった。

時刻は午後五時を過ぎていた。

山門を抜けると、辺りにはまだ、蝉の鳴き声が響いていた。

十一.

――その日の夜。

そそくさと長考寺を退散した僕は、自宅に戻ってすぐにPCを起動した。

月萌との対局を思い出しながら、棋譜管理ソフトに指し手の棋譜を入力する。勝敗に納得がいかなかったのだ。あの局面、僕の側に本当に勝つ手はなかったのか？

初手から再生し詳細に検討する。ポイントはやはり、「鷹橋ブロック」を組み上げた直後の局面だろう。

それから数時間、検討に検討を重ねて自分なりに出した結論は「月萌の攻撃は結果的に指しすぎで、一度反撃してから冷静に受けに回れば勝ちがあった」というものだった。読みに抜けがあるかもしれないのでまた後日、千場研究会で試した方がいいかもしれな

い。

それにしても。

僕は終盤のお互いが相手の王将に迫る、いわば斬り合いの勝負になれば自信がある。

だが、忙しい局面で落ち着いて自陣に手を入れる、そんな手を見逃しがちだ。その僕の致命的とも言える欠点が、僕と月萌の差なのかもしれない。

「あなたは寄せ合いになるとお互いの玉の周辺ばかり見えています。一見、全然関係のない筋にも手の可能性は隠れているのですよ。大体、懸さんは終盤になると興奮しすぎです。全く、これだから童貞さんは……」

「な……月萌っ!？」

突然の声に驚いて顔を上げると。

座卓の向こうに、膝の上に斧を寝かせて正座する月萌の姿があった。いつもの巫女装束の上に白を基調にした千早を羽織っている。「千早」とは古来より神事の際に用いられている衣装で、月萌のそれは白地に薄い緑で鶴のような模様が染め抜かれていた。以前、左腕を奪われた時の白装束もこの千早だったのかもしれない。神事扱いしてもらって光栄だが、自分が生け贄にされるのかと思うと心穏やかではられない。

「……大体、将棋に真剣に向きあっていませんし」

「そ、そんな事はないぞ!今だってこうして真剣に将棋の研究を…」

「アニメの抱き枕を抱えながら言う台詞ではありません」

「ち、違っ……こ、これは……そうだ!扇子だ!棋士はみんな将棋する時は扇子を持ってるんだ!」

「かなり変わった形ですね?」

「斬新なセンスだろう?」

ジト目で睨まれた。上手いことを言ったつもりだったのに。

「まあ、それはそれとして。……約束どおり大事なものをいただきに参りました」

白装束の少女は線香の煙が立ち昇るようにゆらりと立ち、両の手で斧を構えた。緋色に染まった瞳の粘りつくような視線が僕の背筋に寒気を走らせる。ああっ、そうだった!賭けに負けたんだ。忘れていたつもりはないけど、珍しく将棋の研究に夢中になってうっかりしていた。――いや、考えないようにしていただけだった。

「こ、今度は何を奪うつもりだ!」

「そうですね。……では、そこに置いてある水辺で戯れてる美少女のフィギュアとか」

「何だと!くそ、この悪霊め!その撫○は渡さん!命に代えても守り抜いてみせる!」

……だから○子フィギュアなんて持っていないというのに、何を言わせるんだ妖怪め。

妄言にも程がある。

「そうですか。ではやめておきましょう。フィギュアは魔界ではあまり高く売れませんし」

……フィギュアは高く売れない?って売ったことがあるかのような言い方である。イヤな予感がして戸棚をよくよく見てみると。

「ああっ!いない!綾○がいない!」

「眼帯をつけた青髪の女の子なら、先日のネット対局の後没収させていただきました」

なんという事をッ！せめて誰を連れて行くか一言相談してくれてもいいのに！

しかし、いくら数が多いとは言え〇波がいなくなっていたことに今の今まで気づかないなんて、なんて迂闊なんだ。迂闊すぎる。こんなことだから、僕はいつまで経っても四段になれないのか……！？

そう。月萌は、将棋に勝つと「対価」を奪う。住職の髪。僕の左腕。ずっとそうだったじゃないか。ネット将棋でもそれは同じなのだ。住職の「実際に被害を受けたのは住職と僕だけ」という言葉でうっかりしていたが、考えてみればネットの住人一人一人について住職が把握しているわけがないのだ。

……僕や住職以外に月萌の被害者はいないのか。いるとすれば、一体どんな目に遭っているのか。そのことについて、僕はもう少し想像力を持ってもらってもよかつたはずなのに、自分のことだけで精一杯だったのだ。狭量すぎる。

「そういうわけですので、やはり身体の一部をもらっておきます」

「XXXXとか？」

「誠に遺憾ながら、童貞さんのXXXXはあまり高値では取り引きされないのですよ」

「ああ、ごめんなさい。安値のXXXXで」

「……ふと思ったのですが……この話がドラマ化されたら今の会話は『ぴー』だらけですね」

「ふと思ったんだけど、この話をドラマ化したら社会問題になってしまうんじゃないかな？」

「そうでしょうか？ではいっそのことアニメ化しますか？しかも深夜アニメで。私のフォロワーさんに、しゅうさんという、どんなに忙しくても美少女の頼みだけは絶対に断らないことで有名な作曲家の方がいらっしゃいますので、twitterでオープニングの作曲を頼みましょう。

『@Syu\_13th\_month しゅうさん？アニメのオープニング曲の作曲をしていただけませんか？』」

「こらこらこらこら、アニメ化プロジェクトを進めるんじゃない！」

「そして作詞はコカチさんに……。『@chicatus こんばんは。実はアニメの制作をしようと思っているのですが、オープニング曲の作詞をお願いできませんか？』」

「行動が迅速すぎる！……で、その人は美少女の頼みを断らない作詞家なのか？」

「ソネットが得意なお母さんらしいです」

「twitterは人材豊富だな！」

「ぜいらむたん (@Zeirams) は人罪らしいお？」

「それ別に上手くないから！」

使い古されたダジャレだから。

あと、斧を構えた妖怪が『お？』とか言うな。

「さて。楽しい会話も尽きたところで……そろそろお開きにしましょうか」

「ちょ、ちょっと待って！も、もう少し落ち着いて話し合いませんか？」

「筋井先生の悪口を言うような不屈き者と話し合う余地などありません！」

ああしまった！筋井九段ネタがこんな結果の伏線になるなんて！ほんの冗談だったのに！僕だって筋井九段のファンなのに！

月萌は斧をさらに上段に構える。冗談ではなさそうだ。会話がお開きというか、僕の身体がお開きにされそうな悪寒がした。

緋色に染まり、そしていつの間にかまた三白眼になっていた月萌の眼光が僕の目を捉える。

「ひっ」

情けのない声をもらしながら右手で頭をかばいつつ後ずさる。腰が抜けて立ちあがることさえ出来ない。一瞬、受けの名手、地村八段ならこういう時でも得意の『顔面受け』をするのだろうか？……等と思ったりしたが、そんな棋士ネタを思いついたところで状況が好転するわけでもなく。

ちなみに将棋で言う『顔面受け』とは、王将自らが前線に出て相手の攻め駒を取りに行くような大胆な受け方のことを言う。相手の意表をつくので受けの技術の高い人がやると割と成功するのだが、だからと言って斧を顔面受けして幸せになれるとはとても思えない。ていうか、月萌の斧で斬られたら「消失」するんじゃないか？

顔面が消失って……それってのっぺらぼうだし。月萌じゃなくてむしろ僕の方が妖怪みたいになってしまう。

……やばい。絶体絶命。

こんな時、キョ○なら長○有○が助けに来てくれるのに。

僕の○門○希は抱き枕だから助けてくれないんだ！と、抱き枕なんて一つも持っていないのにそんな事を思ったその時。

ガチャリ、と音がした。

――ノウボバギャバテイ・タレイロキャ・ハラチビシシュダヤ……。

読経の声が響き渡り。

――アビシンシャトマン・ソギャタバラバシャノウ……。

その声が斧を持つ月萌の動きを止めた。まるで、経文が月萌を縛りつけでもしたかのように、ぴたりと。

――アユサンダラニ・シュダヤシュダヤ・ギャギャノウビシュデイ……。

安アパートの部屋のドアがゆっくりと開く。鍵は掛っていなかったのか？ 妙に冷静に、そんなことを思いながら、声の方を見ると。

――サラバギャチハリシュデイ・サラバタタァギャタシッサメイ……。

開け放たれた、扉の向こうに。

――ジシュタノウ・ジシュチタ・マカボダレイ。……ソワカ。

薄黒の法衣に黄土色の袈裟を纏った長考寺の住職、田沼泥鮒がそこにいた。

十二.

「すまないね、月萌君。駒を預かった時に前金を貰ってるんだ。これも仕事でね」

すまなそうな顔など少しもせず、住職は懐に右手をいれる。懐から取り出したその手の上にあったもの、それは。

長考寺での対局で使われた、あの赤茶色の駒箱だった。

「月萌君、君の『お方様』つまりこの駒の最初の持ち主とは大橋宗珉ではないかね？」  
オオハシ、ソウミン？

「江戸時代、『将棋所』を名乗っていた家元が三つあって、それらは将棋御三家と呼ばれていた。いずれも寺社奉行の管轄下にあったとされている。大橋宗珉は御三家の一つ、大橋分家の八代当主だ。1818年に生まれた人物らしい。懸君、天野宗歩は知っているかい？」

さすがに天野宗歩は聞いたことがあった。たが名前を知っているだけだ。

「天野宗歩は、幕末の棋聖と呼ばれた棋士だ。大橋本家に弟子入りし、最終的に七段を下賜された。大橋家の嫡子を差し置いて当時最強と噂されている。宗歩四天王と呼ばれた優秀な弟子を育てたことでも知られているね。詰将棋集『待宵』や必至問題の傑作が収められた『将棋必勝法』等の著書を遺したことで有名な渡瀬莊次郎も宗歩の弟子の一人だよ」

住職は、一つ錫杖を振るって部屋の中へと歩を進めた。シャン、と澄んだ音が響く。月萌は硬直したままだ。

「大橋宗珉は宗歩に全く歯が立たなかった。苦悩する宗珉に、嘉永五年、1852年に将軍より御城将棋の命が下る。懸君、御城将棋は知っているね？江戸時代、年に一度、江戸城内で公務として行われる将棋の対局だ。徳川吉宗の代に旧暦の11月17日に行われることが制度化された。現代ではこの日は『将棋の日』とされ、日本将棋連盟主催でイベント対局等が開催されている」

.....なるほど、あのイベントにはそんな云われがあったのか。将棋の歴史なんて全然知らない奨励会員でごめんなさい。

こんなことも知らないのかね、と住職はため息をついて、話を続けた。

「将軍の御前で宗歩と対局することとなった宗珉は、大橋分家当主としてのプレッシャーに押しつぶされそうになりながらも、何とか勝ちを納めようと壮絶な修行を行う。まさに、危機迫るという感じだったらしい」

将軍の御前対局、それはどれほどの重大事だったのだろうか？まさに命懸けだったのか。

僕には、その重圧は想像することすらおぼつかない。

「その姿を見かねた宗珉の妻がついには神仏に天野宗歩折伏を祈ったそうだ。.....まあ、実際はエセ霊能者の類に騙されただけかもしれない。現代でもよくある話だ」

ニヤリと、住職が笑う。

「祈祷が効いたのかどうかは判らない。だが結果として宗珉は御城将棋で宗歩に勝利を収める。その将棋は、宗珉一世一代の名局と称賛された。.....しかし、人を呪わば穴二

つ。呪術に手を染めた宗珉の妻は、その報いからか狂死してしまう。それにショックを受けた宗珉もやがて病を発し、45歳の若さでこの世を去った...という話が伝えられている」  
「違います！」

ガツツという鈍い音とともに、先程まで硬直していた月萌が叫んだ。経文の呪縛は解けたのか。

「お方は.....真摯に将棋に向き合っておられました。奥様も」

斧が床にめり込んでいる。どうやらこの部屋の敷金が返ってくることはなさそうだ。  
「神聖な御城将棋を冒瀆し呪術に手を染めたのは宗歩の方です。宗歩は重要な対局が迫る度に子飼いの術者に命令して対局相手に呪詛をかけていたといいます」  
ホントかよ。

「.....ま、噂なんですけど」

噂かよ！

「まあそれはともかく。.....御城将棋が決まった時、奥様は宗歩側の呪詛からお方様を守るために、伝手を頼って呪詛返しの護符を手に入れました。お方は、その護符を駒袋に納め、懐に入れて対局に挑みました。.....そして、盤上の戦いで正々堂々と宗歩を破ったのです！」

将棋盤の外で呪いが飛び交っているとか、どんな「正々堂々」なんだか。

アニメ化されたらしゅうさん (@Syu\_13th\_month) 作曲のBGMが炸裂するに違いない。  
いやアニメ化なんてしませんけど。

「宗歩の玉を仕留めた瞬間、お方の懐の護符は八つ裂きになったそうです。宗歩の呪いからお方様を守ったのでしょう。お方は奥様に大変感謝されていました」

つーか、そもそも宗歩の『呪詛』って何なの？将棋の対局に影響がありそうな呪いの類って何だろう？終盤に正解手が指せなくなる呪いとか。

.....もしかしてその呪いって、刻を超えて筋井九段に掛ってるんじゃないのか？

「.....懸、死ね（ぼそっ）」

死ねと言われた。ジト目と言われた。筋井ファンの怒りを買った。

「お城将棋での一戦に破れ評判を落とした宗歩は、呪い返しを恐れ、またお方様と奥様への逆恨みから、今度はお二人の命を奪うための呪詛を行ったのです」

ホントかよ。

「そうに決まっていると、お弟子さんたちが言っていました」

噂かよ！

「.....実際、その後すぐにお二人はこの世を去り、将棋盤と駒だけが残りました。そして、『棋聖・天野宗歩』という忌まわしい名声が——」

状況証拠だけじゃないか？

「真実はいつもひとつ！」

いや、それ言ってる少年探偵も大概怪しいから。

「実は、黒ずくめの組織の前身は大橋分家だったという.....」

変な噂を流さないでください。つーか、それがホントなら黒づくめというより、いいことづくめだ（何が？）。

「お方は、もっともって将棋が指したかったのに。宗歩なんかと関わったばかりに……」

そして。

だから。

月萌は。

宗珉の残した駒は、妖怪化して現代に蘇ったというのか――？

「月萌君、君の正体も宗珉や宗歩の事件の経緯も、ここでは詮索しない。史実や巷説は所詮は他人の見方。君の証言も所詮は君の主観だ。たった1つの真実など……この世に存在しない」

名探偵のコロン君に喧嘩を売っているような台詞を吐く住職。さっきから〇ナンネタが多すぎるな。これ、元々はミステリー小説だったんじゃないか？

でもね、と住職。

「ただ『将棋を指したい』という思いや、天野宗歩への怨念だけでこの世にとどまるのは、いいことではないよ」

シャン――と、また1つ錫杖が鳴る。

「ここで懸君の魂を取っても何もならないよ。お方の無念は晴れないし、今さら大橋分家が再興するわけでもない。大体、懸君は将棋界にとっては単なる『名人候補の一人』にすぎないんだから、彼がどうなったところで将棋界に変化が起こるわけでもないし」  
……グサッ。

本音を言われた。真実をつかれた。

「君はどうする？ どうしたい？ 天野宗歩はもうこの世にいないんだ。復讐なんて出来ない。君は現世にいてはならない存在だ。目的もなく将棋を指してこれからも人のモノを奪い続けるのかい？」

――それじゃあただの悪霊だ。祓わなければならない。

そう言ってまた一つ。住職は錫杖を振る。

「どうだろう？ 懸君の将棋には可能性があるんじゃないかな？」

住職が急に話題を変えた。手にした数珠がジャラリ、と音を立てる。

「月萌君、駒に戻りたまえ。そして懸君に力を貸してやってくれないか？……これから懸君はパソコンではなく、君と君のお方の駒を使って将棋の研究をし棋譜を並べ、詰め将棋を解く。そして、やがてその才能に見合うだけのタイトルを取るだろう。それは、君のお方の遺志が、現代将棋界の頂点にたつことにもなるだろう」

おい。

何だそれは。

あのハゲは、あの悪霊を僕に憑けようとしているのか――？

しかも、現代将棋界の頂点？

いつの間にか話がやばいくらいに大きくなっている。というか、もの凄い勢いで話が逸



れているような気がする！

……もしかして、逸らしたのか。

対象のない妄念に駆られている月萌に——目的を与えたのか。

それが、この場を収めるための、住職の選択なのだろうか。

「将棋は……人の命を奪うためにするものじゃない。君のしていることは宗歩と同じだ。お方は、将棋の相手を呪ったりはしなかったのだろう？お方の愛した将棋を……汚してはいけないよ」

住職は駒箱を床に置き、数珠を持ち直して、それからゆっくりと合掌した。

——交渉が終了したのだ。

月萌は瞳を……それはすでに緋色ではなく、やや茶色がかったいつもの瞳で……まっすぐに僕を見て。今度は指差さずに話し始めた。

「以前、ご両親と二十歳までに奨励会を卒業する約束をしている、とおっしゃってましたね」

「ああ」

「温すぎますね。私と二十歳までにタイトルを獲る、と約束をしてください」

「そ、そんなムチャな！」

「お方の駒を使ってちゃんと修行すれば可能です。その駒は紀元前に太平洋に沈んだ、伝説の王国にいた天才駒師が創った駒なのです？強大な呪力を持っています。それを使えば誰でも強くなれます。どんな童貞さんでもあつという間に最強棋士です！」

「ああっ！その話はホラ話だと判っているのに！そんな駒があったらいいな、と一瞬でも思った自分が情けない！」

つか、童貞関係ないだろう。

「全く、そんな駒の力を借りてまで強くなるうだなんて、相変わらず懸さんは人間が小さいですね。懸さんの部屋の棚に所狭しと並んでいるおびただしい数のフィギュアより小さいです」

「お前が持ちかけたんだろうが！」

あと、おびただしいとか言うな。一つも持ってないのに。

「どちらにせよ私も対価をいただかなくてはなりません。この場はそのハゲの禿げ頭を立てて今日のところは引きさがることにしますが、これはあくまで二十歳までの執行猶予にすぎません。そうですね…。ではこうしましょう。二十歳になった瞬間、アナタが何もタイトルを持っていなかった場合——」

……で。

月萌はビシィ！と僕を右手で指差して。

左手で、床に刺さった、僕の左腕と部屋の敷金を奪い去った忌まわしい斧の柄をしっかりと握って。

「私のこの紅の斧『アックス・トルネード』が懸さんの脳天に炸裂するから覚悟しておきなさい！」

名前があったのか！何というネーミングだ。安直すぎて忘れられない。今すぐ忘れたい

のに！こんな事を覚えるくらいなら将棋の定跡を覚えたいのに！脳のリソースのムダ使いすぎる。

「懸さん……」

『アックス・トルネード』から手を離れた月萌が目を伏せた。

「将棋盤の前では、もっとしゃんとして下さい」

瞳が滲んで見える。

「盤の前で、もっと敬虔であってください。駒を愛しんでください。将棋の研究をパソコンなんかで済ませないでください。お方様は将棋盤の前ではとても美しかった。あなたは……あなたはこんなにも、将棋の才能に満ち溢れていると言うのに……どうして……」

不意に月萌の対局姿が脳裏に浮かぶ。美しく、凄烈で。神に仕え神事を司るはずの巫女が、将棋盤の前に座っていたあの佇まいには、タイトル戦を戦うトップ棋士に似た何かがあった。

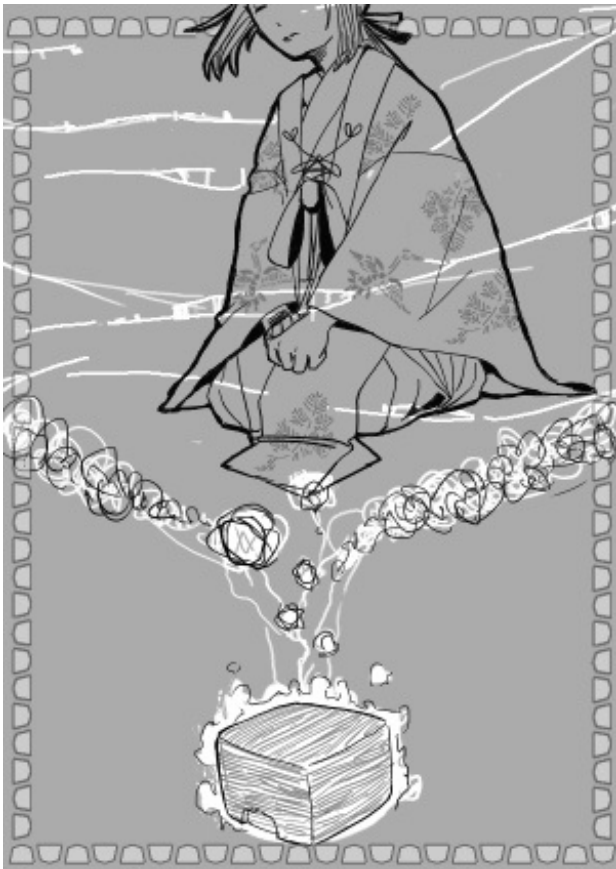
あれは……トップ棋士たちのあの姿もまた、将棋を心の底から愛し将棋に我が身を捧げた者の姿だったのだろうか。

ならばプロ棋士とは——将棋の神に仕え、その神託を盤上へと伝える……巫覡だ。

「このまま駒に封じられるのかと思うと……残念です」

月萌の声にいつもの精気がない。

駒に宿った物の怪。お方様への思慕と将棋を指したいという情熱から生じた存在。それでも、いやそれだからこそ、人の姿で盤の前に座り、その手で駒を繰って将棋を指したかったのだろう。



僕は……月萌の半分ほども将棋に懸けてはいなかった。だから僕は「元」天才に堕ちたのだ。月萌の将棋への思いが羨ましいとさえ思った。僕にもかつては、彼女のような将棋への情熱があったはずなのに。

それなのに、僕は……。

「もうtwitterが出来なくなるなんて……」

将棋じゃなかった！

「仲のいいフォロワーさんたちがたくさんいたのにっ」

僕はブロックされてるけどね！

「懸さん、少しは将棋の駒を愛でてくださいね。抱き枕を愛でる時間の半分でいいですから」

それが、月萌が僕に向かって呟いた最後のネタだった。月萌……僕は○門○希の抱き枕なんて、全っ然っ持ってないんだからね！

部屋の中で風が凧ぎ、月萌の姿が薄らいでいく。——ゆら、ゆら、と陽炎が立ち上り、やがて月萌は、僕の前から消えていった。

床に置かれた駒箱が淡い光を帯び——やがて、しん、と鳴った。

部屋の片隅で田沼泥鯨がまた1つ、錫杖を打ちならしていた。

十三.

――あれから一カ月。

今期三段リーグの全ての日程を終えた僕は長考寺を訪れていた。いつものように寺務所の奥の和室に通される。部屋の隅にあった、古い、物言わぬ将棋盤と駒箱は既にそこにはない。

しばらくすると作務衣姿の住職が現れて、いつものように坐禅組みに来たのかい？と言い、僕もまたいつものように遠慮しておきますと返す。住職は笑いながら僕の向かいに座った。

「駒の調子はどうだい？」

僕はあの事件の後、住職から盤駒を預けられた。元の持ち主には話を通すという。買い取るとも言っていた。どこまで本当の話なのかは判らない。僕は、あれから自宅での将棋の研究は全て、あの将棋盤と駒を使っている。

「本当に駒に魂が宿ったのかどうかはわからないけどね」

ま、どっちでもいいよ、もう終わったんだし――と言って、住職は僕にお茶をすすめてくれた。住職によれば、本や絵巻物などに描かれる普通(?)の付喪神は魂の宿った道具に手足が宿ったような姿なのだという。少女の姿をした月萌は「付喪神」としてはめずらしいのだろう。将棋の駒に魂が宿り、少女の姿を纏って騒ぎを起こした。僕と住職は、それに化かされたということか。

「うーん、というか逆なんだけれどね」

「逆？」

「"妖怪"という言葉は、本来は『不可思議な出来事』『説明のつかない現象』全般のことを言うんだよ。化物の実体が存在するかどうかは問題じゃない。というかそんな実体は存在しない」

.....また訳のわからないことを言い出した。実体が存在しないのは妖怪じゃなくてむしろ僕の左腕の方である。いや、左腕が消え去っているこの事実こそが妖怪.....月萌が存在した証明ではないのか。それに――僕の左胸の内ポケットにある駒袋が.....いまブルブルしてるような気がするんですけど？

「懸君と私は、ほぼ同時期に巫女装束の少女と出逢い将棋を通して交流した。そして同じ時期に私は髪を、君は左腕を失っている。他にも紆余曲折があって最終的にはあの将棋盤と.....」

住職は何もない部屋の隅に目をやりそして、僕を左胸のあたりを指さした。

「その駒が残った」

僕が駒袋を持ち歩いていることなど、とっくにお見通しらしい。

「これら一連の不可思議な現象。我々が『体験したコト』こそを"妖怪"と呼ぶんだ。つまり、妖怪という存在があって現象が起こるのではなく、現象が先にあって、それを説明するために妖怪の名前と形が作られる。器物妖怪が騒ぎを起こすんじゃなくて、器物が動いたり騒がしく音をたてる、という現象の説明のために『付喪神』が持ち出された、というの

が正しいらしい」

と、そこで住職は一旦話を切って、部屋の片隅の将棋盤に視線を送った。

「月萌と名乗った少女も、いくつかの不可思議な事象の一部でしかない。いや、もしかするとそれらは全く関係のない別個の事件だったのかもしれないよ？ただ、我々の脳が『全て駒に宿った妖怪・月萌が起こした事件だった』という説明に納得しがっているだけさ。本当は我々は二人で壮大な妄想でも見たのかもしれない」

——妖怪は、概念の世界にしか存在しないんだから、と言って住職はお茶をすすった。

話が観念的すぎてよく判らない。ただ、この物語は「なかった」コトにした方がいいのだ……と、住職がそう諭してくれているような気がした。

「それに、この寺の者は私を除いて誰も月萌君の姿を見ていないらしいんだよ」

怖っ。

「……もう面倒くさいから『妖怪』が出た一、でいいよ。いずれにせよ……事件はもう終わったんだ」

そう、住職のおかげで、あのお経の力で。

「住職、あの時のお経は——」

「ああ、あれはね『仏頂尊勝陀羅尼經』と言って、ウチの寺ではあれを毎日7回読む日課になっているんだ。まあ、曹洞系のお寺ではどこもそうだと思うけど。

kakuyuさん(@southmtmonk)のtwitterで知ったんだけど、平安時代、妖怪に出くわした藤原常行という人が、尊勝陀羅尼のお経のおかげで救われたという話があるらしい。へえと思って試しに月萌君に使ってみたら意外と聞いてびっくりした」

「試しにって……そんなテキトーな感じだったんですか？効かなかったどうするつもりだったんです？」

「その時は回れ右してさっさと逃げたさ。大体、私はゴーストバスターじゃないんだから妖怪退治の呪法なんて知らないよ。まあ、妖怪の正体を『人の煩惱がもたらすもの』と捉えるなら、妖怪を滅することも仏教の目的の一つ、と言えなくもないかも知れないけど」

まあ確かに。いくら考えても判らないものは判らない。判らないことが——「妖怪」ということなのかも知れなかった。

それにしても。

「妖怪って言うわりには、すごい可愛かったんですけど？性格以外は！」

「妖怪はみんな可愛らしいよ」

そうなのか。

「ニーソ履いてましたけど？」

「妖怪ってのは結局人間の概念の産物だからね。その時の社会状況を如実に反映するんだ。最近、少女の姿をした妖怪はみんなニーソ履いてるらしいよ」

何と言う斬新な学説だ！

「それにしても、住職って何だかんだ言って妖怪に詳しいですね」

「……ごめん、今の説は、全部twitterで聞いたぜいらむたん (@Zeirams) の受け売り！」

「ぜいらむたんスゲー！」

ただの変態だって噂だったけど、そうでもないのかな？

「昨日も『雪女たん、はあはあはあはあ』ってツイートしてたなあ……」

やっぱりただの変態だった。

ぜいらむタソのことは置いといて。

そんなことはどうでもよくて。

今日は何となく、住職にはぐらかされたような気もする。

「これは、推測だけど……」

急に、住職が何かを思いついたような顔で呟いた。

――もしかすると、大橋宗珉は君に似ていたのかもしれないね、と。

「君を初めて見た時、月萌君がはっとしたような表情をしていた。君に好意を抱いていた可能性もなくはない。私の話を聞いた程度で、ああもあっさり引き下がるとは正直驚いた。本当は君を助けたいと、心のどこかで思っていたのかもしれない。そう言えば、雪女は好いた男を氷漬けにして永遠の伴侶とするらしいね。案外、月萌君も君を駒袋にでも変えてしまうつもりだったのかもしれないよ」

とんだヤンデレ妖怪もあったものだ。恐ろしい。

「ぜいらむたんは”妖怪はみんなツンデレだ”って言ってたけどね」

これまた斬新な学説だ。ていうか、ぜいらむタソは妖怪の研究をしてるとかじゃなくて、きつと妖怪にあらぬ劣情を催しているだけに違いない。そんな気がする。何故か自分のことのように確信できる。何故だろう？

――で。

結局、月萌とのことは上手い説明が見つからないままで。という事は僕の「あの」不安も落ち着く先はないままだった。

「月萌君は、天野宗歩への一種の憎悪から、駒を依り代にして沸いて出てきたのだと思う。妄執以外の何物でもない。迷惑な話だし気の毒な話でもあるね」

お茶をすする住職。あまり気の毒がっているようには見えない。というか他人事のように話している。まあ他人事なんだろうけど。

そして。

――懸君がその駒で必死に将棋の修行をして、その結果タイトルを取れたら満足して本当に消え去るかもしれないね――と、また他人事のように呟いた。

何だかやけに重い荷物を背負ってしまったような気がする。

「将棋の勝ち負けなんてほんとはどうでもいいことだと思うんだけどねえ」

棋士を目指してもがいている奨励会員の人生を全否定するようなことを言う住職。

「素人の私が言っても説得力はないけど、将棋の真理を追究することと勝利を追い求めることは、似て非なることのような気がする。大橋宗珉と天野宗歩の悲劇は将棋の真理とは離れたところで戦ったせいじゃないのかなあ――まあ、全部想像なんだけど」

想像というか、月萌の話の根拠が全て『噂話』っぽかったわけだが。

結局、あの一連の事件が何だったのか、その決着がつくことはなく。

左腕は、失われたままで――。

二十歳までにタイトルを取れなかったら、また月萌は現れるのだろうか？

「さあね」

と住職はとぼけたけれど。

でもそれは、もうどうでもよいことのような気がしていた。

そもそも僕は奨励会の在籍リミットは二十歳まで、と親と約束している。いや、そう言えば僕は、二十歳までにはタイトルを取ると、そう自分に誓って奨励会に入ったのではなかったか？

妖怪はそれを見る人の概念の産物だと住職は言う。ならば月萌は、自分が自分に課した約束を、ただ思い出させただけの怪異だったとも言える。

僕は、将棋への情熱を――取り戻せただろうか？

お茶をすする住職は無言で。それはつまり、もう僕と話すことはないのだという無言のサインなのだろう。僕も、もう聞くことはなく話すこともなくなった。ここに来れば何かに決着がつくような気がしていたけれど、それは甘えだったのかもしれない。

僕は住職に礼を言って。

「次は、四段になってから、また挨拶に伺います」

と言い。

そして。

――長考寺を後にした。

#### 十四.

長考寺への最後の訪問から3日の後、まだ腑に落ちないことの残っていた僕は、意を決してtwitterにアクセスし、ぜいらむタソ(@Zeirams)にDMを送った。あの住職が妖怪のことで参考にしたという人物である。botだという噂もあるけど。

「妖怪体験」をしたこと。ここ四ヶ月の間に僕に起こった様々な出来事。月萌がどんなにヒドい奴であるかについて、かいつまんで説明する。

フィギュアと抱き枕の件？してないよ？だって持ってないもん。

DMで何通ぐらいになっただろう？途中から、これメールにした方が良かったんじゃないかと思いはじめたが、メールアドレスを尋ねると、色々と改まった感じになってしまう。

twitterのDMなら、相互フォローしている以上はそう問題もないだろう。……と、そんな敷居の緩さがtwitterの良さでもあり、稀に常軌を逸した無礼者が湧いてしまう欠点でもある。

人は人を批判し始めると、やがて非難と人格攻撃に目的がすり替わることがある。特に著名人に対してしつこく絡む人がたまにいて閉口する。反論と罵詈雑言を混同してはいけない。気に入らないなら黙ってリムーブすればいいのだ。そこへ行くと将棋連盟会長

は、全ツイッターをガン無視してある意味素敵だ。一部で「人の意見に耳を貸したくないだけ」「フォローの仕方を知らないだけ」とか言う噂もあるが、それも全部ひっくり返してネタでやっているだけかもしれない。まあ、百歩譲っての話だけど。

……と、エラそうにtwitter論を述べつつ、一方的にぜいらむタソ(@Zeirams)にDM絨毯爆撃を仕掛ける僕だった。

本当にいきなりすぎて申し訳ない。気分を害しただろうか？ブロックされたらどうしよう？

……そう思いながらしばらく待っていると、やがてぜいらむたん(@Zeirams)から返事のDMが届き始めた。

……ああ、何ていい人なんだろう！

ぜいらむタソはいい人だなー。ぜいらむタソはいい人だ。ぜいらむタソはいい人だー。

「……古来より日本では森羅万象に『精』が宿ると考えられていました。一種のアニミズムですね。『精』とは精霊または神の本体あるいは本質。『それ』を『それ』たらしめているもの。コア、もしくはエッセンスです」

語り出しから既に意味が判らない。おい、ちょっと待て。ちゃんと相談に乗ってくれてるんだらうか？

「花には『花の精』木には『木の精』が。石にもTVにも本にも『精』が宿っています。それらはこの世界に偏在していて、現象は全てその働きによるとも言われます。将棋盤には将棋盤の精、将棋の駒には駒の精が宿っている、という考え方ですね。そして『精』は多くの場合、人の姿で現れる、とされています」

精って、妖精か？月萌が妖精だと言うのだろうか？妖精と言っただけで月萌の好感度がちょっとだけ上がる。ものは言いようとはこのことだ。

「一方、付喪神は器物が百年を経て妖怪化したものです。道具そのものが化けたお化けであって、つまり付喪神は『この器物』なわけです。偏在しません。将棋の駒の精は全ての将棋の駒に宿っていますが『付喪神と化した将棋の駒』は『その一個』だけです。将棋の駒の場合、一個じゃなくて一箱かもしれませんが」

ぜいらむたんの妖怪DM連投が止まらない。何だか早朝の妖怪ツイート連投みたいだ。しかも普通のツイートではなく、僕宛のDM。僕のためのDM。何てレアなんだ。嬉しいやら哀しいやら。いやむしろうざい。

「ある将棋の駒を付喪神に化けさせる『魂のようなもの』と、『将棋の駒の精』は似て非なるものなんです。付喪神はあくまで『器物それ自体』。だから付喪神は、器物が動いたり喋ったりする。手足が生えたりもする」

つまり、月萌＝付喪神ではない、というのが、ぜいらむたんの見方なのだろうか。住職と僕の見解、全滅じゃん。

「その月萌さんという方は、人の姿をしているのだから付喪神とは違うと思いますね。では『駒の精』かということ、属性が大橋分家に偏りすぎている気がします。ふむ、天野宗歩憎し、の妄念が器物百年を経て将棋の駒の精を変質させて現れたのか……」



妖精でもないらしい。知ってましたけど。

大体、将棋界で妖精と言えば、諸田理緒タンか地村てんて一と相場が決まっているのだ。弥内さん？弥内さんは女神です。

「幽霊とか亡霊と考えた方がすっきりするような気がする。関係者の一人が成仏出来ずに亡霊と化して駒に取り憑いていたとか。月萌という名前があるのも気になりますしね。そもそも固有名詞を持つのは幽霊の最大の特徴なんですよ」

月萌の場合、悪霊といった方がすっきりするような気がする。

「有名な幽霊と言えば、四谷怪談のお岩さんとか皿屋敷のお菊さんとか、羽生（はにゅう）村の累（かさね）とか。固有名詞があったら幽霊。固有の名前を持たずに化けたら妖怪です」

幽霊と妖怪の見分け方。85へえ、だ。

「例えば「ウブメ」は、「死んだ妊婦を埋葬すると化ける」という言い伝えや概念から生まれた妖怪です。これは、『浅草に住んでいたうめこさんの幽霊』とかではなく、あくまで「死んだ妊婦という概念」なので固有名詞を持ちません。なのでウブメは妖怪なんです」

何だかさっぱり判らないけれど、ぜいらむタソが極度の妖怪脳の持ち主らしいということだけは判ってきた。

「大橋分家は将棋の家元なのでしょう？お金持ちそうですねー。実際どの程度の収入があったのか知りませんが。でもメイドの一人や二人いたかもしれません。月萌さんはメイドの幽霊」

いや、メイドって……。まあ奉公だの下女だのと表現したところであまり意味は変わらない。印象の問題である。

「『ご主人様、対局の準備が出来ました♡とか、将棋指しながら『ご主人様、私、もう受けがありません。ていうか私、総受けですわ♡とか。

……うっわ、やべえ。大橋分家やべえ！！エロゲだエロゲ」

ぜいらむタソ、変態の本領発揮である。まあメイドかどうかはともかくとしても、月萌の正体が大橋分家ゆかりの女性である、という説にはそれなりの説得力があるような気がする。

ここで、僕はもう一度DMを送った。

「住職は月萌を駒の方に封じたんですけど、やっぱり月萌の本体って将棋の駒だったんですかね。将棋盤は関係なく。それとも両方なんですか？」

「元々は……どうなんですかね。両方だったのかもしれませんが、でもどちらか一つだとするなら、それはやっぱり駒の方だと思います」

あっさり断言された。

「将棋の駒って、木やプラスチックで作られた五角形のピース上に属性を示す字が書かれていますよね。この形式の『モノ』というのは、十分に呪物となりえます。単なる木や紙の端くれに図象や文字があるだけで、それは人を縛る「呪」になるんです。モノによっては、それを人はありがたがる。拝む人まで現れる」

ぜいらむタソにかかると将棋の道具も呪物になってしまうらしい。恐るべき妖怪脳である。

「護符もそうだし紙幣もそう。お守りやおみくじだってそう。罰当たりを承知で言えば、お経だってそうですよ。単なる「モノ」に「字」が書かれると、そこに社会の「お約束」が発生して人はそれに囚われる。これを「呪（しゅ）」というのです。どうです？将棋の駒って「御札」そのものじゃありませんか？将棋の駒は……怪異と相性がいいと思うんです」

ちょっと！言い掛かりはやめてください。そんな相性いらないから！

「でも多分、月萌さんの本体が大橋分家の将棋盤や駒だということはないと思いますよ」  
なんだ違うのか。びっくりした。

「だって、最初に月萌さんが懸君の部屋に来たとき、盤駒はお寺にあったんでしょう？本体が駒だとしたら、なぜその間、離れた場所に月萌さんが現れたのか説明が付きません」  
そりゃそうだ。そうなのだ。どういうことなのだ？

「将棋の駒は、属性を文字で表記することで人を「ルール」という名の「呪」で縛る。これ、十二分に呪物ですよ。仮に、その大橋分家の駒に何らかの「呪力」が宿っているとしたら、もしかするとそれは月萌さんを幽世から現世へと繋ぐインタフェースとして使われているのかもしれない。まあ妄想ですけど」

というかここまでのぜいらむタソのDMが全部妄想ですよ？

「もしかすると月萌さんは駒に封じられたのではなくて、今もどこかで休んでるだけかもしれない」

月萌が、駒に封じられていない？

「一緒に現れたからと行って、正体と同じとは限りませんしね。竹切り狸と一つ目小僧が仲良く手を繋いで現れたからといって、一つ目小僧の正体が狸だってことにはなりません。それらが同時に同じ事件に関わったとしても、あくまで別々の妖怪です。単なる共犯関係。大橋分家の駒と月萌さんも、何らかの関係はあったにせよ、それぞれ別個の存在なのかもしれない」

そうなのだ。駒が変化して月萌になったところも、消えた月萌が駒箱の中に入ったところも……実は僕は見ていない。

月萌は僕の前に現れ、消えて、駒が残った。それだけだ。駒に封じられた巫女装束の少女の姿をした妖怪。そのイメージは、僕と住職の会話の中で勝手に出来上がった、単なる思い込みなのかも知れないのだ。

「ま、情報が少なすぎますね。もしかすると、お城将棋のこと以外にも何か重大な事件があったのかもしれないし、大橋宗珉や天野宗歩にもまだ何か秘密があるのかも。でも、もう昔のことだし真相は判りませんよ。気になるなら大橋分家のことをもう少し調べてみては如何ですか？」

そう、僕は、大橋家や分家のことについては住職や月萌から聞かされた以上の情報を持たない。どの話がどこまで本当なのかさっぱり判らないのだ。

判らないなら……そして知りたいなら、自分で調べることも必要だろう。表層だけの受

け売りの知識で自分自身の問題を解決することなど出来はしない。

将棋の定跡と同じだ。自分で調べて自分で研究して初めて、知識は自分の血肉になるのだから。

そして……僕は、もうひとつ気になっていることをDMした。

「僕の左腕や住職の髪の毛は、どこに消えたんでしょうか？」

「さすがにそこまでは……。髪の毛はともかく、懸さんの左腕の場合は痛みがないというのが不可思議ですしね。例の斧にも何か秘密があるのかも。何か、紋章とか模様とかあればヒントになるかもしれませんけど」

模様は……何かあったような気がするが全く憶えていない。そもそも、あの状況でそんなことにまで注意を向けるのは僕には無理だ。

「もしかすると月萌さんが言ったようなオカルトな闇経済が実在していて、ホントに売り飛ばしたのかもしれないし。だとすると既に食べられてるかも。その辺の『ルール』には何かしら秘密がありそうです。まさにオカルト——隠された知識ってことで」

と、そんなオチがついて。

それから、ぜいらむたんは最後にこんなDMを送ってきた。

「それと、その田沼泥鰯というお坊さんですが、今後も付き合いを続けるつもりなら……少々気を付けておいた方がいいかもしれません」

——それが、ぜいらむたんからの今日最後のDMだった。その忠告を聞かなかったことを、後に僕は後悔することになるのだが、それはまた別の話だ。

今年の上半期奨励会三段リーグの成績、12勝6敗。第3位。星一つの差で僕は四段昇段を逃した。色々あって、色んな出逢いがあって、それでも結局、僕自身は何も変わることはなく。

何も変わらない僕がそれでも手に入れたものは「隻腕」だった。……隻腕を手に入れるとは、皮肉がききすぎている。

それから。

もう一つ。

部屋の隅には住職から無期限で預かることになった「月萌の」将棋盤と駒があった。左腕の代償に手に入れたもの。僕が生まれて初めて所有することになった将棋盤と駒。それは、これから四段を目指す僕の新しいパートナーでもあった。

一ヶ月後にはまた、次の三段リーグが始まる。

「こ、今度こそ卒業できるような……気がするぞ……何となく、何となくだけど……カンだけど」

相変わらず、意志薄弱な僕だった。

了。

---

【ちょっとしたあとがき】

この物語はフィクションです。実在の人物、寺院、経典、twitter、ネット将棋サイトとは関係ありません。大橋家、大橋分家等についても同様です。

実在するツイッターさんのアカウントが登場していますが、これはあくまでネタでありtwitter上でそうしたやりとりがされたわけではありません。

また、この物語で扱われている各々のツイッターさんの「キャラ」はあくまで作者のtwitterタイムライン上における、作者の勝手なイメージを元にしてのみにてあり、万が一、読者の皆様が作品中のツイッターに対してネガティブな印象を持たれたとしても、それは全くの誤解であり、その責は全て作者に帰するものであります。

### Special Thanks.

この拙い作品への登場について、快くご協力いただいたフォロワーの皆様、誠にありがとうございました。この作品は「twitterをネタにした会話のシーン」から派生して出来あがったようなところがあり、皆様のご協力がなければ陽の目を見ることはなかったと思います。

逆に「こんな事なら言ってくれたら登場してあげたのに！」というフォロワー様がいらっしゃいましたら、大変失礼いたしました。

いくら何でもフォロワー全員登場はムリでした……。

作中のツギッター「消えた大橋分家の墓の謎」はこちらです。

<http://togetter.com/li/38257>

現役の将棋観戦記者（青葉記者）による取材ツイートの様子とそれに関連するツイートをまとめたものです。

### [参考文献]

訂正増補 真言諸経要集

図説 日本呪術全書：原書房 / 豊島 泰国

お経の本：学研 /

怪 vo.28:角川書店 / 「怪」編集部

将棋FILE [<http://homepage3.nifty.com/gororo/index.html>]

関西将棋会館[<http://www.kansai-shogi.com/museum/museum.html>]

-----  
イラスト

まるぺけ

# 将棋エッセイ

## 駒とおむすびとペンギン

駒をモチーフにおむすびをつくろう。漠然とツイッターで呟いてたらそう考えていた。将棋を知らない俺がどこまで将棋記事を書けるのか。あの日、将棋文芸をやろうと持ちかけられた時の興奮を、いまだに僕は後悔している。

半島

今回は桂馬でおむすびを作ってみようと思います。  
桂馬といえばトリッキーな動きをする駒、という印象が強い気がしますね。  
金と飛車を同時にロックオンされた時、ガチで泣きそうになったのは誰もが味わった苦い思い出です。  
今日はそんなトリッキーな食欲を誘うおむすびをイメージしてみました。（右のイメージ画像は僕たちの心の中にしまうんだッ！）



まずは材料をご紹介します。

ご飯  
マヨネーズ  
わさび  
ごま  
たくあん（しらす干しをカリカリにしたものでも可）  
わさびの香りただよう食感たのしいおむすび。  
つまりわさびマヨおむすびを食感の面でもトリッキーにしてやろうというものです。  
ちなみにこの企画で「歩」の回はたぶんないです。歩はお米だと思ってるので。



ペンギン

「歩のない将棋は負け将棋.....米のないおむすびなどありえんのだよぶるうああああ！！」

と、通りすがりのペンギンさまもおっしゃっております。  
とりあえず作ってみましようかね。

ところで俺のおむすびをどう思う？  
すごく.....おおきいです.....。



いや、手が大きいから仕方ないって。  
せっかく作ったおむすびなので気持ちのいいところまで自転車をこいで食べましようかね。  
寝癖を押さえながらだらだらと出かける準備にとりかかります。



左にあるのが今日のお供。MTB（マウンテンバイク）です。  
。  
デブチャリダーなのでこちらのほうがパンクとか安心かな。  
サスペンションというクッションが前後にくっついてるので、  
タイヤを変えればどんな道でもへっちゃらです。  
おむすびもおいしそうだし、今日はいいお散歩になりそう。  
さて、でかけますか！

お外に出ると澄んだ冬の空気。あら、良い天気ね。  
自宅脇の線路の空もすごく眩しく感じます。電車が通ってくる瞬間をお外に出ると澄んだ冬の空気。電車が通ってくる瞬間を撮ればよかったなあと若干後悔。

寒い冬にダッフルコート着た女の子と原宿あたり風を切って歩いている

小沢君が脳内で再生されますね～。王子！

そんな妄想もそうそうにチャリをこぎはじめます。



自宅をでてしばらく走るとさっそく酷道（もとい国道）に到着。

自転車は二輪扱いなので二段階で右折しなければなりません。

横断歩道があるので車体を降りて横断しました。

降りれば歩行者扱いですからね。

みなさん、自転車は車道をちゃんと走りましょう。

昼下がりの住宅地を抜けていきます。

誰もいませんね。

でもこの住宅街を抜けていくと……



やったね零ちゃん！

川のそばだよ！

まるで3月町みたいだね！



実に気持ちのいい空気！

このまま清々しい陽気を味わいつつサイクリングロードを走ります。

この日は休日だったせいか釣り人がちらほら川べりに座ってました。

川ぞいのベンチではお爺ちゃんが文庫本を読んだりも。

やっぱり水辺はいいなあ。



風もおだやかなおかげで遠くの橋が水面に反射してます。

3月のライオンみたくオシャレな町じゃないですが、それなりに文明臭はしますね。

サイクリングロードに入り、ペダルの回転数を少しあげます

。車がない代わりに後ろからの追い抜き自転車が怖いからです

。前方にはイヤホンを聞きながら走ってらっしゃるランナーの方もいるので、スピード出し過ぎにも注意します。



ススキ.....秋だわ.....。秋といえばお月さまですね。月.....？

いえ、僕は皆川さん一筋ですから。

だんだん文明も離れていき、あたりに緑が増えてきました。  
立原道造の詩にあるような草雲雀が鳴いてやまない風景です。  
。秋だなあ。

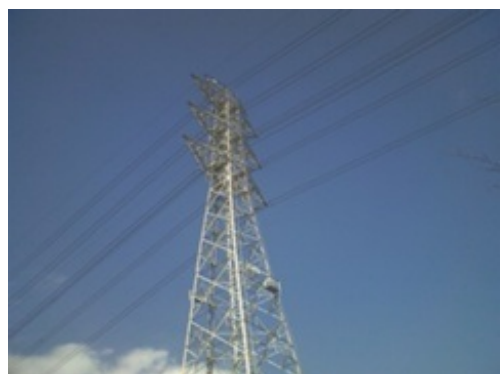


のんびり走っていると花を咲かせている桜が！  
最近の気温の激しい変化のせいか、狂い咲きしてしまったようです。  
桜よ。生き急ぐでない。

田んぼが増えてくるにしたがって、送電線も自重しなくなってきました。

送電線を見上げていると、自分もどこかへ行ってしまような錯覚をおぼえてしまう。

ジョジョ4部では送電線に生活している男がいましたが、たまにああいう生活に憧れます。読んでない人はぜひお読みになるといいと思いますよ。



30分くらいでしょうか。  
ようやく目的地のベンチへ到着。  
ここでイイ男に遭遇するのはまずいので、さくっと荷物をひろげます。



おや、写真に野良ペンギンがうつりこんじゃってますね。ははっこやつめ。

さっそくおむすびをひろげてパクリ  
ん～～！マヨがまったり～。  
ごまとわさびも喧嘩するかと思いましたが、  
ご飯の甘さをひきたててくれます。  
コリッコリとたくあんのアクセントが楽しいです。



トリッキーなおむすび、まさに桂馬(?)ですな。  
馬刺にシナモンぶっかける勇気がなかったのは内緒です。



リリリリリ……と秋虫がなき、ゲコゲコと蛙もいやがります  
。まわりはずーっと畑です。  
さびしげで落ち着く風景だなあ。  
桂馬ってやっぱり騎馬なんでしょうか。  
こうやっておむすびを食ってるといろんなことが頭に浮かび  
ます。

馬が好きだった詩人では寺山修司という人がいます。  
正直多方面なマルチタレントなので、詩人ではないかもしれませんが。  
今日はついでに紹介。

売られたる夜の冬田へ一人来て埋めゆく母の真っ赤な櫛を  
吸ひさしの煙草//たばこ//で北を指すときの北暗ければ望郷ならず  
(田園に死すより)

こういう冬の風景はニヒルな感じの歌が似合いますね (キッ)

他にはこんな文章とか

人生の大レースに  
自分の出番を待っている彼らの  
一番うしろから  
せめて手を振って

別れのあいさつを送ってやろう

ハイセイコーよ

おまえのいなくなった広い師走の競馬場に

希望だけが取り残されて

風に吹かれているのだ

(さらばハイセイコーより抜粋)

なんだか寂しくなってきました。やっぱり冬はこういう季節です。

桂馬というトリックスターを味わいに出た一日でしたが、最後はちょっとセンチメンタルになっちまりました。

では締めの一首。

《風》にして《封》なる《狂》の傾//かぶ//きありマクベスは笑む、来たれ滅びよ

(半島)

俺の中では桂馬ってかぶいてるんですね。前田慶次の愛馬・松風っぽい感じで。

## 次号予告

桂馬の次は香車だろ常識的に考えて

というわけで将棋の駒の中でも個性的な駒から潰していこうというこの企画！

はてさて読者の皆さまのおめがねにかなう事はできるのか！？

(できなきゃ打ち切りですよ旦那)



次号の駒おむペンのイメージイラスト……野良ペンギンと香車娘。この企画では「じゃあ俺が香車と桂馬以外の駒をつぶしておいてやろうじゃん？」という猛者を心からお待ち申し上げております。おむすびで広がるにわか将棋ファンの輪！

文責：半島

イラスト：若葉

「もし将棋の神様がいたら」とは、将棋界においてよく聞く問いである。そして暗黙の了解として、将棋の神様は最も将棋が強い存在と想定されている。ここでは神様は「超越」と同義のように感じられる。将棋の強さを探求するうえでの極限的な存在、それが将棋の神様なのだ。

しかし私は、このイメージに違和感を覚える。確かにある人は強さを求めるために、その先に将棋の神様を見るだろう。しかし将棋の本質は強さだけで表わされるようなものではない。将棋はゲームであり、いかに楽しむかということが重要である。超越的な強さを持った神様は、挑むべき相手もおらずさびしがっていることだろう。結果として、強すぎるがために将棋を嫌いになるかもしれない。

さらに言えば強さに限ってみても、「将棋の強さとは何か」という問題がある。ある人が強いと言われるとき、その人が「誰に勝っているか」が重要である。そして勝った相手の評価もまた「誰に勝ったか」によって計られている。つまり強さとは常に相対的な評価に基づいてされるのであり、絶対的な強さを判断することは非常に難しいと想定される。例えば名人には全勝していても全体ではそれほど勝っていない人、勝率がすこぶる良くても、全くタイトルに届かない人は、どれほど強いと言えるのか。どのような結果をどのように評価するのか、という主観が「将棋の強さ」の判断に大きく影響するのである。

極論を言えば、絶対的な強さを誇る将棋の神様というものが実在するとしても、われわれがその強さを判断するだけの絶対的な方法を持たないならば、絶対的な強さそのものが存在しないも同然なのである。

私はここに、一つの仮定をして考察を試みようと思う。将棋の神様が存在するとして、彼が将棋の神様であるためには将棋の本質を理解しているのではないかと。その神が理解している将棋の本質とは何か、その一片でも私は覗いてみたいのである。

まずは、道具から考えてみたい。将棋とはまず、遊ぶためのツールであると考えられる。その意味では道具的特性を備えている。単に盤や駒という実際の道具のみならず、そのルールや慣習も遊ぶための道具として利用される。ハイデガーはSein und Zeit (『存在と時間』)において、道具の例としてハンマーを挙げ以下のように語っている。

ハンマーで打つことは、単にハンマーの道具性格について一つの知識を持っているということのみでなく、この道具には打つことよりもっと適切なことはおよそ可能ではない、という性格が帰せられている。このような使用的交渉においては、配慮の働きはその時に応じて道具を構成している「のために」の下に属している。(Heidegger, 1927, S.69)

将棋を行うために用いられる盤や駒、駒台といった道具は、適切な使われ方をすることによっ

て初めて目的を果たすことになる。どのように使えるのかを知っているかどうかではなく、実際にどのように使われるのか、が重要なのである。しかしここで言う「適切」とは何であろうか。将棋に関する道具は、将棋をするために作られていることは明白である。しかし「将棋をする」とは何か、どこまで具体的に考えられているだろうか。プロのタイトル戦に使われるのと、初めての人がルールから覚えるのに使うのとでは同じ将棋でも全く内容が違う。またこれらの道具を使ってはさみ将棋や将棋崩しをするのも「誤った使用方法」とは言えない。製作者が想定していない使われ方をしても、将棋の道具は「本来的には将棋をするために作られている」という共通理解のもとに、将棋の道具として存在し続ける。これらの道具が将棋からかけ離れた使われ方をした時――例えば盤が踏み台として使用されるようなとき――道具に帰せられた性格と道具とは乖離し、将棋の道具は将棋の道具としての存在性を失うと言える。

ただ将棋に関するツールが用意されるのみならず、それをを用いる人間がいて将棋は実在することになる。そして将棋は二人で行うゲームであり、常に二人の関係性が問題となる。それは二人の過去の関係性だけでなく、対局を続ける中での関わり方、そして道具を介した関係、道具そのものに対する関係も将棋を形成する要素である。

また当然のことながら、将棋のルールも重要な関係性の一つである。将棋のルールは、ゲームに関する基本的なルールと、ゲームが行われる上での環境設定という二つのルールが存在する。一つ目のルールは駒の動かし方や勝負の決着の仕方、いくつかの反則といったものである。これらは基本的に不変だが、絶対不変というわけではない。例えば千日手の規定はプロにおいても何度か変わっている。また持将棋に関しては複数の決まりがあり、次に挙げる環境設定の方に含まれるとも考えられる。

二つ目の環境設定とは、その対局が行われる上での条件付けである。将棋の基本的なルールには、持ち時間や対局場所などの決まりはない。それらは対局によって変化する条件、いわば対局の環境である。例えばプロの対局であれば「持ち時間四時間、使い切ったら一手60秒未満。先手後手は記録係の振り駒によって決める。10時対局開始、12時から昼食休憩、18時から各一時間の夕食休憩。遅刻の場合持ち時間から遅刻した三倍の時間が引かれる」などである。友達同士でする場合はほとんどこれらの設定が無かったり、逆に「王手と言わなければいけない」などのプロではありえないローカルルールが存在することもあるだろう。これらのルールは、将棋の本質にかかわるわけではないが、将棋が行われている場では非常に重要な条件設定である。将棋そのものを考えれば、こちらのルールは可変的であり本質に影響しないと考えることもできるだろう。しかし実際に将棋が指される場では、一つ目のルールと同様にとても重要なものである。この環境設定があることにより、将棋はプロ競技として成り立ち、アマチュアも多くの人が楽しめ、またきちんと決着するゲームとして成立している、と言える。これらの環境設定が足りないために、なかなか次の手が指されずに対局が終わらない、待ったをされたがなし崩し的に許してしまう、持将棋模様だがどうしていいかわからないのでとりあえず引き分けにした、などの事態を経験した人も多いのではないか。

ここまで見てきただけでも、将棋の本質に関わりそうな事柄はいくつもあった。さらには近年コンピューター将棋の活躍により、将棋を指す主体の存在論的な在り方というのも考察の対象に

入れざるを得なくなった。コンピューターは人間と同じようにルールを守るが、対局に関する意志というものが無い。勝ちたいから指すのではなく、勝つことが目的であると設定されているから勝つための手を指すのである。その意味では将棋を指す主体そのものが道具になっている、とも言える。またコンピューターには人間に存在するいくつかの場における関係性が存在しない。昼食休憩の後に眠気が来ることもなければ、扇子の音に文句を言うこともない。部屋の照明にも、頭頂部に冷却材も、全く関係ない。ただ局面のみが、コンピューターを将棋へと駆り立てる。また対局するコンピューターとはいったい誰なのか、という存在論的問題もある。コンピューター将棋大会において、いくつものコンピューターをつなぐクラスタ構成のチームが登場している。また、合議制を使用したソフトもある。果たしてこれらは「一人の対局者」なのだろうか。それとも対局が対一という人間的な見方が古いのであって、「一つのソフトから導かれる一つの手」というコンピューター独自の発想が誕生しただけなのだろうか。

もはや旧来の枠組みだけでは将棋をとらえることができないのかもしれない。そしてここまでの考察から浮かび上がってくるまっとうな一つの疑問がある。それは「そもそも将棋の本質などというものがあのか」というものである。問いの中には、問い自体が間違っていることが多々ある。この場合、在ると前提して内容を検討しているものの、そもそもそれが無い、という可能性についても考えなければならないのである。

この世界に将棋が存在することは確かである。われわれはそれを知っているし、そのルールを説明することもできる。しかし将棋が何であるか、それは人によってとらえ方が大きく違うだろう。プロかアマチュアか、といった単純な違いもあるし、プロの中にも職業としてとらえている人、趣味だけど仕事だと考えている人、好きだったけれども嫌いになって、それでも仕事だからやるもの、などと認識に大きな違いがあるだろう。アマチュアにとってはもっと多種多様なとらえ方がありそうである。そのうちの誰かが本質に近く、誰かが遠い認識を持っている、などということが言えるだろうか。

むしろ逆ではないか。それらの人のとらえ方が、将棋の存在性を規定しているのではないか。それぞれの人のための将棋の在り方は、どれも嘘ではない。私とあなたの認識が異なるからと言って、どちらかが将棋でないものを行うわけではない。そしてそれぞれの認識と認識が影響し合い、将棋に関するいくつかの核となる認識を作り上げていく。将棋とは楽しいものである、美しいものである、恐ろしいものである。それらの認識は、楽しいものとしての将棋、美しいものとしての将棋、恐ろしいものとしての将棋を準備する。準備された認識をわれわれは再認識し、複数の認識から新たな認識を作り出す。

これらの認識は、将棋の本質に近付いたり離れたりするものではない。将棋とは様々な認識を生み出す根であり、それらを繋ぎ止める手である。将棋によって目覚めた感情が、その人を将棋へと向かわせる。その感情は時にその人を将棋から離れた場所へ向かわすかもしれない。将棋の手は長く伸び、時にはその感情を手放すこともあるだろう。しかしその手がかむまた別の感情が、その人を将棋へと呼び戻すこともあろう。そこでその人は最初の感情を思い出し、新たに複合的な感情を創出することだろう。感情を中心に見れば、将棋はそれらを生み出すきっかけに過ぎない。しかしこれまで述べてきたように将棋には様々な事柄が関わっており、それらが栄養



となって太い幹が育まれている。将棋の木は人によって見え方が違うだろうが、多くの人がある木を必要としていることにより「将棋の木である」という一点の認識は守られている。

実は、私の当初の仮説は将棋とは要素の一つである、というものだった。将棋の本質がわれわれに触れるのではなく、将棋というレンズを通して世界の本质が見えてくるのではないかと考えたのである。しかし考察していくうちに、もっと別のものであることが分かった。将棋はレンズの役割も果たすが、それ自体が変化するものである。多くの人を将棋へと導くと同時に、多くの人の影響でそれ自体が別のものへと変化する。使い方によっても触れ方によって全く違う影響を受けるし、見える姿も全く違う。

将棋とは何か。この答えに一番しっかりと来るのは「世界」である。ハイデガーの言うような本来的な世界とまではいかないが、私たちの世界とは別の在り方をする、一つの存在様式と考えるとわかりやすい。われわれは将棋という世界を様々な角度から覗くことができるし、その一部に触れることもできる。駒の動き方や勝負の付き方など、その世界の一部はすでに解析されている。しかしその世界がこちらの認識自体によって変化するため、全体像をとらえることは困難である。ある人はそれをとらえたいと目を凝らし、ある人は必要な部分だけを知りたいと耳を澄ます。またある人はその世界の歴史に興味を持ち、解析できる定点を探す。新たにコンピュータはこれまで触れられなかった将棋の世界に接触し、世界自体に大きなうねりを発生させている。

ここで、冒頭の言葉に立ち返ろう。「もし将棋の神様がいたら」私の用意した答えは、「それは別の世界そのものである」そこには極限的な強さを見ることができようが、それはこちら側の世界の住人がそのように見たいから、向こうの世界でもそれを準備しているように見せるのである。本質があるかないか、という問い自体がこちらの世界のルールに基づくものであり、あちらの世界ではその問い方自体が成立しないような世界かもしれない。ある人が追い求める神様の強さは、神様によって受け止められると同時に、神様によって遠くへと引き離される。その人が将棋を楽しもうとすればするほど、神様は答えを届かない距離に見せてくれる。ある人は将棋を指しさえしないが将棋に関わるもろもろを楽しんでいるとする。すると神様はもっと楽しめる可能性を示唆する。将棋の世界はそうして、人々を未知なる領域へと誘う。そしてこの不定形な世界の特徴は、確固とした軸があることによる安定感と、様々なとらえ方や接し方の可能性を許容することによる安心感が存在することである。この世界は遠くにある神聖なものではなく、その入り口は非常に身近にあり、身近なままでもその広さを味わうことができる。

便宜的にこの世界を、将棋的世界と呼ぶことにしたい。この世界はわれわれの世界と別の在り方をしており、実在を前提としない、将棋的な法則によって成り立っている。この世界は我々の世界の至る所に入り口を持って触れ合っているが、多くの人にとっては感知することはまれなものである。将棋的世界は足を踏み入れた者には様々な姿を見せ、そうでないものには時折その表層を晒す。

この世界は深く広いため、全てを知り尽くすのは難しい。それでも深く関わろうとする人は、一つの要素について探求しようとする。その一つが「強さ」なのであろう。将棋的世界における「強さ」は、重要な要素であり、また普段はその姿をとらえやすい。勝負に勝った者は強く、

負けた者は弱い。勝った者がなぜ勝ったのかを探れば、強さは見えてくる。しかしまだ表れていない、誰よりももっと強くあるための絶対的な「強さ」は、その存在すら疑わしいものであるため、探求は困難を極める。それは実在自体が怪しいだけでなく、不変であるかどうかも疑わしい。将棋的世界はわれわれの世界と密接にかかわっているため、相互に影響し合っている。われわれが将棋的世界の事実を知ったとしても、われわれの世界からの影響で将棋的世界そのものが変化して、その事実は過去のものとなる。われわれが探究すればするほど、される対象が失われるという事態が想定されるのである。

一つの例を挙げておこう。前述したように、千日手の規定は変化してきた。千日手は勝負を決めるうえで重要な要素であり、千日手の規定が変わることにより勝負の質そのものが変化すると考えられる。絶対的な強さがもし存在するとしても、規定が変わってしまえば絶対的な強さとは言えなくなる。もし必勝手順が理屈として存在するとしても、ルールが可変的であれば絶対的ではない。現状のルールにおける必勝手順が見つかってルールが可変的であるという事実がある限り、将棋の必勝手順は原理的に存在しないのである。われわれの世界と将棋的世界が独立していないために、影響の連鎖は断ち切ることができない。実際には環境設定もルールとして存在するため、対局ごとに最も勝てる条件は異なる。「もし正しい手順を全て記憶できて、体力も無尽蔵で、何事にも影響を受けない強靱な精神力があれば」という条件は、実現不可能であるため想定しても仕方がない。それらは将棋を成立させる世界構造の外側にある、空虚な条件である。

強さを求める人は空虚な条件にいかに近づくかを考えているように見える。必勝手順などではなく、環境設定にも負けない記憶力、体力、精神力を欲しているはずである。絶対的なものを想定してでもできるだけの相対的な強さを追い求める、それもまた将棋における楽しみの一つとなるのである。

あくまで世界とは比喩であり、将棋が何たるかをこの言葉によって正確に把捉したとは考えられない。しかしわれわれの将棋に対する接し方から導き出せば、この表現が最も適切ではなかろうか。本稿を読んでいる方は、この世界の魅力に多少なりとも触れた人であると思う。将棋的世界に触れながら、将棋的世界を育てていく、そのことをこれからもっと多くの人を楽しんでいければ、この言葉を本稿の締めとしたい。

#### 参考文献

Heidegger, M. (1926), *Sein und Zeit*. Achtzehnte Auflage.

# 月子のチェス日記 「チェ的」

今回はnyankomusumeさんに挑戦です。挑戦した時のレーティングはにゃんこさんが1760、私が1406。

ハンデとしてドローと36moves(71手以上)ならば私の勝ち、というルールにさせていただきました。さて、どうなったでしょうか.....(棋譜は後ろにありますのでご参照ください)

**goldbook**(月子) よろしくお願ひいたします。

**nyankomusume**(にゃんこ) よろしくです。月子.....**R1400**って既にビギナーの域を天元突破してるよね？

**nyankomusume** にゃんこむすめブログでしっかり勉強した成果だと思うの。エライぞ月子！

**nyankomusume** そう言えば、月子に勝ったら今履いてるニーソをくれるって、ぜいらむたんが言っていました。

**goldbook** とりあえず将棋の経験が生きている気はします。

**goldbook** ニーソは.....作者と相談します。

**nyankomusume** 「月子のツインテール定跡」で勝ちまくってるらしいじゃなイカ！一体、どこのカリン塔で修行してきたんだ...

**goldbook** そういえばあの塔にもにゃんこ師匠が.....



**nyankomusume** わ！びっくりした！

**nyankomusume** 「開戦はポーンのぶっつけから」ってやつですね

**goldbook** 女王様がお転婆なんです。

**nyankomusume** お転婆な女王様って大好きです (◎◎)

**nyankomusume** 月子がチェスの勉強してる時、三東先生はどうしてるの？ゼノギアスしてるの？

**goldbook** 先生は将棋年間に漫画を挟んで読んでます。

**nyankomusume** 漫画か。三東先生は、こち亀を読んでいるのか…。ドラゴンボールを読みなさい。

**goldbook** 女王様の帰還です……

**nyankomusume** そうか！

**nyankomusume** 36手制限を利用して長引かせ作戦イクゾーと見せかけておいて**3.d4**といきなり開戦

**nyankomusume** おおっ！？と喧嘩を買ったにゃんこむすめの切っ先をかわすかのように一転してクイーンを引き上げ再び持久戦狙い……見事なオープニングだ。

**nyankomusume** 月子の腹黒さがよく表れてるよね(´▽`)!

**goldbook** は、腹黒くないですっ

**goldbook** そして妻が帰ると同時に王様逃避……

**nyankomusume** え？月子のクイーンとキングは結婚してるの？にゃんこのクイーンは独身だよ？

**goldbook** え……複雑な家庭なんですね……

**goldbook** うちの両親もそうです

**nyankomusume** そう言えば…月子のお母さんってポニーテールが似合うよね！？

**goldbook** え……っと……ではそういうことに。

**nyankomusume** 実は月子のチェス棋譜、全部舐め回すように見たんだけど…

**nyankomusume** クイーンサイド・キャスリングがお好き？

**nyankomusume** いや、にゃんこもそれ好きなんだけど、なかなかチャンスがないんだよねー。

**goldbook** 居飛車党なので左に囲いたくて……

**goldbook** 舐め回す……

**goldbook** そしてソムリエ(※)にクイーン取られました……

**nyankomusume** ごめん！にゃんこが舐めたせいでクイーン取られて！

**nyankomusume** いや待て…。ソムリエばっかずるい！にゃんこにもクイーンちょうだい！

**nyankomusume** あ、今ごろ何ですが、駒**zone**的コメント。

**nyankomusume** 1e4 に対する c5から始まるオープニングを「シシリアン・ディフェンス」と言うのじゃ！

**nyankomusume** 天才ボビーフィッシャーが得意にしてたんだよ？

**goldbook** シシ知りませんでした……

**nyankomusume** でね、最近洋書も平気で読んじゃうソムリエがシシリアン対策の本を買ったらしいんだよ… (ダジャレはスルー)

**nyankomusume** ソムリエは研究の成果をブログで公開して欲しいんだよ。

**nyankomusume** つか、ソムリエネタばっかし。駒**Zone**への出演依頼が必要だぜ…

**goldbook** ですね……次回はチェス講座を……あれ、将棋雑誌のはずですが……

**nyankomusume** ほらっ！グローバルイズムだよ！駒**Zone**は世界へ羽ばたくんだ！

**nyankomusume** 月子さん、**30**手以上のゲームが多いね。

**goldbook** クイーン交換して相手を混乱させるのが多いからかもしれません。

**goldbook** ナイトだけ残るパターンが.....

**nyankomusume** うっかりしていきなりメイトされて負けるのがない。粘り強い。

**nyankomusume** と、いうことで将棋の棋風はチェスのそれに影響する。という説を唱えてみる

**nyankomusume** ナイトを残すなんて！

**goldbook** そんなこと言いながら数の攻め！

**nyankomusume** ナイトもちゃんと使わナイト！（いやっ！スルーしちゃダメえ）

**goldbook** ナイト流空中戦になりますね.....

**goldbook** 藤井先生のレグスペのような陣形に.....

**nyankomusume** 数の責めは将棋でもチェスでも基本です（急に真面目）

**goldbook** 将棋以上に受け駒がないですよね.....

**nyankomusume** もうすぐ落ちます。

**nyankomusume** いや、金曜ロードショーでコナンやるからとかそういうわけでは...

**nyankomusume** だって！灰原さんが待ってるから！

**goldbook** 事件のにおいがしますよ.....

**nyankomusume** え？え？え？

**nyankomusume** ...あ、判った。心理的にびびらせようとかそういう**腹黒**逆転術だな！

**nyankomusume** おは。寒い。でも冬は好き。雪女が可愛いからー。

**nyankomusume** 脳内で逆算してみたらどうやら**36**手が厳しくなってきたよ！

**nyankomusume** すこし

**nyankomusume** すこし

**nyankomusume** すこし

**nyankomusume** すこしを**3**回も送信してしまった！（ただのミス）

**nyankomusume** 駒.Zoneのためにすこし真面目な話を

**nyankomusume** チェスは「逆算のゲーム」と言われます。

**nyankomusume** 理想とする終盤の「形」をイメージしてそこから逆算して計画をたて、実際の手を選択するのです。

**nyankomusume** ま、実戦ではなかなかそう上手くは行かないんですけど。

**nyankomusume** 将棋ではどうですか？

**nyankomusume** というか、**36**手以内にこっちが負けになる変化が見えてきたよ！言わないけど。

**goldbook** 将棋ではあるんですけどねえ.....



**nyankomusume** キングを広くしながらクイーン取りを仕掛けるとか...

**nyankomusume** いわゆる「味がいい」ってやつで。

**nyankomusume** 将棋強い人はチェス始めてすぐこういう手が見えるんですね。

**nyankomusume** 月子超絶かわいいよ月子！（心理作戦）

**goldbook** にゃんこさんもかわいいですよー

**nyankomusume** そ、そんなっかわいいだなんてっ//酔っているのね？（中の人）

**goldbook** .....じ、実戦的には投げ時ですね.....

**goldbook** さようならルーク.....

**nyankomusume** ルーク「月子っ！...俺まで捨てるのかっ！」

**goldbook** 振りクイーン党のルーク損は想定範囲内らしいです.....

**nyankomusume** ルーク「俺、香車扱い!？」

**nyankomusume** 洗濯終わったあ！

**nyankomusume** そう言えば、月子は洗濯とかどーしてるの？

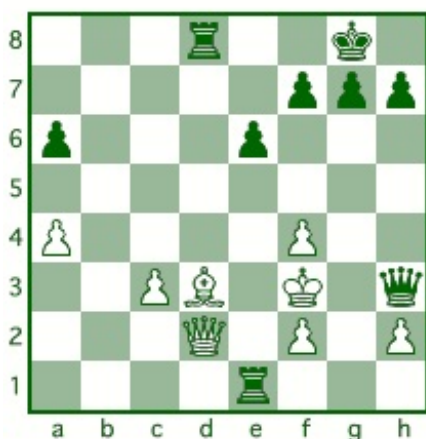
**goldbook** せ.....先生が.....

**nyankomusume** そうか...月子が将棋に集中出来るように...いい先生だなー

**nyankomusume** いや待て。原作では、確か対局がなくて暇なだけだったような。

**nyankomusume** でな、月子...

**nyankomusume** チェックメイト♡



**goldbook** うーん.....参りました.....

**goldbook** わ.....チェックメイトって勝手に対局終わるんですね。

**nyankomusume** (36手ルールが絶妙でした)

**nyankomusume** (途中「長引かせるだけの手」もあったように思いますがそれをしない月子はさすがだ！)

**nyankomusume** (というか、あちこち危ない筋があってホントはドキドキでした^^;)

**nyankomusume** さて.....ニーソもらおうか！

**goldbook** うーん、絵師さんにニーソを描いてもらうしか.....

というわけで、対局は終了です。

棋譜

1.e4 c5 2.Nc3 a6 3.d4 cxd4 4.Qxd4 Nc6 5.Qc4 e6 6.Be3 b5 7.Qe2 Nf6 8.O-O-O Bb4 9.Bd4 Nxd4  
10.Rxd4 Bxc3 11.bxc3 O-O 12.Nf3 Qc7 13.Qd2 d5 14.exd5 Nxd5 15.Kb2 Bb7 16.Be2 Rfc8 17.Rd3  
b4 18.cxb4 Nxb4 19.c3 Nxd3+ 20.Bxd3 Rab8 21.Kc2 Bxf3 22.gxf3 Qb7 23.Be4 Qb2+ 24.Kd1 Rd8  
25.Bd3 Qa1+ 26.Ke2 Qxh1 27.a4 Rb1 28.f4 Qf1+ 29.Ke3 Re1+ 30.Kf3 Qh3#

にゃんこ 月子は将棋よりチェスの方が向いている。二次元美少女にはチェスがよく似合う。

月子 では.....チェスの弱いプロを見つけて弟子入りしてきます.....？

にゃんこ .....そんなことより、ニーソ... (ぼそっ

月子 そういうところは.....ぜいらむさんそっくり.....

にゃんこ いや.....実は、ぜいらむに「月子のニーソもらってきておくれ」って頼まれたんだ... (暴露話)

将棋では、飛車と角の活用を考えるのが一つのセオリーだと思うのですが、月子さんのチェスはそれを応用して(?) クイーンとビショップの活用を考慮してるように感じました。

月子さんは、クイーン=飛車、ビショップ=角。でも、ルーク=香車の扱いはヒドいと思います (爆)

月子 ルークの扱いもちゃんとしようと思います.....。にゃんこさんはさすが駒の集め方がすごかったです。少しでも近づけるよう、チェスを続けていこうと思います。

にゃんこ 嬉しい！>「チェスを続けていこう」頑張って「ツインテール定跡」を完成させてねっ！ (定跡完成させたら月子はマスターだ)

月子 頑張ります！

※ 将棋の序盤に詳しいソムリエさんがいるのですが、チェスにも詳しいのです。



桜 「さあ、始めました、『桜の激悪逆転講座』、講師は僕、木田桜です。アシスタントは川崎六段です」

川崎 「いやあの、これ何？ どっかで聞いたことあるようなタイトルだし……」

桜 「この講座は高段者以外のアマチュア向けに、わかりやすく将棋で逆転する方法をこっそり教えちゃうコーナーです」

川崎 「はあ」

桜 「プロの講座はどうしても難解ですからね。アマチュアの役に立つ、心理的なゆさぶりというのをここでは扱うわけですよ」

川崎 「何か胡散臭いなあ」

桜 「とりあえずやってみましょう。第一問！」



図は△2六玉まで

川崎 「あれ、意外と接戦じゃない」

桜 「まあ、小手調べということで。いい、プロ的思考を捨てて、アマ時代を思い出して最短の勝ちを考えてみて」

川崎 「うーん、先手は詰めろだからなあ。後手はちょっと詰まない。と言って受け駒もないし……」

桜 「……はい、タイムアップ！」



川崎「え」

桜 「では、正解手順を発表しますね」

第一問 図以下

▲ 4八玉△ 6八角成！▲ 2七歩△ 3五玉▲ 5五龍 まで先手勝ち

川崎「えーっ！ 頓死じゃない！」

桜 「ノンノン。深い読みに基づいているのです。後手玉は角がどけば詰み。でも王手で飛車を取られると先手玉が寄り。そこで早逃げして、飛車をおとりにするわけです」

川崎「だからって後手は飛車を取らなくても。他の詰めろでも勝ちそうなのに……」

桜 「そこが大事なんです。アマチュアにとって、**ただの角はとっても魅力的**なんです」

川崎「うーん……」

桜 「あと後手は詰みを逃れてほっとしたところですからね。急に受けの手を指されたら正しく対応するのは難しいわけです」

川崎「なんとなくわかってきたぞ、この講座……」

桜 「では第二問！」



図は△ 5五角まで

川崎「これは先手苦しい。▲ 4三銀成とかだと、△ 2四玉でもだめそう」

桜 「ふっふっふ、わかってませんなあ、川崎君」

川崎「な、なんだよ」

桜 「いい、これだけ有利な局面で後手は金取りに角を打った。つまり、そういうことさ」

川崎「……どういうこと？ あ、そうか。一回歩成りが利くから……でもなあ……」

桜 「では正解を。ちなみにちゃんと三手の読みで正解ですよ」

第二問 図以下

▲ 2二歩成△ 3三角！▲ 2三と まで先手勝ち

川崎「えーっ、こんなのあり？」

桜「冷静に考えてみて。後手は金取りに角を打った。そしてと金を作っても金は浮いてる。取るよね？」

川崎「いやでも詰んじゃったじゃないか」

桜「そこがプロの盲点だよ。アマはある目的のために指したら、その目的をなかなかあきらめられないものなんだ」

川崎「そんなものかなあ」

桜「ちなみにこれらはすべて実戦譜から作成した問題です。有段者でもこういうことが起きるのでしょ」

川崎「つまり、相手の狙いを察知して、うまい具合に罠にはめれば逆転も起こる、ということかな」

桜「そういうこと。プロと違いアマの場合大逆転も起こりやすいので、悪い時は我慢も大事ですが『一発大逆転大暴投』を誘発するのも大事なんですね」

川崎「しかしやっぱり胡散臭いなあ」

桜「まあ、あくまで参考ということで。では、最後に第三問を出題してお別れにします。後手の立場からお考えください。答えは巻末に。ではまた～」

川崎「それではまたの機会……あるの？」



図は▲ 7九同金まで

僕や川崎が登場する『レイピアペンダント』はこちら<http://p.booklog.jp/book/18766>で！

## 参加者紹介

---

### 清水らくは(小説・短歌・物語・エッセイ)

半年空白の人。来年度からは授業数も増えそうな倫理学講師。皆様のおかげで私の負担が減りました。そういえばツクモさんの登場にびっくり。月子さんにライバルが増えてうれしいです。今回詩がなかった理由は次号でお伝えする予定です。

### 半島@一首入魂(短歌・エッセイ)

Q. どうして半島さんはまともな短歌を書こうとしないんですか？ A. 愛って何だと思う？ 言葉にできないだろう？ 君の心の奥底に眠る小宇宙（コスモ）を爆発させたがごとき皆川愛も言葉にできないはずだ。短歌っていうのはLOVEなんだよ！ ハートなんだよ！ 俺だってこんな寒中短歌が書けるっていうからこんな寒い湖に入ってしじみとってるんだよ！ できるできるできるぜっったいできる！ 将棋にわかな俺でも短歌書いたんだからできるって！ 諦めんなよ！！ お前は今日から！ 寄稿者だ！！

### まるぺけ(表紙・挿絵)

まるぺけです。表紙と挿絵を描かせて頂きました。遅筆ですいませんでした！（平身低頭）今回新しく、皆川さんと月萌たんを描かせて頂きました。皆川さんはツンデレ、皆川さんはツンデレと唱えながら描きました。そして、月萌たんは賢いけどアホの子、多分アホの子（ぜいらむ先生すいません）と唱えながら描きました。みんなみんな可愛いです。もちろん月子さんも！びしょじょが沢山描けて楽しかったです。

### 贅楽夢(小説)

将棋をテーマにした小説を寄稿しよう……と思ったのですが、気がついたら妖怪ウンチクになってしまってすみません。これが私の仕様です。

編集のらくはさんには、ご多忙のところ丁寧にかつ親切に色々ご指導いただき感謝の念一杯です。本当にありがとうございました。まるぺけさんからは素敵なイラストをたくさん描いていただきました。このイラストがあれば本文はいらんんじゃないかとさえ思えてくるクオリティに感激です。ありがとうございました。

今後「駒.zone」がさらに成長し、将棋ファンの新たな楽しみの「場」となることを祈念してやみません。

### ikkn(小説)

音声工学の人。日々、音声信号処理の研究をしているが、実態は無職。

今回小説を書いていたらストレスで髪の毛がどんどん抜けたので、もう小説は書かないと心に誓った。

### しゅう(Love譜)

将棋クラスタの悪ノリ担当。毎朝にゃんこむすめと月子さんを起こす役目を仰せつかっている。棋力は将棋倶楽部24で10級から12級を行ったり来たり。家庭では歩三兵の後手。室田さん理想なんですけど。時折発する本業関係の真面目ツイートを将棋クラスタの方がどう感じておられるのかを気にしているが、むしろ本業関係のフォロワーの方が将棋ツイートをウザがっているであろう事を気にした方がいい。

### にゃんこむすめ(短歌・チェ的)

今まで気が付かなかったのが不思議なくらいだが、月子さんはチェスの天才だった。

にゃんこむすめのブログを読むだけでギコチェスを破る実力を身に付け、ハリーポッターのDVDを観ているうちにchess.comでR1600台のプレーヤーを倒すまでに成長していった。

きつとにゃんこむすめが師匠でなくても、月子さんは強くなっていったらう。.....三東先生の気持ちがよく判った。月子さん、これからもチェスを続けてね♡

### 跳馬 (Keishogi) (短歌)

こんにちは、地味に2度目の登場です。前回書き忘れましたが、実は高校生です。柄にもなく短歌やってみました楽しいですね。これはよかばい。折角なのでもう一句。 君と指す七百円のミニ盤に二人っきりの宇宙広がる

### 若葉(挿絵)

未熟者ですが、楽しく描かせて頂きました。

>3月のライオンでは、あかりねえさんと宗谷が好き。

### 匿名希望(Love譜)

(本人の希望によりノーコメント)

### 金本月子(チェ的・広報)

### 木田桜・川崎周(講座)

### 莓りい(写真提供)

## 後書き

---

ついに第三号まで来ました。三号というのは何に付けても大事なものです。ドラクエはIIIが大ヒット。私の好きなICEというアーティストは三枚目のアルバムが傑作でした。その他には...えー、すぐには思いつきませんが、とにかく三号がうまくいくか行かないかで今後のあり方というのが変わってくるのです。

そして今回、えらいことになりました。多くの方の寄稿により大ボリューム。かつてフリーペーパーで10万字を超えたものがあったのでしょうか。いやあったとは思いますが。はっきり言って私が一番楽しみました。ニヤニヤしながら編集しました。いまだにニヤニヤなので変人扱いされます。

ギャグのような話から始まった『駒.zone』ですが、ようやく「将棋文芸でみんな楽しもう」という形になってきた気がします。将棋の楽しみ方がたくさんある、ということをお皆さんに教わっています。だから私も、楽しみ方の一つを提示できればと思いました。文芸側からも参加して、将棋に興味を持ってくれた方がいます。全く関係ないところで、駒.zoneそのものに興味を持ってくださった方もいます。色々なもののきっかけになって、いろいろな可能性が広がれば。

今号も協力してくださったみなさま、ありがとうございました。次号も楽しくやっていきたいと思っておりますので、よろしく願いいたします。ご感想などあれば、ぜひコメントをお願いします。

ツイッター

広報 @tsukiko\_sann

編集 @rakuha

ホームページ

[r-borders : 駒.zone](#)

最後に。

全ての作品は、著作権を放棄していません。作者が権利を保持しています。転載などは控えてくださりますようお願いいたします。



正解 図以下

△3三角 ▲6七角成！△8七桂 まで後手勝ち

図では先手玉が固く、なかなかとっかかりがありません。

その一方先手は王手も詰めるもいっぱいかかりそうです。

そこで迷いに迷って、28秒まで考えた「ふり」をして△3三角と打ちましょう。

なんとなく受けに利かせようとしたものの、ちょっと空ぶった……ようにも見えますね。

そこで先手は「しめしめ、そりゃもう受けるスペースもないもんね。角成ってぼちぼちいけば受けなしじゃね？」

と思うわけですよ。ええ、思うんです。

そこで△8七桂。絶望の到来ですね。

大事なのは、**最後のお願いはわかりにくく指す**こと。

単なる詰めるでは、受けられて終わりです。

「あ、困ったー、受けがないー、仕方ないなー」という演技が大事なのです。

というわけで、本流から外れまくったこの講座、続くのでしょうか。続いた場合、また次号で！



	z	
e	駒.	o
	n	

v o l . 3